

教員研修の高度化に資するモデル開発事業 (文部科学省)

教材配信ソリューションを活用した 校内研修支援・教員研修の高度化プログラム開発 実施報告書



2024年3月

愛媛大学 教育・学生支援機構 教職総合センター

様式第 15（無断複製等禁止の標記）

無断複製等禁止の標記について

委託事業に係る成果報告書の無断複製等の禁止の標記については、次によるものとする。

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として、愛媛大学が実施した令和4年度教員研修の高度化に資するモデル開発事業の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

はじめに	2
事業の実績	3
1 事業の実施日程	3
2 事業の概要と主な内容	4
(1) 事業の概要	4
(2) 「校内研修支援プログラム」で開講した講義の内訳	5
(3) 「現代的課題対応実践力高度化研修プログラム」で開講した講義の内訳	7
3 各プログラムへの参加状況の詳細	9
(1) 「校内研修支援プログラム」への参加状況	9
(2) 「現代課題対応実践力高度化研修プログラム」への参加状況	10
(3) 講義動画等の作成	12
(4) 各学校における「校内研修」の開催状況	13
4 各プログラムに関する調査	16
(1) 量的調査の概要	16
(2) 質的調査の概要	17
5 「校内研修支援プログラム」量的調査の分析	20
(1) 【調査 A】 【調査 B】 について	20
(2) 【調査 C】を用いた分析を通して	29
(3) 【調査 A・B】と【調査 C】の比較による分析を通して	34
6 「現代的課題対応実践力高度化研修プログラム」量的調査の分析【調査 D】	37
7 NTT EDX UniText の利用ログを用いた成果分析【調査 E】	42
(1) 利用頻度に着目した分析	42
(2) 利用ログを用いた各講座のアノテーション分析	44
(3) 受講行動のアノテーション分析による研修評価と改善の可能性	61
(4) よく閲覧している人とそうではない人の比較	66
8 質的調査の分析	69
(1) 協力校校内研修実施後のインタビュー調査分析【調査 F】	69
(2) プログラム検討会での発言の分析【調査 G】	74
全体考察・まとめ	78
おわりに	81

はじめに

本書は、「教員研修の高度化に資するモデル開発事業（文部科学省）」の委託を受けた「教材配信ソリューションを活用した校内研修支援・教員研修の高度化プログラム開発」の実施報告書である。

この事業は、教材配信ソリューション(NTT EDX UniText)を活用して、研修支援及び研修高度化プログラムを開発することを目的として、三つのサブテーマを遂行することとした。第一は、校内研修担当者(研修主事や主任)を対象とした研修支援プログラム(対面研修及びデジタル配信)の開発である。第二は、現代的課題対応実践力高度化研修プログラム開発(対面研修及びデジタル配信)である。第三は、研修評価分析(教員評価分析、データ解析型研修利用分析等)による汎化モデルの検討である。

この事業を遂行するために、愛媛県教育委員会及び松山市教育委員会と協力体制を整え、二つの教員研修センターを中核とする2ハブ型連携体制を構築した。まず、校内研修担当者を対象とした研修支援プログラム(本報告書では、校内研修支援プログラムと呼ぶ)は、愛媛県総合教育センターと連携した研修高度化プログラム開発である。次に、現代的課題対応実践力高度化研修プログラム(本報告書では、現代的課題研修プログラムと呼ぶ)は、松山市教育研修センターと連携した研修の高度化プログラム開発である。この二つの教員研修センターをハブ(連携窓口)として、愛媛県内の公立学校の教員への周知や研修支援を行い、愛媛大学が国立学校や私立学校を中心とした教員への周知や研修支援を行った。なお、本事業では、これまで教員免許更新講習において一定の評価を得られていた講座を校内研修支援プログラムに配置し、一部の講座については、教育行政や学校から要望のある内容を、現代的課題研修プログラムと校内研修支援プログラムに配置した。

本事業の独創性は、教材配信ソリューションによる高度化の他に、研修評価に二つの視点と方法を導入したことにある。第一は、教材配信ソリューション(NTT EDX UniText)を通じた研修の汎化と研究効果の深化・拡充の可能性を検討することである。教材配信ソリューション(NTT EDX UniText)は、該当する研修講座の資料や動画を配信できるだけでなく、利用ログをタグとして分析するアノテーション分析が可能となっている。そこで、このアノテーション分析により、教員の意識調査だけではない、研修受講の行動分析によって、さらに研修の評価や改善が可能となることに着眼した。第二は、校内研修支援プログラムでは、大学で受講した研修を学校の実態にあわせて校内研修を行う手法をとり、ランダムに抽出した学校で質的調査を行ない、研修の利便性や活用の汎用性などの評価を実施した。

本報告書は、本事業の実施内容を、今後の教員研修の高度化のあり方とともに、評価改善のあり方を探究したものとして、報告書で記録にまとめておくものである。

愛媛大学教職総合センター長 白松 賢

事業の実績

1 事業の実施日程

本事業の実施日程は、以下に示した図1の通りである。

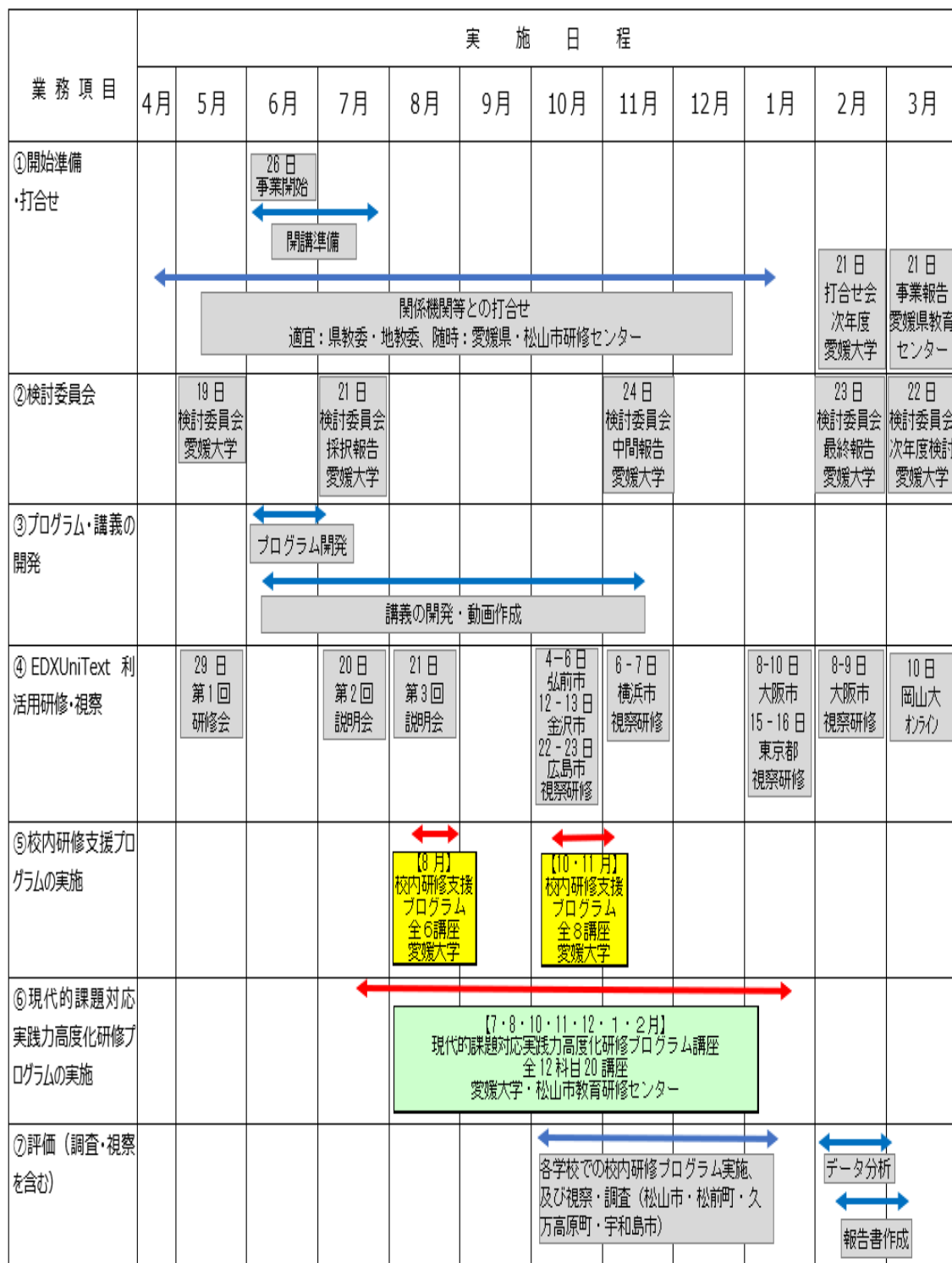


図 1 実施日程

事業開始は令和5年6月26日となり、そのための検討委員会は5月19日、7月21日、11月24日、令和6年2月23日、3月22日の計5回実施した。第1回は趣旨・概要等、準備作業の確認、第2回は採択報告及び趣旨・概要等、及び実施計画の吟味・修正、第3回は中間報告(進捗状況)を行い、助言を受けた。第4回は最終報告として、本年度の実績について評価を報告し承認を得た。第5回は来年度計画について、事業報告案の説明等を行い、助言と承認を得た。

また、愛媛大学と愛媛県教育委員会事務局、松山市教育委員会事務局との会合では、令和5年7月に趣旨・概要等の説明と協定締結下での協力体制の確認を行い、令和6年3月に事業報告、事業の振返りと来年度に向けた意見交換を行い今後も連携協力することについて合意した。

実施主体である愛媛大学と愛媛県総合教育センター、松山市教育研修センターとの打ち合わせは必要に応じて随時行った。採択決定から8月実施分「校内研修支援プログラム」までの期間が短かったため、事前に採択を想定した話合いも持つこととした。採択後は、募集方法、各種研修プログラムの運営方法、EDX UniTextに関する研究・研修、事業評価(事後アンケート・インタビューの内容等)について検討し、役割を分担した。そして、8月と10・11月に「校内研修支援プログラム」を実施するとともに、令和5年10月～令和6年1月に行われた各学校での校内研修を可能な限り視察し事後アンケートやインタビュー等の調査を実施した。また令和5年7月～令和6年2月には「現代的課題対応実践力高度化研修プログラム」の各講座を開催した。

教材配信ソリューションにはNTT EDX UniTextを採用した。これについては研修受講者のみならず講師陣の大学教員にも使用未経験者が多いため、NTT西日本ビジネス営業本部担当者を招くなどして講師陣への説明会を複数回行い、活用能力の向上を図るとともに、先進地視察や先行研修を行っている他大学の現地調査、NTT西日本への訪問、報告会への参加等を通して、このシステムの効果的な使用法や分析法を模索した。

2 事業の概要と主な内容

(1) 事業の概要

本事業は、図2の通り、教材配信ソリューション(NTT EDX UniText)を活用して、校内研修支援プログラム及び現代的課題対応高度化研修プログラムを開発することをねらいとした。

そのため、次の三つのサブテーマを遂行することとした。第一は、「校内研修担当者(研修主事や主任)を対象とした研修支援プログラム(対面研修及びデジタル配信)(以下、「校内研修支援プログラム」)」の開発と実践、及び「校内研修担当者による各学校における校内研修(以下、「校内研修」)」の実施と検証である。第二は、「現代的課題対応実践力高度化研修プログラム(対面研修及びデジタル配信)(以下、「現代的課題研修プログラム」)」の開発と実践である。第三は、「研修評価分析(教員評価分析、データ解

析型研修利用分析等)」による汎化モデルの検討である。

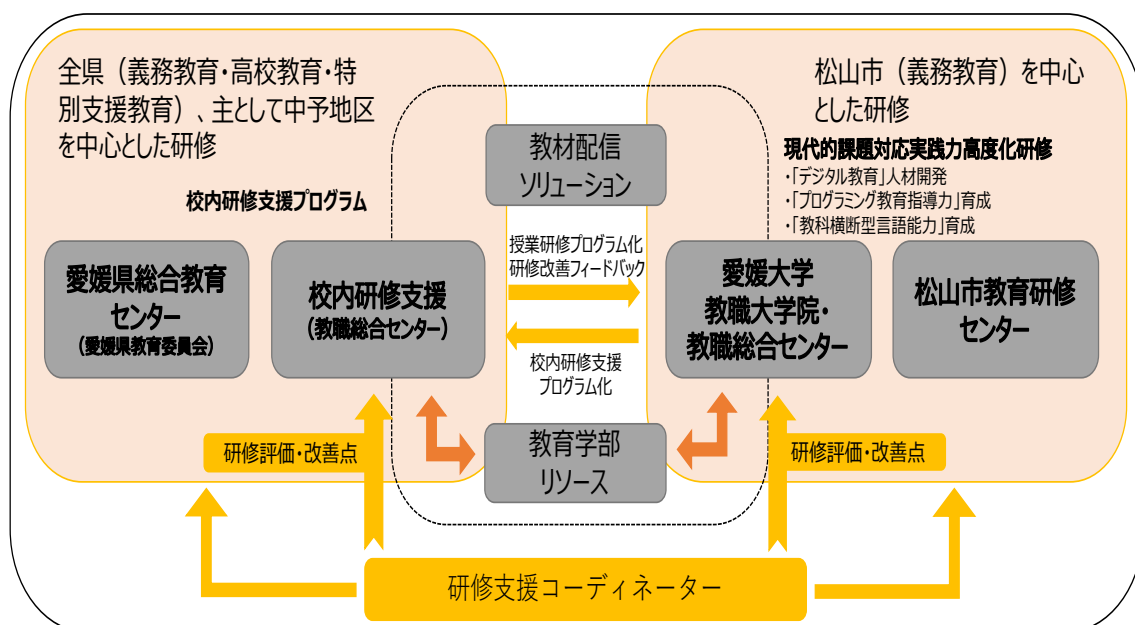


図 2 「教材配信ソリューションを活用した校内研修支援・現代的改題高度化研修プログラム開発」構想図

(2) 「校内研修支援プログラム」で開講した講義の内訳

「校内研修支援プログラム」では、実践的高度化プログラムとして、8月には「教職への使命感・意欲の向上」「小中高等学校における総合的学習の探究」「小中学生の英語科における話す活動」「通常学級における特別支援教育」「働き方改革期の業務改善」「クレームから相談にかわる生徒指導」の六つの内容をテーマとする6講座、10・11月にはこの6講座に「授業やホームページで使える動画作成」「深い学びのある道德科の授業づくり」の2テーマ2講座を加えた全8講座を開講し、8科目計14講座（大学教員担当講師9名、延べ15名）を開催した（表1）。各講座ともに45分の3ユニットを基本とし、9名の担当講師には校内研修支援プログラムにおいても教員の実践的指導力の高度化に資する内容をイメージした講座づくりを依頼した。

8月分については、周知は、愛媛大学が作成したチラシ等（別紙資料1）を用いて愛媛県総合教育センターの外、松山市教育研修センター、及び東温市、伊予市、松前町、砥部町、久万高原町の各教育委員会にも協力要請し、参加の呼びかけを行っていただいた。募集は、愛媛大学がMicrosoft office365 Formsを使用して申込みフォーム（別紙資料2）を作成し、取りまとめた。また、10・11月分は愛媛県総合教育センターの研修管理システムを使用して周知（別紙資料3）・募集・取りまとめを行った。また、運営は8月実施分・10・11月実施分ともに愛媛大学が愛媛県総合教育センターの協力を仰ぎながら行った。これにより、参加を希望する教員が大学での対面研修を受講した。この校内研修支援プログ

ラムでは、対面研修当日に参加できなかった教職員に対して、オンデマンド受講を開講し自宅等での自発的な学びを可能にした。

募集定員は30名、または15名の延べ405名とした。本プログラムの区分、講座名、募集・運営の主体、期日については表1に示す通りである。なお、校内研修支援プログラムの受講料は全講座無料とした。

表 1 「校内研修支援プログラム」開設講座の内訳

NO	種別	区分	募集	運営	期 日	講 座 名	講 師	定員
1	校内研修支援プログラム	8月分	愛媛大学※1	(1)愛媛大学※4 (2)愛媛県教育委員会※3※4	8月21日	教職と省察-教師生活をふりかえり、これからを考える-	高橋 平徳	30
2					8月23日	主体的な学びを促進する「総合的な探究の時間」校内研修	向 平和	30
3					8月24日	「教員が話す英語」と「子ども（児童）が話す英語」を磨く&鍛えるための研修	池野 修	30
4					8月29日	通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修	荻田 知則	30
5					8月30日	信頼とウェルビーイングを高める業務改善研修	露口 健司	30
6					8月31日	保護者のクレームが相談にかわる生徒指導体制の確立	白松 賢	30
7		10月／11月分	愛媛県教育委員会	(1)愛媛大学 (2)愛媛県教育委員会	10月15日	主体的な学びを促進する「総合的な探究の時間」校内研修	向 平和	30
8					10月20日	イチから始める動画作成研修	大西 義浩・玉井 輝之	15
9					10月21日	深い学びのある道徳科授業づくり研修	上地 完治（琉球大）	30
10					10月26日	通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修	荻田 知則	30
11					10月27日	保護者のクレームが相談にかわる生徒指導体制の確立	白松 賢	30
12					11月10日	教職と省察-教師生活をふりかえり、これからを考える-	高橋 平徳	30
13					11月17日	「教員が話す英語」と「子ども（児童）が話す英語」を磨く&鍛えるための研修	池野 修	30
14					11月18日	信頼とウェルビーイングを高める業務改善研修	露口 健司	30
合計（人）								405

※1 「愛媛大学」とは、「愛媛大学教職総合センター」を指す。

※2 「松山市」とは、「松山市教育研修センター」を指す。

※3 「愛媛県」とは、「愛媛県教育研修センター、及び中予教育事務所」を指す。

※4 (1)は主担当、(2)は副担当の意である。

また、講座受講者には、講義当日 EDX UniText により講義用資料を配信した。これに加えて後日、講義分割動画を配信することで、学び直しや校内研修を行う労力の軽減に努めた。

また、夏季休業中の研修であることから、事前に特別警報時には講座中止とし、その他のお知らせは「緊急告知確認フォーム」（別紙資料 4）を作成し、当日出発前に必ず見ていただくことでこれに備えたが、今回の講座では、使用する機会はなかった。

講義日には、開始 15 分前に集合していただき、まず、Wi-Fi ルーターへの接続、EDX UniText への接続と操作の仕方を説明した。つぎに、事業担当者から、本事業実施の経緯、趣旨説明をした。さらに、講義後には、別紙資料 5 を配布し、校内研修実施はあくまで任意であるが、配信資料等を活用して勤務校での伝達する協力を要請した。最後に、QR コードを付した別紙資料 6 を配布し、自己評価アンケートの協力を呼びかけた。なお、現代的課題研修プログラムの各講義についても、校内研修の実施の呼びかけを除く同様な説明等を実施している。

（3）「現代的課題対応実践力高度化研修プログラム」で開講した講義の内訳

「現代的課題研修プログラム」では、「デジタル教育」の人材開発（プログラミング教育指導力を含む）、「教科横断型言語能力」の向上をテーマに、7 月～2 月にかけて 12 科目計 22 講座（研修講師 14 名、延べ 26 名）を開講した（表 2）。各講座ともに校内研修支援プログラム同様、45 分の 3 ユニットを基本としたが、平日開催の「教育版マインクラフト活用入門」「概念型探究による授業づくり」の各講座では、1 講座 90 分の 5 回シリーズとした。大学教員の担当講師には、受講者に対して現代的課題に対応する実践的指導力の高度化を図る内容を依頼した。

これらの講座では、EDX UniText により研修資料を当日配信するとともに、およそ 1 か月後には講義の分割動画を配信し、各教科等・領域における専門的力量的向上を高め、高度化人材の育成を図ろうとした。

各講座の周知は、松山市教育研修センターのシステムを活用して行ったが、市外からの問い合わせもあったことから愛媛県総合教育センターからも松山市を除く県内すべての学校に周知文を発送した。募集については、20 講座の内 5 講座を松山市教育委員会が行い、残りの講座を愛媛大学が Microsoft office365Forms にて申込みフォーム（別紙資料 7）を作成し行った。運営についてもこれと同様な役割分担とした。

募集定員は、12 名、または 15 名、20 名、30 名の延べ 340 名とした。本プログラムの区分、講座名、募集・運営の主体、期日については表 2 に示す通りである。なお、受講料については全講座無料とした。

表 2 「現代的課題対応実践力高度化研修プログラム」 開設講座の内訳

NO	種別	区分	募集	運営	期 日	講 座 名	講 師	定員
15	現代的課題対応実践力高度化プログラム	デジタル教育人材開発	愛媛大学	(1) 松山市教育委員会	10月19日	教育版マイクラフト活用入門 1 -教育版マイクラフトの特徴と基本操作-	富田 英司	12
16					10月26日	教育版マイクラフト活用入門 2 -マイクラフトを用いた教育実践例-	富田 英司	12
17					11月9日	教育版マイクラフト活用入門 3 -クラスルームモードの使い方-	富田 英司	12
18					11月16日	教育版マイクラフト活用入門 4 -メイコードの使い方-	富田 英司	12
19					11月30日	教育版マイクラフト活用入門5-協同で問題解決に取り組む-	富田 英司	12
20		教科横断型言語能力育成			1月11日	概念型探究による授業づくり 1 -概念を中心にすると思えることが楽になる-	富田 英司・竹下 浩子	15
21					1月18日	概念型探究による授業づくり 2 -概念的理解を到達目標とすると深く学べる-	富田 英司・竹下 浩子	15
22					1月25日	概念型探究による授業づくり 3 -事例から自分で法則を見つけると忘れない-	富田 英司・竹下 浩子	15
23					2月1日	概念型探究による授業づくり 4 -問いを中心に授業を進めると主体的になる-	富田 英司・竹下 浩子	15
24					2月8日	概念型探究による授業づくり 5 -地域課題に繋げると資質・能力を評価できる-	富田 英司・竹下 浩子	15
25		デジタル教育人材開発		(1) 松山市教育委員会	7月27日	Stop Motion Studio アプリを使ったアニメーションづくりにチャレンジ	福井一真	20
26					7月29日	深い学びを引き起こす道徳教育づくり	藤原 一弘	20
27					8月8日	小学校プログラミング教育に向けて～はじめてのプログラミング～	大西 義浩	20
28					10月28日	ICTを活用した家庭科の授業づくり	藤田 昌子	20
29					12月9日	絵本を活用した主権者教育の教材・授業づくりの視点と方法	井上 昌善	20
30				(1) 愛媛大学	11月18日	特別活動のICT利用に向けて-オリエンテーションとネット・モラルを中心に-	白松 賢	30
31					12月16日	ICTを活用した体育科・保健体育科の授業づくり	日野 克博	15
32					12月23日	ICTを活用した英語の授業・活動アイデア	立松 大祐	15
33					1月21日	ICTを活用した算数・数学科の授業づくり-ICTばかりに頼らない実践を目指して-	吉村 直道	15
34					11月18日	学級ファシリテーション-ICTの利活用へ-	阿部 隆幸 (上越教育大)	30
合 計 (人)								340

3 各プログラムへの参加状況の詳細

(1) 「校内研修支援プログラム」への参加状況

本プログラムへの参加者は、表3の通りである。

8月分には延べ240名（対面受講183名、オンデマンド受講57名）が受講した。対面受講では6講座中3講座が定員を上回った。また、対面・オンデマンドを合計すると、5講座で目標人数とした30名を超える結果となった。

8月分の受講者数は、周知、応募開始が7月中旬となり夏季休業中の教員動態がほぼ決定している時期であったこと、全国中学校体育大会や全国規模の教員研修会が当地で開催され、中学校の先生方が例年より多忙であったこと、学校現場では働き方改革が進められ、管理職の命令で週休日の研修を依頼できないこと等の要因で受講者が少ない可能性があったが、関係諸機関等や各学校長等の熱心な呼びかけにより、予想を超える参加を得た。



写真1 講座 N02 演習風景



写真2 講座 N06 事例動画の視聴

10・11月分には、延べ290名（対面受講156名、オンデマンド受講134名）が受講した。対面受講で定員を上回ったのは8講座中1講座にとどまった。その一方で、対面・オンデマンド受講を合計すると、8講座中7講座で目標とした15名、30名を超えた。

10・11月分は、8月分と比較して募集期間が十分であったものの、対面講義の参加は定員を下回った。これは、2学期平日に開催した講座が多かったことに起因する。また、週休日の開催分についても、教員不足で研修に十分な時間がさけない、という声もあった。しかしながら、8月分を受講した教員や口コミや評判から、申し込みにつながることなどが多数聞かれた。

校内研修支援プログラムでは、当日参加は不可能であるが講義内容を学びたい教員が多く存在し、10・11月分オンデマンド受講者は8月分57名を大きく超える134名であった（全受講者に対するオンデマンド受講率8月分23.8%、10・11月分46.2%）。これは、8月分の実施により、研修内容の質の高さが認知されたことによるものと推測される。

10・11月分では、県や市の研修センター等指導主事の参加が多く見られたのも特徴の一つであった。指導主事からは、知識や技能の刷新を図ることができたとの声が多く聞かれ

た。

表 3 「校内研修支援プログラム」開設講座の受講者数

NO	種別	区分	講 座 名	定員	オンデマンド	対面	合計
1	校内研修支援プログラム	8月分	教職と省察-教師生活をふりかえり、これからを考える-	30	7	32	39
2			主体的な学びを促進する「総合的な探究の時間」校内研修	30	6	23	29
3			「教員が話す英語」と「子ども（児童）が話す英語」を磨く&鍛えるための研修	30	8	24	32
4			通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修	30	12	30	42
5			信頼とウェルビーイングを高める業務改善研修	30	11	28	39
6			保護者のクレームが相談にかわる生徒指導体制の確立	30	13	46	59
7		10月／11月分	主体的な学びを促進する「総合的な探究の時間」校内研修	30	5	18	23
8			イチから始める動画作成研修	15	10	13	23
9			深い学びのある道徳科授業づくり研修	30	21	41	62
10			通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修	30	33	11	44
11			保護者のクレームが相談にかわる生徒指導体制の確立	30	18	24	42
12			教職と省察-教師生活をふりかえり、これからを考える-	30	12	11	23
13			「教員が話す英語」と「子ども（児童）が話す英語」を磨く&鍛えるための研修	30	17	13	30
14			信頼とウェルビーイングを高める業務改善研修	30	18	25	43
合計（人）				405	191	339	530

※ 対面受講で定員を超えたもの、オンデマンド受講と対面受講の合計が定員を超えたものを色付けした。

(2) 「現代課題対応実践力高度化研修プログラム」への参加状況

「現代的課題対応実践力高度化研修プログラム」に掲げたテーマは、現代的課題である「デジタル教育」「教科横断型言語能力」に関する人材開発・能力の育成の2点である。

「教科横断型言語能力育成」では、「概念型探究による授業づくり（全5回）」を開講し、受講者は児童生徒の探究場面における高度化をめざした授業づくりに取り組んだ。

残りの15講座が「デジタル教育人材開発」にあたり、「教育版マイクラフト活用入門（全5回）」と社会科、算数・数学科、図工・美術科、技術・家庭科、保健体育科、道

徳科等の講座を開講し、教科等領域のデジタルを活用した指導法や教材づくりに取り組んだ。また、N024～N029 の 5 講座は松山市教育研修センターが担当し、残りの 15 講座を愛媛大学が受け持った。受講状況は合計 375 名（定員 340 名に対する受講率 110.3%）で全 20 講座の内 9 講座で定員を超える結果となった（表 4）。

表 4 「現代的課題対応実践力高度化プログラム」開設講座の受講者数

NO	種別	区分	講 座 名	定員	計
15	現代的課題対応実践力高度化研修プログラム	デジタル教育人材開発	教育版マイクラフト活用入門 1 -教育版マイクラフトの特徴と基本操作-	12	11
16			教育版マイクラフト活用入門 2 -マイクラフトを用いた教育実践例-	12	12
17			教育版マイクラフト活用入門 3 -クラスルームモードの使い方-	12	10
18			教育版マイクラフト活用入門 4 -メイクコードの使い方-	12	10
19			教育版マイクラフト活用入門5-協同で問題解決に取り組む-	12	11
20		教科横断型言語能力育成	概念型探究による授業づくり 1 -概念を中心にすると考えることが楽になる-	15	19
21			概念型探究による授業づくり2-概念的理解を到達目標とすると深く学べる-	15	19
22			概念型探究による授業づくり3-事例から自分で法則を見つけると忘れない-	15	18
23			概念型探究による授業づくり4 -問いを中心に授業を進めると主体的になる-	15	15
24			概念型探究による授業づくり5-地域課題に繋げると資質・能力を評価できる-	15	16
25		デジタル教育人材開発	Stop Motion Studio アプリを使ったアニメーションづくりにチャレンジ	20	23
26			深い学びを引き起こす道徳教育づくり	20	22
27			小学校プログラミング教育に向けて～はじめてのプログラミング～	20	15
28			ICTを活用した家庭科の授業づくり	20	20
29			絵本を活用した主権者教育の教材・授業づくりの視点と方法	20	17
30			特別活動のICT利用に向けて-オリエンテーションとネット・モラルを中心に-	30	40
31			ICTを活用した体育科・保健体育科の授業づくり	15	18
32			ICTを活用した英語の授業・活動アイデア	15	18
33	ICTを活用した算数・数学科の授業づくり-ICTばかりに頼らない実践を目指して-		15	17	
34	学級ファシリテーション-ICTの利活用～		30	44	
合計（人）				340	375

※ 対面受講が定員を超えた講座を色付けした。

「教科横断型言語能力育成」をめざした「N020～24 概念型探究 1～5」では、5 回とも定員を超える計延べ 87 名（定員に対する受講率 116.0%）であった。時宜を得たテーマであったこと、平日夜間（当初の予定を 30 分繰下げ 18:30～20:00）に実施したこと、本事業の講義についての評価の口コミ等で本講座に大いに期待していただいたこと等が主な要因だと考える。

定員を超えた残り 4 講座の内、N025（同受講率 115.0%）、N026（同受講率 110.0%）は教員にとって最も関心の高いテーマであり、夏季休業中に実施したことが要因となったと思われる。

11 月土曜日に実施した N030（同受講率 133.3%）と N034（同受講率 146.7%）は定員を大幅に超えた。これは、県外大学、及び本大学で高評価を得ている大学教員が講師を務めたこと、1 日午前午後で特別活動領域の 2 講座開講したこと、テーマが学級経営に今すぐに使える「学級ファシリテーション」、「ネットモラル」であったこと等が要因として挙げられる。



写真 3 講座 N031 の講義風景



写真 4 講座 N031 の講義風景

一方、「N015～19 教育版マイクラフト講座 1～5」（受講率 90.0%）は今日的で関心の高いテーマであったが、使用するアプリが松山市立公立小学校のタブレットで原則使用できないことが受講率を低下させた。また、この講座は 2 学期の平日（18:00～19:30）に 5 回実施したが、開始時刻が早かったため学校内外の業務や指導のため、欠席した教員も少なからずいた。受講前に興味はあるが参加は難しいと判断し申し込まなかった教員もいた。

（3）講義動画等の作成

今回の事業では、EDX UniText「各講座『本棚』」に、当日には講義資料と事例動画、講義終了後 1 か月以内には講義分割動画を配信した。講義風景の動画作成は、専門業者（写真 4、5）、または大学院生が撮影し編集した。

全 34 講座の内、事業開始直後で機材の整っていなかった N025 以外の 33 講座について

作成したが、「校内研修支援プログラム」8講座と「現代的課題プログラム」の6講座計14講座を業者に委託した。この動画は、2名の専門スタッフが撮影し、1～2回のやり取りによる修正、編集を経て納品された。各講座は3ユニット構成であったが、分割動画はこれにこだわらずに1動画10分前後に分割した。これにより、受講者が隙間時間を使っての振り返り受講が可能になった。また、分割動画納品後に本事業担当者がサブタイトルをつけ、EDX UniText「本棚」にアップロードした。

前述の通り、この業者には、研修講座で使用するための事例動画をN04で4本（写真5）、N06で3本計7本の作成を依頼した。教師役を業者の社員が、児童生徒役を松山東雲学園中学・高等学校演劇部生徒が演じた。本事業の趣旨と内容の意義に賛同していた当該学校が、夏季休業期間のボランティア出演について許可していただいたことで実現したものである。

その他の講義動画は、大学院生1名が後方より講座風景を撮影し、不要な部分を切り取る等の編集作業を行って、講義後2週間程度でEDX UniTextにアップロードした。



写真5 N08の講義を業者が撮影する様子

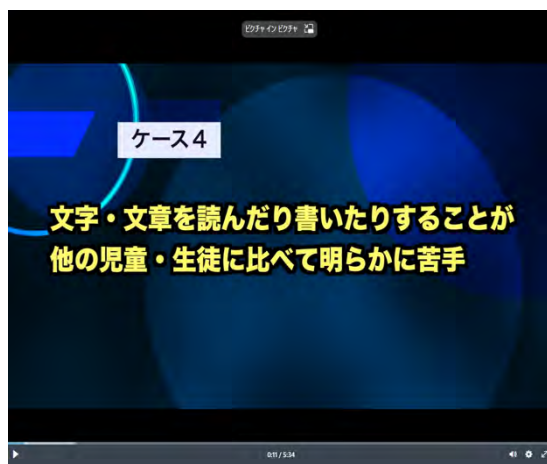


写真6 N04「通常学級の特別支援教育」の事例動画の一場面

(4) 各学校における「校内研修」の開催状況

「校内研修プログラム」のねらいは、大学研修（対面講座）を受講した教員が講師となり、そこで学んだ知見を広く伝達することで、教員の資質能力を向上させることである。そのため、大学研修受講者全員が校内研修を実施して、受講者の勤務校すべての教員に質の高い学びを提供することが理想である。

しかし、校内研修は学校のニーズや実情に合わせて、校長の判断で自発的に実施するべきものであるため、今回の応募条件には校内研修の実施を必須としない形で募集した。講

座当日には事業担当者が説明し、朝礼、全体、学年部会、教科部会等の様々な機会をとらえて口頭、又は文書等により、何らかの伝達講習の実施をお願いした。その際、EDX UniTextにより配信した研修資料（プレゼン資料、レジュメ資料、ワークシート資料）の活用は自由とした。

一方、今回の事業では、大学研修の各講座での学びが校内研修でどのように生かされたかという効果の検証が必要である。そのためには、確実に校内研修を実施して、愛媛大学が行うアンケート、インタビュー等の調査に協力していただける学校が一定数必要であった。そこで、松山市以外の中予地区5市町教育委員会に趣旨説明と協力要請を行い、小中学校で「校内研修協力校（以下、「協力校」）」各1校程度指定していただいた。また、松山市内のすべての公立小中学校、一部の高等学校・特別支援学校・私立高等学校には本事業担当者が、電話または訪問により趣旨説明と協力要請を行った。

これら協力校には、事前調査で校内研修の希望講座第1～第3を挙げていただき調整した。10校程度に第2、3希望に回っていただき、3校において2講座の研修の実施をお願いした。これらの学校教員に、校長指導の下、勤務校で校内研修を実施して頂き、今回の本プログラムの調査にもご協力いただいた。

この研修では、大学での対面講座時にEDX UniTextにて配信した研修資料（プレゼンテーション資料、レジュメ資料、事例動画）、及び1か月後に配信した講義分割動画等を校内研修において、著作権法、サートラスの規定に則り、利活用した。

この結果、令和5年9月1日～令和6年2月20日の間に、延べ44校等で実施され1,251名（研修講師教員も含まれる）が受講した（表5）。校内研修を実施した学校他44校等の内訳は、「教職と省察（※講座名をキーワードのみ表記）」計5校、「総合的探究」計4校、「教員・子どもが話す英語」計5校等、「通常学級の特別支援教育」計6校、「業務改善」計6校等、「生徒指導体制」計8校、「動画作成」5校等、「道徳科授業づくり」計5校であった。

表 5 各学校における「校内研修」の開催状況

NO ※1	講 座 名	学 校 種					学校数 (校)	参加人数 (人)
		小	中	高	特支	その他 ※2		
1	教職と省察-教師生活をふりかえり、これからを考える-	1	3		1		5	157
2	主体的な学びを促進する「総合的な探究の時間」校内研修	2	2				4	112
3	「教員が話す英語」と「子ども（児童）が話す英語」を磨く&鍛えるための研修	3				2	5	87
4	通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修	4	2				6	189
5	信頼とウェルビーイングを高める業務改善研修	2	2	1		1	6	172
6	保護者のクレームが相談にかわる生徒指導体制の確立	4	3	1			8	307
8	イチから始める動画作成研修		3			2	5	94
9	深い学びのある道徳科授業づくり研修	2	3				5	133
学校種 (校)		18	18	2	1	5	44	
参加人数 (人)		538	519	76	41	77		1251

※1 NOは、表1)の研修番号と同じ番号を付す。

※2 その他の内訳は、町教育委員会、市校長会、市教育研究協議会教科委員会である。

校内研修で受講した学校種別の人数は、小学校 538 名、中学校 519 名、高等学校 76 名、特別支援学校 41 名、その他 77 名であった。その他とは、教育委員会 2 回、市校長会 1 回、教育センター1 回、教育団体教科部会 1 回であるが、松前町教育委員会や愛媛県総合教育センター、宇和島市教研外国語部会のように、学校の枠を超えたメンバーでの教員研修として活用していただいた教育委員会や教育団体実施の研修会も、今回の調査対象に加えた。

事業担当者は、これらの内、小学校 12 校、中学校 15 校、高等学校 1 校、特別支援学校 1 校、その他（教育委員会・校長会・教科委員会）4 箇所計 33 か所を訪問し、校内研修の様子を見学し先生方の意見を伺った（写真 7、8）。これらでは、講師となった教員が非常に熱心に取り組み、先生方も真剣に受講されていた。各学校では、EDX UniText で配信したプレゼン資料を使っの講義や演習中心の研修から講義分割動画や事例動画の視聴に講師がコメントを加えながらの研修まで、バラエティに富んだ研修を進行した。演習の場面では、大学での対面講座時の同様、主体的に実施されていた。



写真 7 NO1 の研修を行う中学校



写真8 N05の研修を行う校長会 写真9 N04の研修を行う特別支援コーディネーター

写真9のように、講師教員が、配信したプレゼン資料に独自シートを付け加える等の編集した資料を用いて、勤務校の課題に応じた研修をしようとした学校があった。さらに3校では校長先生自ら校内研修講師を務め、自己の教育理念や学校の教育計画に基づく校内研修を実施し、学校経営改善のよりよい機会と捉えて実施された。

研修時間は多くの学校で、アンケート調査を含めて45～60分間であった。本事業担当者は、学校の実情、課題に応じてポイントを絞って工夫がなされていた。

4 各プログラムに関する調査

(1) 量的調査の概要

教員が本プログラムを受講する意義は、次の通りである。

- 研修への参加が有意義であること
- これにより、自己の振り返りができること
- 意欲的になる等、受講後の自己の学びにより影響があること
- 役割を自覚し、他へ貢献する意欲が高まること

そこで、本事業では、表6により量的調査を行い、上記のねらいを達成しているかどうかを検証することとした。

表 6 QR コードで質問に答える等の量的調査の一覧

NO	調査内容	対象者	調査方法
A	校内研修支援プログラム（8 月分）評価票	対面受講者全員	受講後、QR コードから入力（別紙資料 8）
B	校内研修支援プログラム（10・11 月分）評価票	対面受講者全員	受講後、QR コードから入力（別紙資料 8）
C	協力校で実施した校内研修評価票	校内で受講した教員全員	受講後、QR コードから入力（別紙資料 9）
D	現代的課題対応高度化研修プログラム評価票	対面受講者全員	受講後、QR コードから入力（別紙資料 10）
E	校内研修支援プログラム受講者の学び直し等の状況	対面受講者	NTT EDX UniTent の利用ログ分析

また、調査 AB の結果と調査 C の結果を比較することで、講師陣による対面講座とこれを受けて行った校内研修に、どの程度の差異がみられるかについても検証した。

調査 A～D の質問項目については、教員免許状更新講習や様々な研修後に愛媛大学が使用した質問項目と愛媛県総合教育センター、松山市教育研修センターが研修後に使用している質問項目等を参考に事業担当者が作成した。

なお、調査 C には、「仕事に関する調査 3 項目」（ユトレヒト・ワーク・エンゲイジメント尺度 Schaufeli & Bakker（2003））についても質問している。

調査 D は、松山市教育研修センターが大学連携セミナーとして実施した 5 講座では 3 項目、愛媛大学が実施した 7 講座ではこれに 5 項目加えた 8 項目の自己評価アンケートを実施した。調査 E は、対面受講をした参加者がその後どのような学習行動をとっているか、EDX UniText の利用ログを参考に検証した。

（2）質的調査の概要

本事業では、（1）で行った量的調査に加えて、表 7 に示す質的調査 F・G を実施した。

表 7 インタビュー、検討会での発言記録等による質的調査

NO	調査内容	対象者	調査方法
F	協力校校内研修実施後のインタビュー調査	校内研修担当者と研修受講者	1 対 1 のインタビュー（別紙資料 3）
G	プログラム検討会の発言記録	参加者	意見交換を行い、そのまとめを使用

調査 F では、校内研修における現場の先生方の生の声を伺うことで、本プログラムの検

証を行おうとした。そのため、インタビュワーとして元公立小中学校の校長を非常勤講師として2名雇用し、聞き取り調査を実施した。表8は、この調査で訪問した校内研修の講座一覧である。

表 8 非常勤講師等による訪問による校内研修の調査

講座名	期日	調査校	訪問者
信頼とウェルビーイングを高める業務改善研修	令和5年12月20日	松山市立公立小学校	2名
教職と省察 - 教師生活をふりかえり、これからを考える -	令和5年12月21日	松山市立公立中学校	2名
保護者のクレームが相談にかわる生徒指導体制の確立	令和5年12月22日	松山市立公立中学校	2名
通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修	令和5年12月25日	松山市立公立中学校	2名
イチから始める動画作成研修	令和5年12月25日	松山市立公立中学校	2名
「教員が話す英語」と「子ども（児童）が話す英語」を磨く&鍛えるための研修	令和5年12月26・27・28日	宇和島市教研外国語部会	2名
主体的な学びを促進する「総合的な探究の時間」校内研修	令和6年1月17日	松山市立公立小学校	2名
深い学びのある道徳科授業づくり研修	令和6年1月19日	松山市立公立中学校	2名

まず、2名の非常勤講師には、事前に事業担当者から調査の内容を説明するとともに EDX UniText のログイン ID・パスワードを発行し、対面講座の分割動画や配布資料を閲覧して下調べをしていただいた。また、訪問に先駆け、事業担当者が、調査の趣旨を説明し、インタビューの視点について打ち合わせた。

調査対象校には事業担当者と非常勤講師の2名体制で訪問し調査した。訪問日当日に校内研修を実施した学校では、校内研修を拝見した後にインタビューを数名実施し、既に校内研修を終えていた学校では、校長先生との対談後、インタビューを数名実施した（写真10）。

インタビュー調査対象の内訳は、校長、研修講師を担当した教員、若手、中堅、ベテラン教員や性別等を加味し、学校で5名程度人選していただいた。インタビューの場所は校長室、相談室等の静ひつな環境を提供していただき、非常勤講師との1対1で実施した。非常勤講師は、作成したインタビューガイド（別紙資料11）に基づき聞き取りを行った。

大学に帰校後に、事業担当者は非常勤講師からインタビューを行った所感、聞き取りで得た成果や課題を基に今後の研修の在り方についての指導助言を受けた。また、聞き取り内容の記述（別紙資料12）を後日提出していただき、これを事業担当者が分析した。



写真 10 校内研修後にインタビューを受ける講師、受講者

調査 G は、令和 5 年 12 月 27 日に愛媛大学で実施したプログラム検討会ではグループワークでのご感想やご意見等の発言記録の分析である。この会の参加者は、本プログラムに複数回参加いただいた教員（2 回以上参加者）、積極的に協力いただいた管理職の先生方（事業担当者による選定）21 名に案内状を送付し、これにご参加いただいた 10 名の方々である。

なお、上記の調査の分析は、事業担当者（白松賢、高橋平徳、小田哲志）が行ったが、広島公立大助教中尾走氏、広島大学特任学術研究員樊怡舟氏、NTT 西日本 EDX UniTent 担当者にもデータ解析の協力を受けた。

5 「校内研修支援プログラム」量的調査の分析

(1) 【調査 A】 【調査 B】 について

①標本数、属性について

本研修プログラム対面講座の受講者は、8 月分 183 名、10・11 月分 156 名で、回答数（回答率）は、は 8 月分 149 件（81.4%）、10・11 月分 127 件（81.4%）であった。また、本調査では、受講者属性（勤務校の校種、設置者、所在地、受講者の職名、担任の有無、雇用形態等）と調査項目（別紙資料 8）を質問した。対面受講者の属性は、今後学校に研修を提供する際の参考のため、確認しておく。

〈校種について〉

講義後のアンケート調査に回答した受講者の学校種の延べ数（%）は図 3 の通りである。

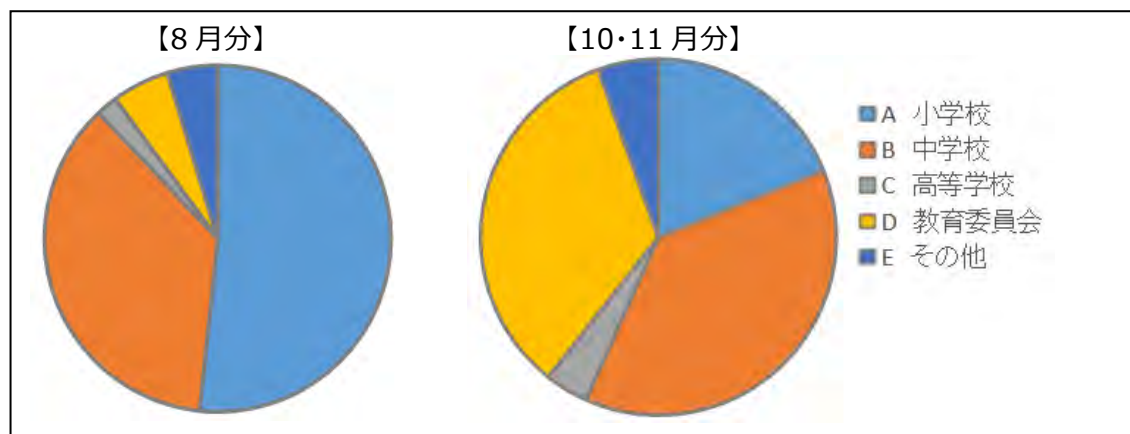


図 3 校内研修支援プログラムの各講座に参加した受講生の学校種

8 月分の校種の内訳は、小学校 77 校（51.7%）、中学校 54 校（36.2%）、高等学校 3 校（2.0%）、教育委員会等 8 か所（5.4%）であった。10・11 月分は、小学校 24 校（18.9%）、中学校 48 校（37.8%）、高等学校 5 校（3.9%）、教育委員会等 43 か所（33.9%）であった。

夏季休業中の 8 月分、2 学期の 10・11 月分ともに、中学校教員、高等学校教員の参加にあまり変化はないが、小学校の教員は 2 学期に大きく減少し、教育委員会指導主事等の参加は 2 学期に大きく増加した。

〈勤務校の所在地について〉

講義後のアンケート調査に回答した受講者の勤務校所在地区からの受講者延べ数（%）は、図 4 の通りである。

8 月分は、松山市 100 名（67.1%）、松山市以外の中予地区 31 名（20.8%）、南予地区 10 名（6.7%）、東予地区 8 名（5.4%）他であった。10・11 月分は、松山市 67 名（52.8%）、

松山市以外の中予地区 18 名（14.2%）、南予地区 27 名（6.7%）、東予地区 7 校（5.4%）他であった。10・11 月分は、南予地区からの受講者が大幅に増え、松山市以外の中予地区を超えた。

8 月分、10・11 月分の合計数では、松山市からの参加は 167 名（58.4%）、松山を含めた中予地区からは 216 名（75.5%）であった。

なお、8 月分対面講座受講者には、事前の研修会等で情報を得て、夏季休業日を利用して中国、近畿地方から参加した方（受講後アンケートには無回答）が数名含まれた。

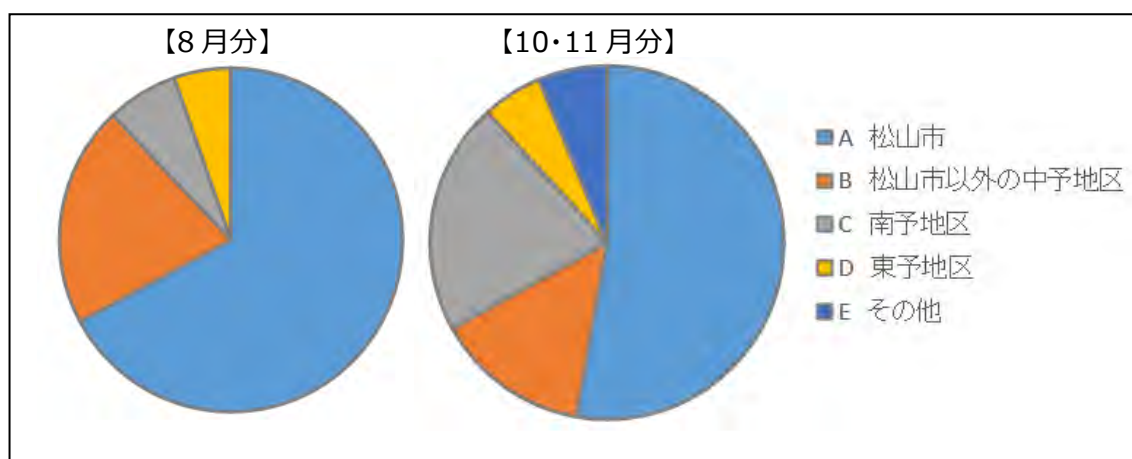


図 4 校内研修支援プログラムの各講座に参加した受講者の勤務する学校所在地

〈役職について〉

講義後のアンケート調査に回答した受講者の役職（%）は、図 5 の通りである。

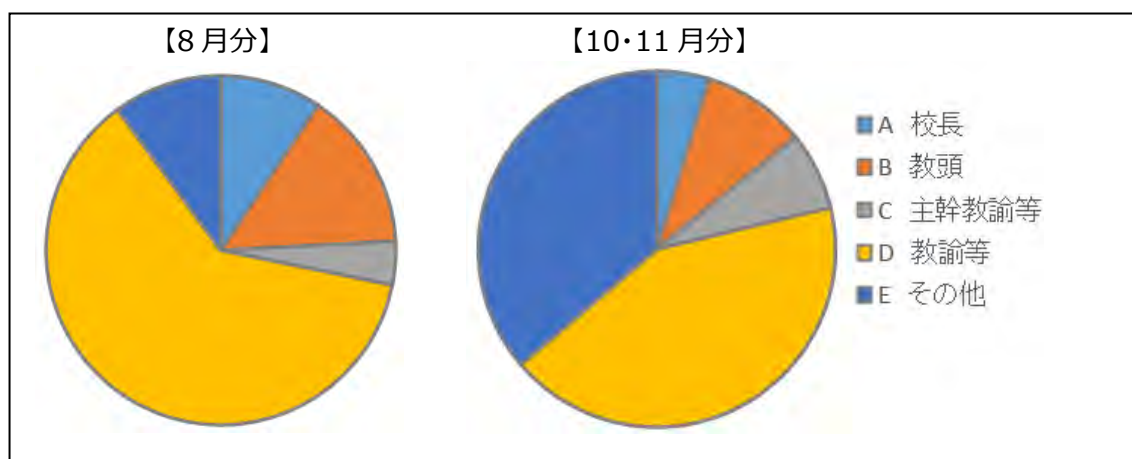


図 5 校内研修支援プログラムの各講座に参加した受講者の職名

8 月分は、校長 14 名（9.4%）、教頭 22 名（14.8%）、主幹教諭等 6 名（4.0%）、教諭等 92 名（61.7%）、その他（指導主事等教育委員会職員）15 名（10.1%）であった。10・11 月分は、校長 6 名（4.7%）、教頭・教頭 12 名（9.4%）、主幹教諭等 9 名（7.1%）、

教諭等 54 名（42.5%）、その他（指導主事等教育委員会職員）46 名（36.2%）であった。

校長、教頭、主幹教諭等の指導的立場の教員が 8 月分では 42 名（28.2%）、10・11 月分では 27 名（21.3%）であった。さらに、その他に含まれる指導主事等教育委員会職員を加えると、8 月分では 51 名（34.1%）、10・11 月分では 64 名（50.4%）であった。

教諭等は、8 月分では 61.7%であったが、10.11 月分では 42.5%となり、2 学期中の受講割合が低下した。一方、指導主事等が 8 月分 10.1%から 10.11 月分 36.2%となり、2 学期中の受講割合は大幅に増加した。

〈年齢層について〉

講義後のアンケート調査に回答した受講者の年齢層は、表 9 の通りである。

8 月分では 51～60 歳教員が 60 名（40.3%）で一番多く、31～40 歳、41～50 歳、22～30 歳がほぼ同数の 20%前後であった。10・11 月分では、41～50 歳が最も多い 55 名（43.3%）で、次いで 51～60 歳、31～40 歳の順であった。

特筆すべきは、退職後再任用で中学校に勤務する教員も合計 3 名含まれていたことである。参加の理由は、教育者としての意識の高さと同時に 2 学期以降の不安感から、生徒対応にどうしても必要な知識や技能を獲得したいというものであった。

表 9 受講者の年齢層

年齢層	8 月分		10・11 月分	
A 61 歳以上	2 名	1.3%	1 名	0.8%
B 51 歳～60 歳	60 名	40.3%	44 名	34.6%
C 41 歳～50 歳	30 名	20.1%	55 名	43.3%
D 31 歳～40 歳	31 名	20.8%	18 名	14.2%
E 22 歳～30 歳	26 名	17.4%	9 名	7.1%

《考察》

本プログラムには、県立諸学校（高等学校、特別支援学校等）と比較して、公立小中学校の教職員の参加が多くみられた。これは、両者を比較して、小中学校の教員の方が研修に対する意欲が高いことがうかがえた。ただし、県立学校の教員に対しては、夏休みの期間が小中学校と異なることや県教育総合センターのみの周知であったのに対して、小中学校の教員は、教育事務所、各市町教育委員会からの複線的な案内により、管理職や研修主任等の教職員への呼びかけや勧めにより受講率を高めていったものと推測される。

そこで、高等学校のスケジュールや行事などを把握した上で、機会を捉えて適切に研修案内を行うことで、高等学校教員の研修への参加意欲を高める必要がある。

また参加者の勤務先は、大半が松山市、または中予地区の教員であった。遠方から研修に参加するには、移動する経費と時間がかかる。また、平日の参加となると、校長の理解

が必要である。

研修において最も重要なことは、大学側が質の高い講義を準備することに尽きる。しかしながら、遠方の教員にとっては、いくら魅力的であっても物理的に困難な問題がある。そこで、本プログラムが提案した、高度な教育内容を学校代表者が学び、それを伝達するような方法が有効になる。ただ、学んだことを自校に帰って還元する方式は、教員の中央研修等で既に実施されてきたが、研修担当者の過重負担がネックとなり、うまく機能しない場合も見られた。この課題を克服するために本事業では、EDX UniText を活用した。

加えて、オンデマンド受講のように、遠方の方々でも好きな時間に好きなだけ学べる方法も有効である。ただし、中央の教育機関が配信している教材は、安全性、信頼性は高いが、地域特有の教育課題に対応していない側面もある。そこで、地方にある大学が、本事業等を活用して、地方の実情をしっかりと把握し、地域の学校に必要なものを的確に提供する取組が重要である。

研修に参加した教員の役職は、管理職、主幹教諭・教育委員会の指導主事等の指導的立場にある教員の割合が高かったという結果を得た。それに伴い、年齢層も高い傾向にあった。これは、指導的立場の人間が学び、それを伝承するという本研修の趣旨が理解され、実践された結果といえる。今回、各学校等で延べ 44 講座の校内研修が行われたが、愛媛県総合教育センター、松山市教育研修センター、各教育事務所、市町教育委員会のご尽力のおかげで、本プログラムの趣旨や目的が理解を得た結果と考える。

②【調査 A】 【調査 B】を用いた分析を通して

（対象）「校内研修支援プログラム（8 月分）」 「同（10・11 月分）」 各講座を受講した教員

（手続き）各講座終了後、QR コードを付した評価票の協力依頼を配布し、事業担当者が当日中の実施を呼びかけ、表 10 の回答を得た。

表 10 校内研修支援プログラムの 8 月分、10・11 月分、合計の参加人数と評価票の回答数、回答率

講座NO		1	2	3	4	5	6	8	9	合 計
講 座 名 (キーワード)		教 職 と 省 察	主 体 的 な 時 間 的 総 合 的	教 員 ・ 子 ど も が 話 す 英 語	特 別 支 援 学 級 の 通 常 教 育	を ウ ェ ル ビ ー 業 務 イ ン 善 グ	生 相 談 に か わ 制 る	イ チ か ら 始 め る 動 画 作 成	道 徳 科 授 業 つ く り 深 い 学 び の あ る	
8月分	受講者数 (名)	32	23	24	30	28	46			183
	回答数 (件)	30	19	20	25	21	34			149
	回答率 (%)	93.8%	82.6%	83.3%	83.3%	75.0%	73.9%			81.4%
10・11月分	受講者数 (名)	11	18	13	11	25	24	13	41	156
	回答数 (件)	8	15	10	8	22	21	11	32	127
	回答率 (%)	72.7%	83.3%	76.9%	72.7%	88.0%	87.5%	84.6%	78.0%	81.4%
全体	受講者数 (名)	43	41	37	41	53	70	13	41	339
	回答数 (件)	38	34	30	33	43	55	11	32	276
	回答率 (%)	88.4%	82.9%	81.1%	80.5%	81.1%	78.6%	84.6%	78.0%	81.4%

表 11 自己評価アンケートの質問項目と選択肢

項目	質問項目 \ 得点	4	3	2	1
1	この研修はあなたにとって有意義でしたか。	4.大変有意義だった	3.有意義だった	2.あまり意義がなかった	1.全く意義がなかった
2	これまでの教育に対する本質的な見方・考え方（教育観、学習観、児童生徒観、授業観、研修観など）の捉え直しができましたか。	4.よくできた	3.できた	2.あまりできなかった	1.全くできなかった
3	これまでの自身の教育実践への省察や捉え直しができましたか。	4.よくできた	3.できた	2.あまりできなかった	1.全くできなかった
4	これからの自身の学びへの意欲が高まりましたか。	4.大変高まった	3.高まった	2.あまり高まらなかった	1.全く高まらなかった
5	所属校の発展・改善における自身の役割をとらえなおすことができましたか。	4.よくできた	3.できた	2.あまりできなかった	1.全くできなかった
6	所属校で校内研修を実施する意欲は高まりましたか。	4.大変高まった	3.高まった	2.あまり高まらなかった	1.全く高まらなかった
7	今回の資料や講義内容は校内研修に活用できそうですか。	4.とてもできそう	3.できそう	2.あまりできそうにない	1.全くできそうにない
8	研修で用いられた資料等は、適切でしたか。	4.とても適切	3.適切	2.あまり適切ではない	1.全く適切ではない

※表 1 行目の数値は、選択肢の内容を得点化したものである。

表 11 は、大学での対面研修 8 月、10・11 月後に実施した自己評価アンケートの質問項目である。受講者はこれを 4 件法で回答し、選択肢を 1～4 に得点化した。以下の調査でも同様。図 6 の横軸 1 から 8 は質問項目の番号を表しており、図 6 は、項目ごとの結果の平均値を並べたものである。

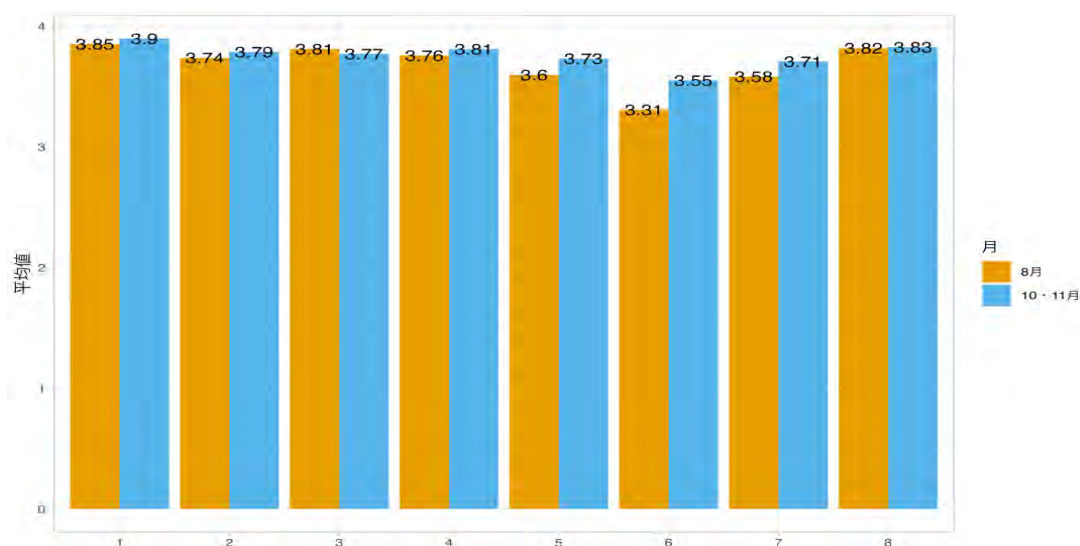


図 6 大学研修受講後の自己評価アンケート全講座の質問項目ごとの平均値の比較

〈検証 1〉 大学研修受講後の自己評価アンケート全講座の質問項目ごとの平均値の比較

〈結果 1〉 8 月分は、全体的に高い数値を示すが、最も平均値が高いのが項目 1「有意義」3.85、項目 8「資料の適切性」3.82、項目 3「自己省察」3.81 と続く。一方、平均値が最も低いのは項目 6「校内研修の実施意欲」3.31 である。

10・11 月分は、8 月分以上に全体的に平均値が高く、最も平均値が高いのが 8 月同様、項目 1「有意義」3.90 で、項目 8「資料の適切性」3.82、項目 4「学びへの意欲」3.81 と続く。一方、平均値が最も低いのが 8 月同様、項目 6「校内研修の実施意欲」3.55 である。

8 月分、10・11 月分の評価の結果を比較するとほとんどの項目で 10・11 月実施の値が高い。8 月分、10・11 月分ともに、項目 6 がそれ以外の項目に比べて相対的に低い。8 月分、10・11 月分ともに、すべての項目の平均値が 3.31 を超えている。

《考察 1》

項目 6「校内研修の実施意欲」は、8 月分、10・11 月分ともに相対的に低いですが、これも含めて非常に肯定的な評価をいただいた。事実、各講義は 3 ユニット約 3 時間の内容であったが、すべての受講者が集中して受講していた。どの講義も演習を織り交ぜた講義であったが、それに対しても意欲的に取り組み、講義後、受講者は講師に対して感謝の言葉を伝えていた。項目 7、8 の評価も高く、「校内研修支援プログラム」は、資料面、講義内容面から質の高い研修であったと考えられる。

本プログラムは受講者の多くが、これを「有意義」だと感じ、これを通して「自己を振

り返り、捉え直し」ができ、自分自身の「学び直し」への意欲が高まっている。

本プログラムでは、大学研修受講者が所属校で校内研修の講師を務めることがねらいとしていたが、項目6「校内研修の実施意欲」が最も低いことから、受講後、全員が校内研修講師になることは難しい。ただ、これは受講者の多くが自己研鑽のためにも受講しており、特に年層の教員が校内研修の講師となって実施する意欲が高まらなかったとしても不思議ではない。このような中、項目6「校内研修の実施意欲」8月分3.31、10・11月分3.55は必ずしも低くない数値といえるだろう。項目7、8により、今回の資料は適切であり活用できそうだと考えられていることから、一定数の教員に対して、EDX UniTextでの講義映像、プレゼン資料の配信があれば、自分でも研修講師ができそうだと効力感を高めることができたといえよう。この結果から、EDX UniTextを用いて講義資料や研修動画を配信すれば、学校や研修講師の負担や不安を軽減し、校内研修支援が可能となったと考えられる。

〈検証2〉自己評価アンケート全講座の質問項目ごとの年代別平均値の比較
〈結果2〉

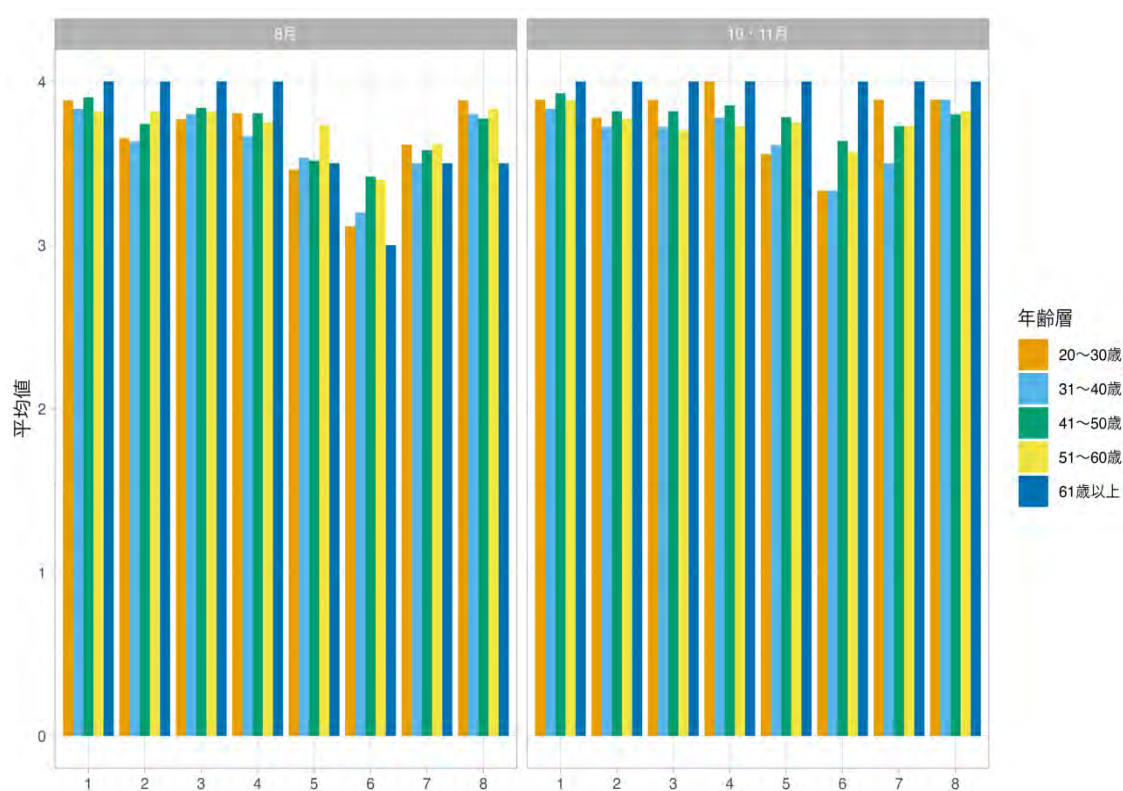


図 7 大学研修受講後の自己評価アンケート全講座の質問項目ごとの年代別平均値

※今回の調査に回答した 61 歳以上の受講者はごく少数であるため、これを除いて検討する。

年代が高い方の数値が高い傾向にあるのは、8月分では項目2「見方、考え方の捉え直し」、項目3「自己省察」、項目5「所属校での役割」、項目6「校内研修の実践意欲」で、10・11月分では項目5「所属校での役割」、項目6「校内研修の実践意欲」である。

年代が低い方の数値が高い傾向にあるのは、8月分では項目8「資料の適切性」、10・11月分では項目3「自己省察」、項目4「学びへの意欲」、項目8「資料の適切性」である。

《考察2》

本プログラムの受講によって、年長者が所属校での役割を再認識し、校内研修を実施したいという意欲が高まっている。学校には、同僚性を高め、年長者が同じ学校の若手を育てていく風土がある。しかしながら、教育委員会等の研修体制が充実するにつれて、学校のOJT機能が失われてきたという声が聞かれるが、本プログラムは、大学の開発した研修資料を活用して学校の教員同士を育てるという機能や同僚性の回復を企図している。本プログラムでは、研修を受けた教員が校内研修をすることの不安を軽減し、成果を実感することで、教員が自主的に学び合う集団となることを期待した。本調査の結果には、その可能性が見出される。また、年齢層が低いほど評価が高いのは、項目8「資料の適切性」である。資料はEDX UniTextによる配信であったことから、IT使用の熟練度が評価に影響した可能性がある。

〈検証3〉自己評価アンケート全講座の質問項目ごとの役職別平均値の比較

〈結果3〉

※今回の調査に回答した指導教諭、養護教諭、講師は0名または数人であり、これを除いて検討する。

校長、教頭、主幹教諭、教諭のみの比較を行うが、どの役職にあるものも、高い数値を示しており、肯定的にとらえていると言える（図8）。

8月分と10・11月分で同じような傾向を示す項目が、項目1「有意義」と項目8「資料の適切性」で主幹教諭、教頭、校長、教諭の順であった。

その他の項目については、8月分と10・11月分とは違った傾向を示した。

《考察3》

項目1、項目8が高いのは、主幹教諭、教頭等である。これらの役職では校内研修を中心的に担当したり、学校内の教員への指導的立場を経験したりすることから、本プログラムの有意義さや、活用することを想定して資料の適切さを判断しているものと考えられる。

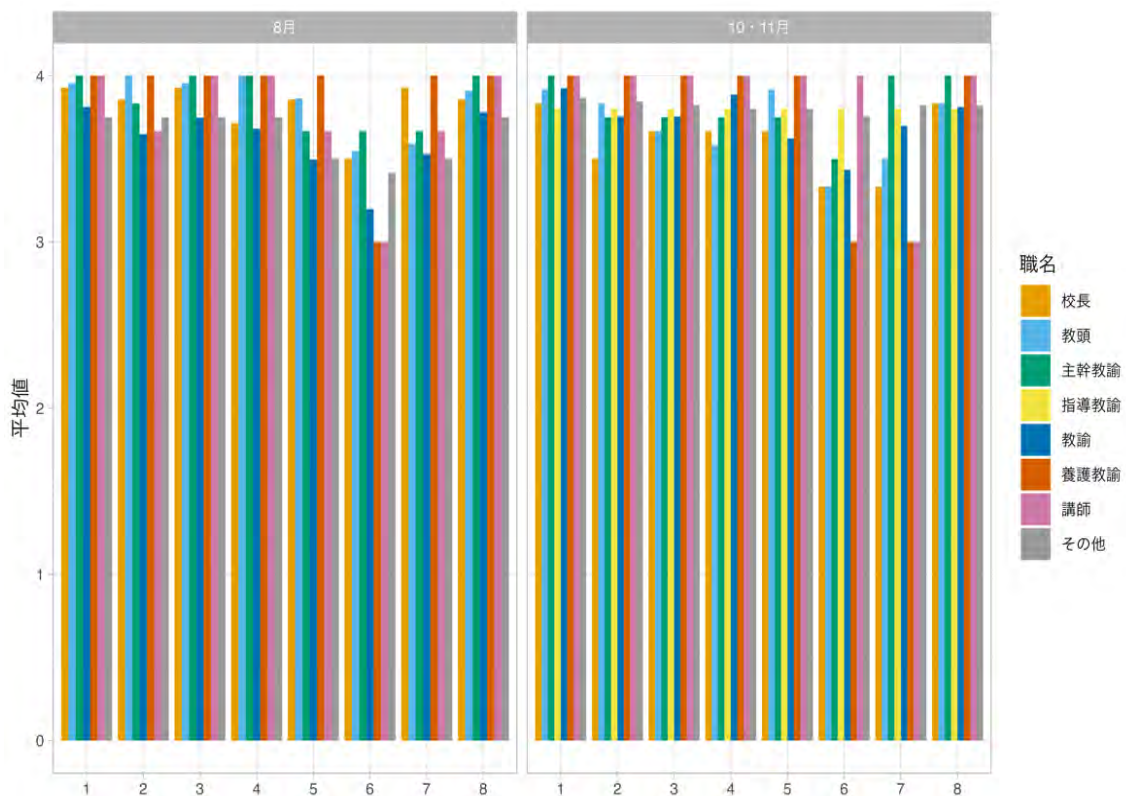


図 8 大学研修受講後の自己評価アンケート全講座の質問項目ごとの役職別平均値

〈検証 4〉 大学研修受講後の自己評価アンケート質問項目ごとの講座別平均値の比較

〈結果 4〉

全講座ともにすべての項目において、高い数値を示している（図 9）。

すべての講座も同様な傾向を示しているが、項目ごとに比較すると、項目 6「研修実施の意欲」が最も低く、項目 5「所属校での役割」、項目 7「講義内容・資料の活用」が他に比べ低い傾向にある。

《考察 4》

全講座がすべての項目で高数値を示していることは、校内研修支援プログラムとしてこれらの講座が適切であると評価されたものと考ええる。

各研修講座の受講終了後、使用された全資料が渡されたとしても、直ちに校内研修の講師を行うことには不安や戸惑いを感じる可能性がある。このため、項目 6、7 の他の項目よりも低い評価につながっていると考えている。また、項目 5 も同様に、研修を受けたことで自己の所属校での役割を捉えることにつながるということも簡単な変化ではない。ただ、検証 1 でも述べたが、これらは相対的な比較であり、数値としては低いわけでない。後述する校内研修受講後のインタビュー調査では、「資料の的確性」や「研修の安心感」に関する発言が多くみられている。

つまり、この調査では、受講者は本プログラムの各講座が内容、資料ともに校内研修を

実施するのに適している」と評価した結果だと考えている。

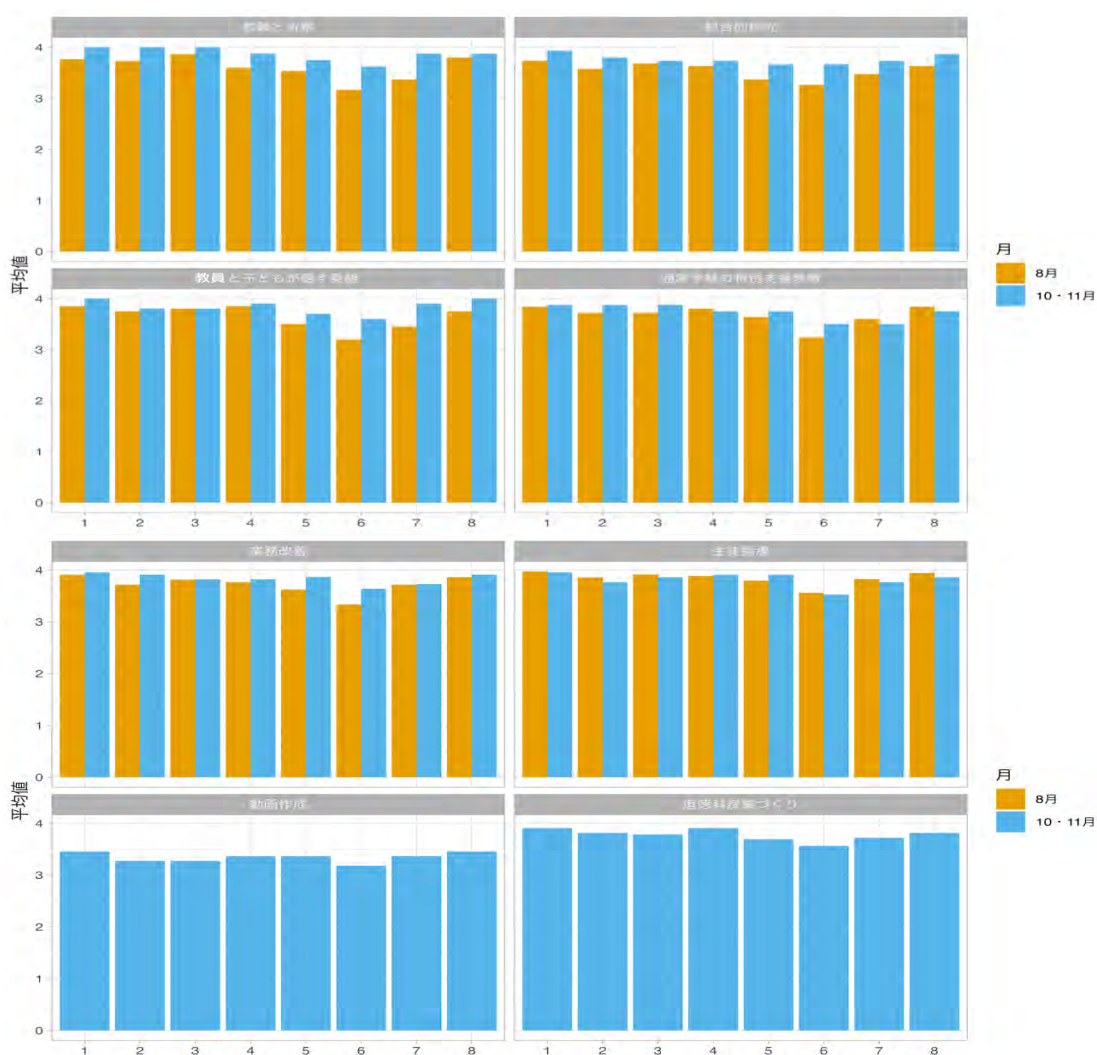


図 9 大学研修受講後の自己評価アンケート質問項目の講座別平均値の比較

(2) 【調査 C】を用いた分析を通して

(対象) 各学校において校内研修を受講した教員

(手続き)

自己評価アンケートの実施について、学校長に事前に依頼し承諾を得た。校内研修終了後、QR コードを付した協力依頼文書を配布し、講師教員が当日中の実施を呼びかけ、表 11 の回答を得た。この自己評価アンケートには、①項目 1～7 で研修受講者に、項目 8～11 で、研修を担当した講師教員へ校内研修の感想や自己の態度について質問した。全員への問いとして、②項目 12～14 でワーク・エンゲージメント尺度 3 項目を質問した。

表 12 校内研修の参加人数等と自己評価アンケート調査の回答数、回答率

講座NO	1	2	3	4	5	6	8	9	合 計
講 座 名 (キーワード)	教職と省察	主体的な総合的 探究的な時間	教員・子どもが 話す英語	通常学級の 特別支援教育	ウェルビーイング を高める業務改善	生徒相談にかかわる 相談指導体制	イチから始める 動画作成	深い学びのある 道徳科授業づくり	
研修実施数(件)	5	4	5	6	6	8	5	5	44
研修参加人数(名)	157	112	87	189	172	307	94	133	1,251
回答数(件)	138	51	62	136	109	226	56	76	854
回答率(%)	87.9%	45.5%	71.3%	72.0%	63.4%	73.6%	59.6%	57.1%	68.3%

(自己評価アンケート①)

表 13 自己評価アンケートの質問項目と選択肢

項目	対象	質問項目 \ 得点	4	3	2	1
1	研 修 受 講 者 用	この研修はあなたにとって有意義でしたか。	4.大変有意義 だった	3.有意義だった	2.あまり意義が なかった	1.全く意義がな かった
2		この研修の内容は、分かりやすく工夫され適切 なものでしたか。	4.よくできた	3.できた	2.あまりできな かった	1.全くできなかつ た
3		研修で用いられた資料等は適切でしたか。	4.よくできた	3.できた	2.あまりできな かった	1.全くできなかつ た
4		これまでの教育の本質的な見方・考え方（教 育観・学習観・児童生徒観・授業観・研修観 など）の捉え直しことができましたか。	4.大変高まった	3.高まった	2.あまり高まら なかった	1.全く高まらな かった
5		受講前より講義内容に興味が深まり、これか らのご自身の学びへの意欲が高まりましたか。	4.よくできた	3.できた	2.あまりできな かった	1.全くできなかつ た
6		所属校の教育の向上や改善のために、自分 の力を発揮したいと思いますか。	4.大変高まった	3.高まった	2.あまり高まら なかった	1.全く高まらな かった
7		研修を受けてきた同僚による、EDX を活用 した方法での校内研修で理解が深まりましたか。	4.とてもできそ うだ	3.できそうだ	2.あまりできそ うにない	1.全くできそうに ない
8	校 内 研 修 講 師 用	研修講師を務めて有意義でしたか。	4.大変有意義 だった	3.有意義だった	2.あまり意義が なかった	1.全く意義がな かった
9		このような機会があればまた研修講師を 務めたいですか。	4.とてもあては まる	3.あてはまる	2.あてはまらな い	1.全くあてはまら ない
10		本研修の EDX ソリューションを活用した 研修は研修内容の理解に効果的だと思いま したか。	4.とてもそう思 う	3.そう思う	2.あまりそう思 わない	4.全くそう思わ ない
11		EDXソリューションを活用した本研修は、 他の研修に比べて、他の先生方への伝達 や周知が簡単にできましたか。	4.とてもそう思 う	3.そう思う	2.あまりそう思 わない	4.全くそう思わ ない

※表 1 行目の数値は、選択肢の内容を得点化したものである。

※質問項目の 1～7 は研修を受講した教員対象の項目、8～11 は講師教員対象の項目である。

〈検証 5〉 校内研修後の自己評価アンケート質問項目ごとの講座別平均値の比較
 〈調査 5〉



図 10 校内研修後の自己評価アンケート質問項目ごとの講座別平均値の比較

※調査 C では、項目 1～7 は同僚による校内研修を勤務校で受講した教員（以下、「受講教員」）、項目 8～11 は愛媛大学で対面講座を受講し校内研修で EDX UniText を活用して講師を務めた所属校の教員（以下、「講師教員」）が回答したものである。

受講教員の評価では、どの項目も 3.14 以上の高評価である。その中で、項目 4「見方・考え方の捉え直し」、5「学びへの意欲」が比較的低い講座もある。

受講教員の評価では、3.30 を下回っているのが、項目 4 では「N03 業務改善」3.22、項目 5 では「N01 教職と省察」3.27、「N02 総合的探究」3.28、「N05 業務改善」3.22 である。

講師教員の評価では、項目 9「講師の講義への再挑戦」、10「EDX UniText 活用の理解」、11「EDX UniText 伝達が簡単」がやや低い傾向にあるが、「N02 総合的探究」はすべての

項目で 3.20 を、「N05 業務改善」はすべてで 3.00 を上回っている。

「N01 教職と省察」は、本調査のすべて講座の各項目と比較して、項目 8「講師の有意義」3.67 が最も高く、項目 9 が 1.83 と最も低い。

講師教員では、「N01 教職と省察」「N03 教員と子どもが話す英語」「N04 通常学級の特別支援教育」「N06 生徒指導」「N08 動画作成」では、項目 8、10 が高く、項目 9 が低いという傾向が一致している。

「N09 道徳科授業づくり」の講師教員評価では、項目 10 が 2.5 で最も低かった。

平均値が 2.5 を下回ったでは、項目 9 で、「N01 教職と省察」1.83、「N04 通常学級の特別支援教育」2.40、「N08 動画作成」2.33 であった。

《考察 5》

※講師教員全員が事後アンケートを回答しているとして、最大 8 名であることから、数値には散らばりがあることを前提に置いて考えなければならない。

受講教員の評価では、これらの研修を受講して、資料が適切でわかりやすかったことで有意義であり、これにより自己の振り返りを促すよい機会となったと感じていることがわかる。

受講教員の中には、十分に見方・考え方を捉え直したり、学びへの意欲が高まったりするに至らなかった方もいたものと思われる。例えば、「N01 教職と省察」「N05 業務改善」では、内容の専門性が高かったり、これらに関連する職務、役職についていなかったりすることがこの結果の要因だと考えられる。

複雑化、多忙化する学校の状況に鑑み、教員が教職員への研修講師を務めるということは簡単なものではない。そのため、再度研修講師をしたいかという問いに対して否定的な回答をした研修講師がいたことは想像に難くない。この傾向が顕著であったのは、専門性がより高い内容であった「N01 教職と省察」「N03 教員と子どもが話す英語」「N04 通常学級の特別支援教育」「N08 動画作成」においてである。逆に言えば、この内容を講師教員が助けなしに自力で実施することは困難であることを示す調査結果であり、校内研修支援が目的の本プログラムの意義を示す結果でもある。

項目 10「EDX UniText の活用・理解」が最も低い講座は、本研修が県外から招へいた講師によるものであった。この教員は、本事業で実施した「EDX UniText」利活用説明会（図 1）には参加できていない。

今後の教員養成や現職教育において、オンライン・オンデマンドを活用した学習は極めて有効である。しかし、何が有効で、何が有効でないかを精査する必要がある。つまり、これを念頭に置いた講義づくりは今後の大きな課題である。

EDX UniText 活用の際に、研修講師が講義ユニットで伝えたい内容を、どのようにすれば簡便にかつ効果的に受講者にお届けできるかを、十分に検討することがプログラム開発では、常に課題として残され続ける。そのため、成果を分析しながら、改善をおこなっていく必要がある。

（自己評価アンケート②）

前述の通り、自己評価アンケートでは、「仕事に関する調査 3 項目」（ユトレヒト・ワーク・エンゲイジメント尺度 Schaufeli & Bakker（2003））についても質問している。質問項目と選択肢は次の通りである。

表 14 校内研修後実施した、自己評価アンケートの内容 2（ワークエンゲイジメント尺度）の質問項目・選択肢

項目	対象	質問項目 \ 得点	4	3	2	1
12	全員	【活力】仕事をしていると、活力がみなぎるように感じる。	4.大いにあてはまる	3.あてはまる	2.あまりあてはまらない	1.全くあてはまらない
13		【熱意】仕事に熱心である。	4.大いにあてはまる	3.あてはまる	2.あまりあてはまらない	1.全くあてはまらない
14		【没頭】私は仕事にのめり込んでいる。	4.大いにあてはまる	3.あてはまる	2.あまりあてはまらない	1.全くあてはまらない

〈結果〉

項目 12「活力」尺度については講師教員が上回り、項目 13「熱意」尺度については受講教員が上回っている（図 11）。項目 14「没頭」尺度は両者の差が見られない。

3 項目を比較すると、講師教員、受講教員ともに項目 13 の数値が高い。

《考察》

校内研修を実施した 2 学期には、学校では様々な意識の変容をもたらす要因があるため、校内研修とこの調査結果との関連は不明である。

この結果を校内研修によるものと仮定すると、講師教員は、研修講師を務めることで活力がみなぎったことになる。一方、受講教員は、校内研修により仕事を熱心に取り組む意識が高まったと言える。ただ、このように判断するには、さらに詳しい調査が必要である。

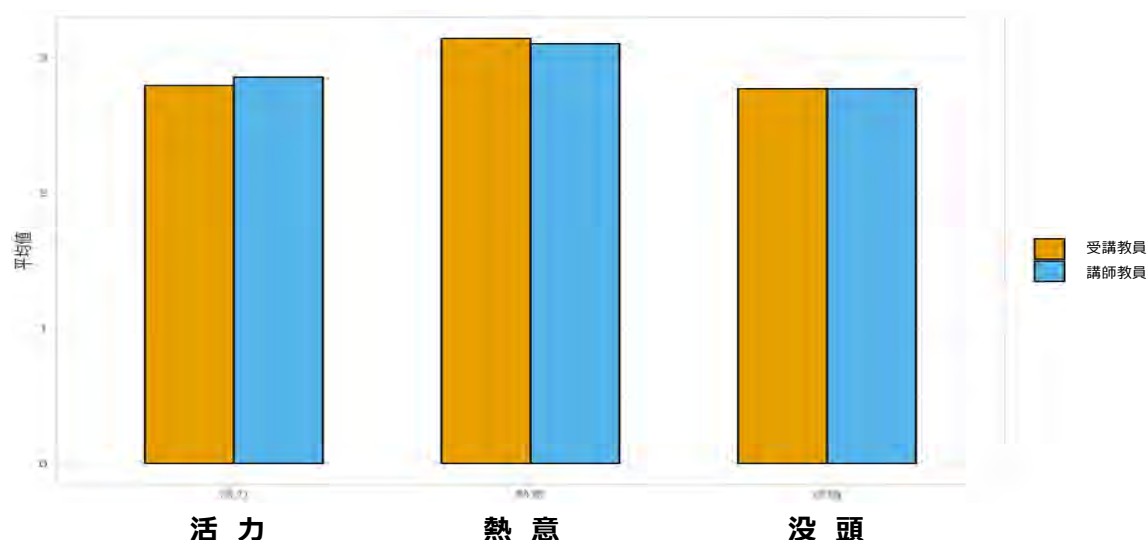


図 11 ワーク・エンゲージメント尺度の講師教員と受講教員の平均値の比較

(3) 【調査 A・B】と【調査 C】の比較による分析を通して

〈検証 6〉大学研修後と校内研修後の自己評価アンケートの共通項目ごとの平均値の比較
〈結果 6〉

今回、本プログラムで最も重要視したことは、大学の質の高い研修を現場の負担をできるだけ軽減して、校内研修で実施していただくことである。そのために、EDX UniText を活用し、使用した全資料と講義を 10 分程度に区切った分割動画を配信した。これにより受講者（講師教員）が学び直しを容易にするとともに、資料作成等の手間を省いた。

それを検証するために、大学の対面講座受講後と校内研修受講後の自己評価アンケートの調査項目ごとの講座別平均値の比較をした。評価項目には「表 13) 自己評価アンケートの質問項目と選択肢」の項目 1、3、4、5、6 を使用し、新たに項目番号を 1、2、3、4、5 とした。

表 15 大学研修後と校内研修後の自己評価アンケートの共通項目と選択肢

項目	表 13) の 項目番号	質問項目 \ 得点	4	3	2	1
1	1	この研修はあなたにとって有意義でしたか。	4.大変有意義だった	3.有意義だった	2.あまり意義がなかった	1.全く意義がなかった
2	2	この研修の内容は、分かりやすく工夫され適切なものでしたか。	4.よくできた	3.できた	2.あまりできなかった	1.全くできなかった
3	4	これまでの教育の本質的な見方・考え方（教育観・学習観・児童生徒観・授業観・研修観など）の捉え直しことができましたか。	4.大変高まった	3.高まった	2.あまり高まらなかった	1.全く高まらなかった
4	5	受講前より講義内容に興味が深まり、これからのご自身の学びへの意欲が高まりましたか。	4.よくできた	3.できた	2.あまりできなかった	1.全くできなかった
5	6	所属校の教育の向上や改善のために、自分の力を発揮したいと思いませんか。	4.大変高まった	3.高まった	2.あまり高まらなかった	1.全く高まらなかった

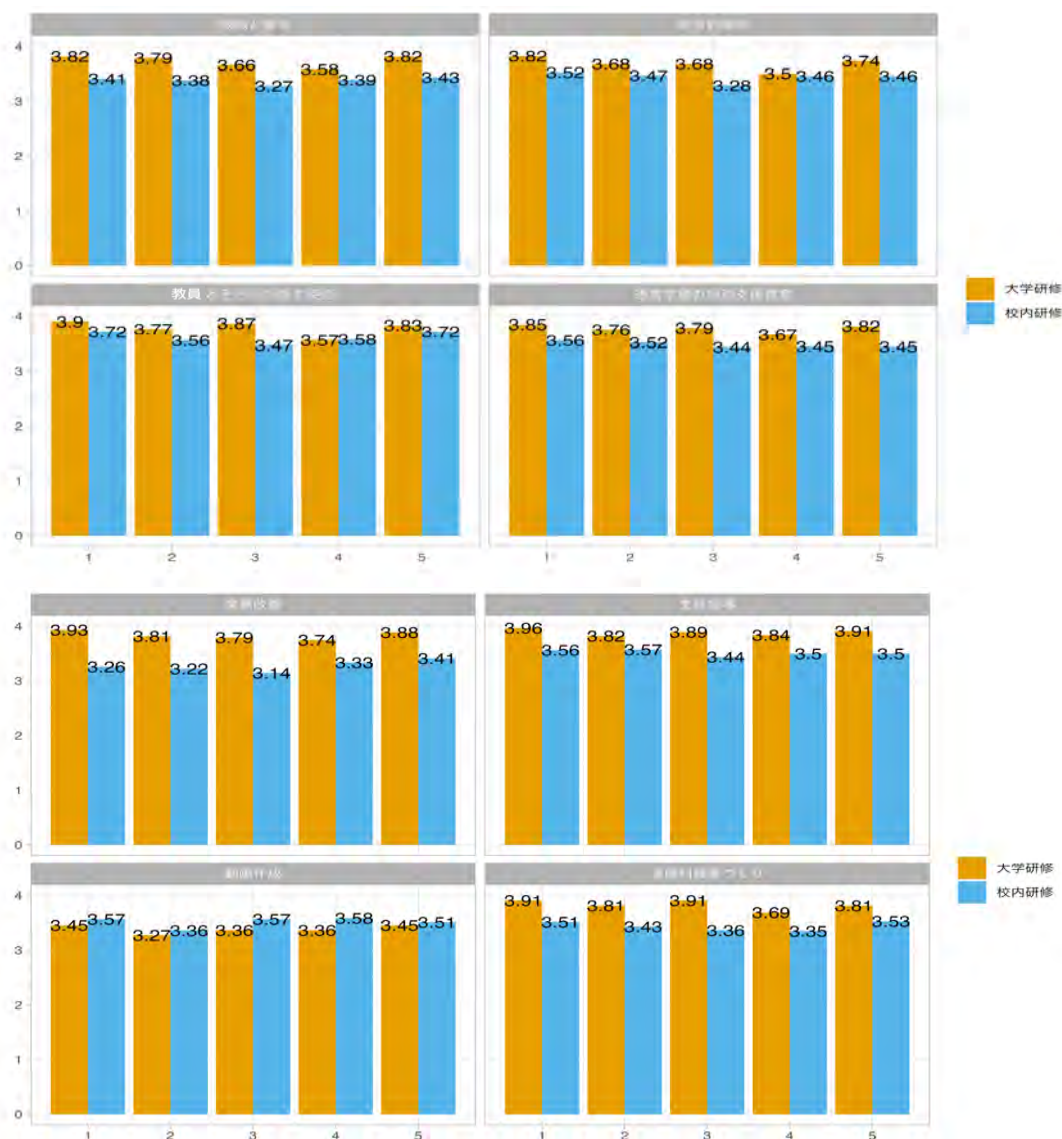


図 12 大学での対面講座後と校内研修後の自己評価アンケート講座別平均値

「N01 教職と省察」「N02 総合的探究」「N04 通常学級での特別支援教育」「N05 業務改善」「N06 生徒指導」「N08 道徳科授業づくり」の6講座が調査項目5項目すべてで大学研修が校内研修を上回った。

項目ごとの講座別平均値は、大学研修では3.27～3.96の間にあり、校内研修では3.14～3.72の間にあった。

大学研修と校内研修の5項目平均値の差は、「N05 業務改善」が0.56で最も大きく、「N06 生徒指導」0.37、「N01 教職と省察」0.36と続く。

「N03 教員・子どもが話す英語」では、項目4「学びへの意欲」で0.01大学研修が校内研修を下回った。「N07 動画作成」では、調査項目のすべてで大学研修が校内研修を下回り、その差の平均値は0.14だった。

校内研修後の自己評価アンケート平均値は、全講座 3.27 以上と高い平均値を示している。この中で最も低いのが、「N05 業務改善」項目 3「見方・考え方の捉え直し」3.14、項目 2「わかりやすさ」3.22 であった。

大学研修、校内研修ともに高い数値を示しているのが、項目 1「有意義」、項目 5「所属校への貢献」であった。

《考察 6》

校内研修のすべての講座の 5 項目で 3.27 以上の高い数値を示していることは大学研修の質の高さを校内研修でもある程度維持できていると考えられる。校内研修の 5 項目平均値が低い「N05 業務改善」「N01 教職と省察」については、専門性が高く、学校現場で指導できる教員に限られるものと思われる。その中で、校内研修における「N05 業務改善」の 5 項目平均値 3.27、「N01 教職と省察」の 5 項目平均値 3.38 は極めて高い数値と言える。

「N07 動画作成」ではすべての項目において校内研修の数値が高かった。大学研修では、特に専門性を要する内容であること、また、受講者の興味関心や力量に差があった上、松山市が児童生徒に配布しているタブレットでこれらのアプリ等が使用できないため操作に不慣れであったことが重なり、各項目で低い数値となってもものと考えられる。

しかしながら、今回校内研修を実施した学校等では、例えば、校内研修でホームページにアップする動画を作成する等のように、目標を絞り内容を厳選して取り組んでいた。このことから当該学校や教員等のニーズに応じた分かりやすさがあり、高評価を得たものと考えられる。

6 「現代的課題対応実践力高度化研修プログラム」量的調査の分析【調査 D】

(対象) 各講座を受講した教員

(手続き) 愛媛大学が担当した講座では、終了後、QR コードを付した評価票の協力依頼を配布し、事業担当者が当日中の実施を呼びかけ、8 項目の設問に回答した。松山市教育研修センターが担当した講座では、終了後に指導主事から調査用紙が配布され 3 項目の設問に回答した。5 回シリーズで実施した「教育版マイクラフト」と「概念型探究」については、最終回の第 5 回終了後に自己評価アンケートを実施した。第 5 回に欠席した受講者にはメールで速やかな実施を依頼し、表 16 の回答を得た。なお、松山市担当講座では、松山市在籍の教員のみの調査であった。

表 16 現代的課題対応実践力高度化研修プログラムの参加人数と自己評価アンケート調査の回答数、回答率

NO	15~19	20~24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	
講座名 (キーワード)	活用版 マイクラフト 入門	概念型探究授業づくり	アプリを使った アニメーションづくり	深い学びの道徳教育づくり	はじめてのプログラミング	ICTを活用したり 家庭科の授業づくり	絵本を活用した 主権者教育授業づくり	ネット・モラル 特別活動のICT利用・	ICTを活用した体育科・ 保健体育科の授業づくり	英語の授業・活動アイデア	ICTを活用した 算数・数学科の授業づくり	学級ファシリテーション・ ICTの活用へ	合計
受講者数(名)	54	87	23	22	15	20	17	40	18	18	17	44	375
実数(名)	15	18	23	22	15	20	17	40	18	18	17	44	267
回答数(件)	8	16	8	12	7	8	13	22	12	9	12	30	157
回答率(%)	53.3%	88.9%	34.8%	54.5%	46.7%	40.0%	76.5%	55.0%	66.7%	50.0%	70.6%	68.2%	58.8%

表 17 自己評価アンケートの質問項目と選択肢

項目		質問項目 \ 得点	4	3	2	1
1	愛媛大学 のみで実 施した研 修項目	この研修はあなたにとって有意義でしたか。	4. 大変有意義だった	3. 有意義だった	2. あまり意義がなかった	1. 全く意義がなかった
2		これまでの教育の本質的な見方・考え方（教育観・学習観・児童生徒観・授業観・研修観など）の捉え直しができましたか。	4. 大変高まった	3. 高まった	2. あまり高まらなかった	1. 全く高まらなかった
3		これまでの自身の教育実践への省察や捉え直しができましたか。	4. ようできた	3. できた	2. あまりできなかった	1. 全くできなかった
4		これからのご自身の学びへの意欲が高まりましたか。	4. ようできた	3. できた	2. あまりできなかった	1. 全くできなかった
5		所属校の発展・改善における自身の役割を捉え直すことができましたか。	4. ようできた	3. できた	2. あまりできなかった	1. 全くできなかった
6	両 方 の 共 通 項 目	新しい知見が得られましたか。	4. 大変得られた	3. 得られた	2. あまり得られなかった	1. 全く得られなかった
7		今回のご自身の教育活動に生かせるものでしたか。	4. とても生かせる	3. 生かせる	2. あまり行かせられない	1. 全く行かせられない
8		主体的に参加できましたか。	4. とてもできた	3. できた	2. あまりできなかった	1. 全くできなかった

※表 1 行目の数値は、選択肢の内容を得点化したものである。

※質問項目 1～5 は愛媛大学が担当した 7 講座だけの項目とした。質問項目 6～8 は全研修の共通項目とした。

〈検証 8〉現代的課題対応実践力高度化研修プログラムの全講座の調査項目別平均値の比較

〈結果 8〉

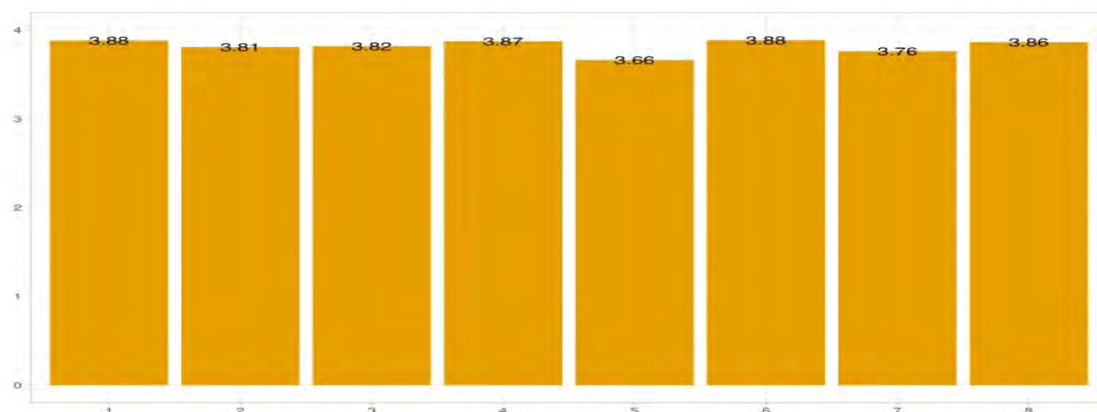


図 13 現代的課題対応実践力高度化研修プログラム全講座の項目別比較

どの項目も 3.66 以上で、非常に高い数値を示している。

特に平均値が高い項目は、項目 1 「有意義」 3.88、項目 6 「新しい知見」 3.88、項目 4 「学びへの意欲」 3.87 で、比較的低い項目は、項目 5 「役割の捉え直し」であった。

《考察 8》

「現代的課題対応実践力高度化研修プログラム」各講座は、教科や領域において現代的課題に対応し専門的な実践力を高めようとした内容であったが、十分に満足いく内容であったと判断できる。

本プログラムでは、現代的課題の高度化を謳っており、受講者が新しい、有意義な学びであると感じることがまず重要である。受講者は、本プログラムの受講により、新しい「知見」を得て興味・関心が刺激され、それが「有意義」だったと感じ、その後の「学びに対する意欲」、活力につながったと考えられており、ねらいは十分に達成できている。

一方、本プログラムでは、所属校での役割の捉え直すことに至っていない教員もいたよう。これは、受講者に若手教員が多かったことや各講座自体が役割を捉え直すことには適していない、またはその観点で教材作成していない等が考えられる。

〈検証 9〉 現代的課題対応実践力高度化研修プログラムの全講座の調査項目別平均値の比較

〈結果 9〉

表 18 「現代的課題対応実践力高度化研修プログラム」 講座ごとの項目別平均値

質問項目番号	講座NO 研修名 キーワード 項目 キーワード	15~19	20~24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
		教育版マインクラフト活用入門	概念型探究による授業づくり	アプリを使いこなす	深い学びのある道徳教育づくり	初小のプログラミング	ICTを活用した家庭科	絵本を活用した主権者教育	特別活動のICT活用・ネット利用・オンライン	保健体育科の活用した体育科・	英語科の授業・活用したアイデア	算数・数学科の授業づくり	学級ファシリテーション・
1	有意義	3.50	3.88						3.95	3.92	4.00	3.75	3.93
2	見方・考え方の捉え直し	3.63	3.63						3.95	3.92	3.78	3.75	3.83
3	教育実践への省察	3.50	3.69						3.95	4.00	3.78	3.67	3.87
4	学びへの意欲	3.63	3.69						3.95	3.83	4.00	3.92	3.93
5	自身の役割を捉え直し	3.50	3.50						3.82	3.58	3.67	3.50	3.77
6	新しい知見	3.88	3.81	3.90	4.00	3.86	3.63	4.00	4.00	3.92	4.00	3.75	3.83
7	今後に生かせる	3.25	3.56	3.70	3.92	3.57	3.63	4.00	3.91	3.83	3.78	3.67	3.87
8	主体的参加	3.63	3.88	3.90	3.67	3.71	3.83	4.00	3.95	3.83	4.00	3.67	3.97
講座別平均値		3.56	3.70	3.83	3.86	3.71	3.69	4.00	3.94	3.85	3.88	3.71	3.88

講座ごとの平均値が 3.56～4.00、項目ごとの数値も 3.25 以上と極めて評価が高い。

講座別平均値は、「N029 主権者教育〈3 項目〉」の 4.00 を筆頭に、「N030 特別活動」が 3.94、「N034 学級ファシリテーション」と「N031 英語科」が 3.88 と続く。

「N015～19 マインクラフト」が 3.56、「N028 家庭科」が 3.69、「N027 小学校プログラミング」「N033 算数・数学科」3.71 と他と比較すると低いですが、これも十分に高い数値である。

項目 6「新しい知見」は、全講座で高い数値を示しており、講座別にみると、12 講座中 8 講座で 1 位の項目であり、その他の講座でも上位の項目となっている。「N026 道徳教育づくり」「N029 主権者教育」「N030 特別活動」「N032 英語科」では全員の評価が 4.00 を筆頭に、「N034 体育科・保健体育の授業づくり」が 3.92、「N025 アプリでアニメーション」が 3.90 と続く。

項目 5「自己の役割の捉え直し」は相対的に見て全講座とも低めの数値であり、項目 7「今後に生かせる」の数値には講座によるばらつきがあった。

《考察 9》

本プログラムは、前述の通り、「現代的課題に対応し実践力の高度化を図る」ものであるから「新しい知見」は最重要である。ほとんどの講座で現代的な課題に関する新しい知見が得られて有意義だと回答していることは、ねらいは十分に達成できたと判断できる。

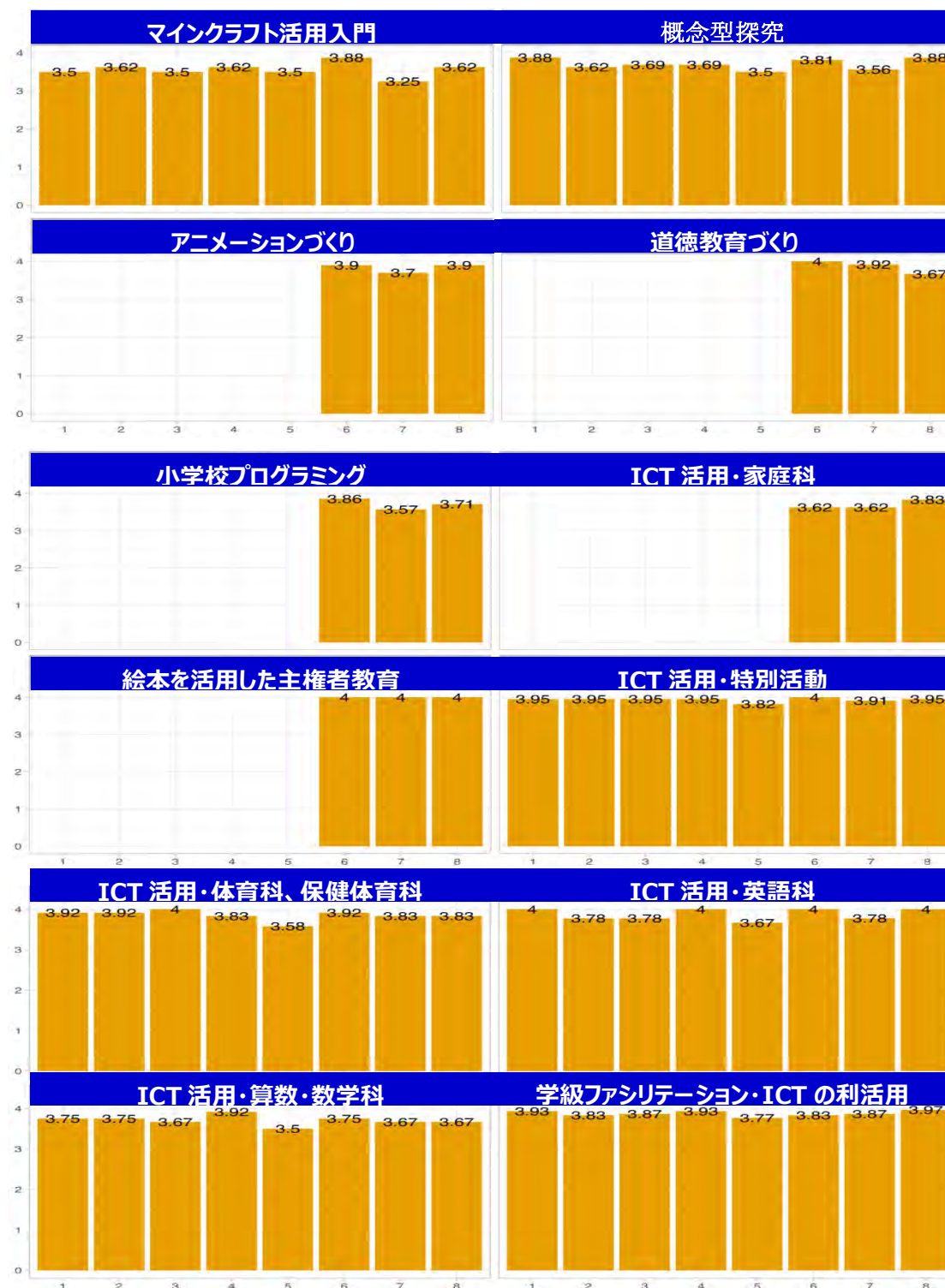


図 14 「現代的課題対応実践力高度化研修プログラム」講座ごとの調査項目別平均値の比較

「マインクラフト」「概念型探究」は受講者に一定の専門性が求められる内容であった。どの講座にもいえることではあるが、難しい内容をいかに分かりやすくするか、いかにゴールを明確するか等、改善が必要である。「算数・数学科」は小学生から高校生までの指導内容に幅が見られ、受講者の興味の差が見られた。受講者の興味・関心が維持するための工夫がさらに必要であるが、算数科と数学科を分けて実施することも検討する必要がある。

7 NTT EDX UniText の利用ログを用いた成果分析【調査 E】

(1) 利用頻度に着目した分析

①校内研修支援プログラムの分析

校内研修プログラムの8講座について、NTT EDX UniText の利用ログをデータとして分析した結果が下の表 19（利用人数）と図 15（％）である。

表 19 「校内研修支援プログラム」複数回利用分析

	講座名	1回	2回	3回	4回	5回	6回以上
1	教職と省察 - 教師生活をふりかえり、これからを考える -	39	14	2	0	0	4
2	主体的な学びを促進する「総合的な探究の時間」校内研修	31	5	2	2	0	1
3	「教員が話す英語」と「子ども（児童）が話す英語」を磨く＆鍛えるための研修	30	7	2	1	0	2
4	通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修	36	6	3	2	1	3
5	信頼とウェルビーイングを高める業務改善研修	59	10	2	4	3	0
6	保護者のクレームが相談にかわる生徒指導体制の確立	50	12	7	2	3	6
8	イチから始める動画作成研修	11	6	1	0	0	1
9	深い学びのある道徳科授業づくり研修	28	14	0	1	0	1

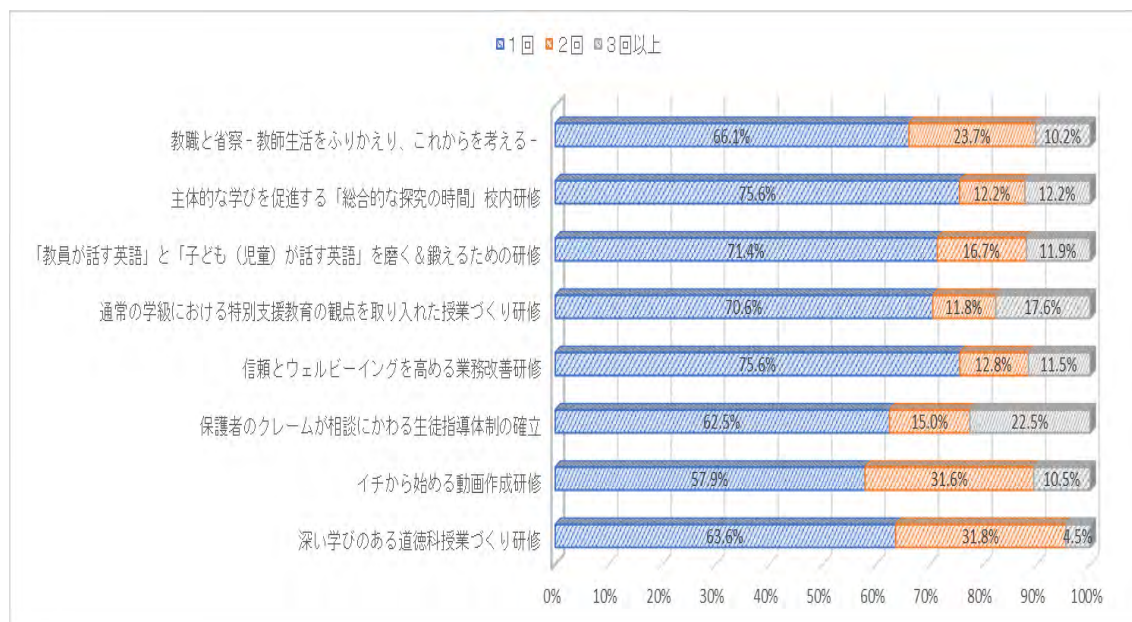


図 15 「校内研修支援プログラム」複数回利用分析

図については、わかりやすくするために、利用回数を「1回」「2回」「3回以上」にして表示している。「1回」の利用は、研修当日のみの利用を意味し、「2回」以上については、複数日復習等で利用していることを意味している。この分析を用いることで、意識

調査とは異なる研修の行動分析が可能となる。なお、この分析では、授業資料及び動画の数が利用ログとして分析の対象となっている。

分析の結果では、1 回だけの利用が最も多かったのは「信頼とウェルビーイングを高める業務改善研修」「主体的な学びを促進する『総合的な探究の時間』校内研修」であり、75.6%であった。一方、最も 2 回以上の利用が多かった研修が、「イチから始める動画作成研修」であり、3 回以上の利用が多かった研修が、「保護者のクレームが相談にかわる生徒指導体制の確立」の 22.5%、「通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修」の 17.6%であった。

3 回以上の利用が多かった研修は、事例動画を作成し、繰り返しケーススタディができるようになっているため、繰り返し学習型の研修受講となったと考えられる。一方、どの講座も 25%から 40%の複数回利用となっており、校内研修で利用した受講生（講師教員）のみならず、一般受講の教員も複数日利用していることがわかる。

NTT EDX UniText を利用した研修は、愛媛県の教員にとって初めての体験であり、今回参加した教員は、当日 ID を取得し、その後利用をする形式であった。そのため、この研修後は自宅や学校で自ら URL にアクセスし、利用するということをしなければならず、デジタル機器に慣れていない教員にとっては、利用のハードルは高いものであった。しかしながら、この研修受講の方法が常に、県内で同じであれば、この複数利用が増加する可能性がある。

②現代的課題研修プログラム

現代的課題研修プログラムは、複数日の利用が「校内研修支援プログラムに比べて少なかった。利用ログを分析した場合、下図に示されるように、参加者数における割合としては、「教育版マイクラフト入門」「深い学びを引き起こす道德教育づくり」において、複数回が多い。しかしながら、これらの講座は、NTT EDX UniText の利用者数の少ない講座であり、一概に、割合の問題を検討しづらい。

しかしながら、これらの講座においても、複数回利用をしている受講者の割合が 1 割から 3 割程度あることは、一つの成果かもしれない。一方、下の表より「ICT を利用した体育科・保健体育科の授業づくり」には、20 名の参加者がいるものの、振り返り受講が行われていないことがわかる。

これらの「現代的課題研修プログラム」では、教員個々人のスキルの向上を中心とする内容であり、ワークショップや体験型の内容が多く含まれている。そのため、講座内でスキルの獲得を体験的に丁寧にするほど、複数回利用が少なくなることが確認された。一方、少数ながら、振り返りに利用し、学習の深化・拡充や指導技術の向上に努めている教員の受講の在り方もある。

これらは、「振り返り学習」を想定したプログラム内容の充実の必要性が課題として挙げられる。

表 20 「現代的課題研修プログラム」複数回利用分析

講座名		1回	2回	3回	4回以上
1	ICTを活用した英語の授業・活動アイデア	15	2	0	0
2	ICTを活用した家庭科の授業づくり	14	2	0	1
3	教育版マイクラフト活用入門	5	1	1	0
4	特別活動のICT利用に向けて	42	6	0	0
5	学級ファシリテーション-ICTの利活用へ	38	2	0	0
6	ICTを活用した体育科・保健体育科の授業づくり	20	0	0	0
7	絵本を活用した主権者教育の教材・授業づくりの視点と方法	9	1	0	0
8	深い学びを引き起こす道徳教育づくり	3	1	0	1

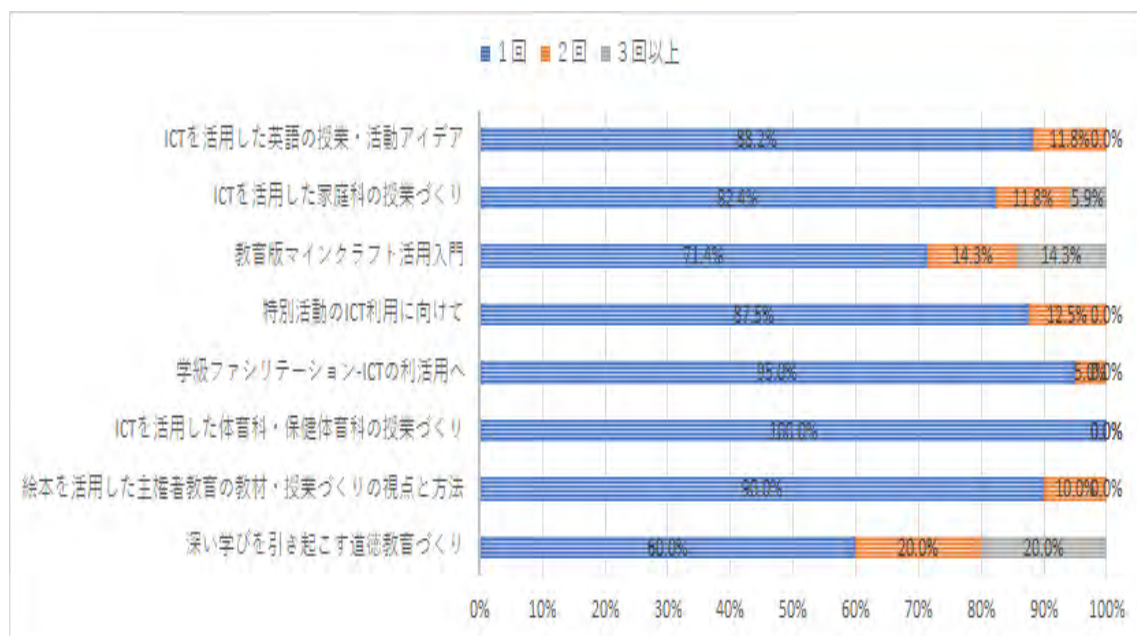


図 16 「現代的課題研修プログラム」複数回利用分析

(2) 利用ログを用いた各講座のアノテーション分析

NTT EDX UniText の極めて重要な機能は、講座資料の利用ログを用いて受講者がどのような利用を行っているかをアノテーション分析できる点である。この分析の対象はPDF化された研究資料のみが対象である（本分析では動画視聴は分析できない）。まず、追従度の分析を中心に、それぞれの講座の中心的な資料から検討してみたい。ただし、本来の追従度の分析では、講師側が研究中表示している頁と学習者側が表示している頁の追従度を分析するものであるが、ここでは、講座内での利用の状況と、講座後の複数回利用の実態をみることで、どのような利用がおこなわれているかを検討したい。また、この講座の利用者において、どのような利用が行われているかを、それぞれアノテーション分析した一部の結果を例示する。講座により複数資料と一つの資料を用いている場合があるため、

複数資料の場合は利用の多い資料あるいは講座の第一資料を分析の対象とした。期間は、令和5年8月20日から令和6年1月10日までの分析可能な利用ログを収集できた講座を対象としている。

①校内研修支援プログラム

1) 講座「教職と省察 - 教師生活をふりかえり、これからを考える -」

この講座では、講師はNTT EDX UniText を介さず、パワーポイントを利用し講座を行っている。そのため、表示されているものは、受講者側の利用である。興味深いことは、講座中においては、全体的に追従して資料を活用していることがわかる（一番左の黒丸）。また講座後の利用においては、資料の一部を活用した学習、全体的な学習として用いられていることがわかる。校内研修で利用する場合、ユニットごとの短時間利用のケース、全体的な利用のケースがあり、それらの学習や利用の在り方が示されている。

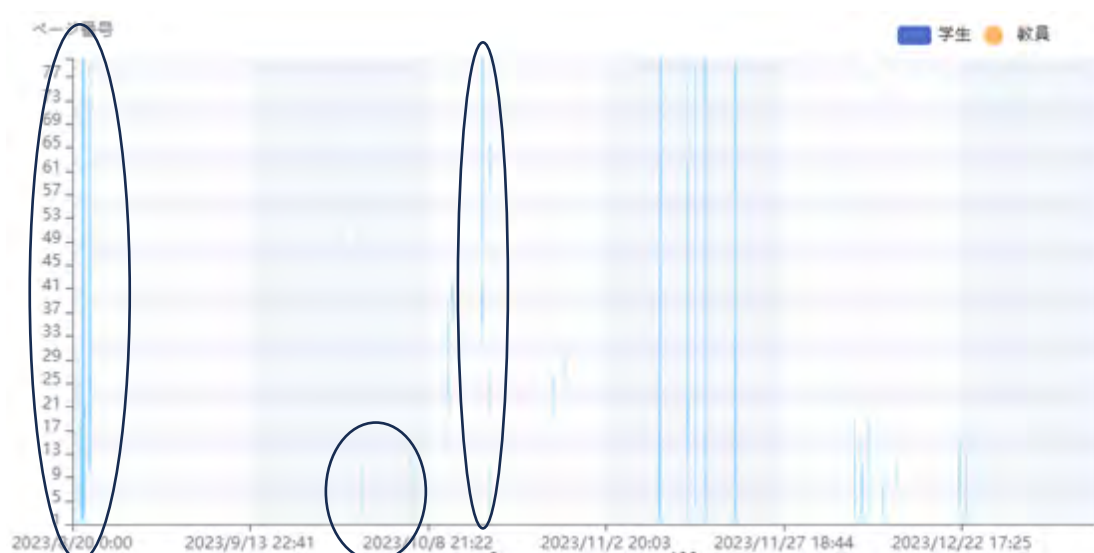


図 17 教職と省察追従度分析

この講座では、アノテーション分析から、講座を実施した午前中以外に、23時から深夜2時までの学習を行っている受講生がおり、働き方改革の点でいえば、教員の学習を支援するプログラムが、教員の過剰な学習や学びを促進するという負の側面もあることがわかった。



図 18 教職と省察アノテーション分析

またこのアノテーション分析からは、304 回のマーカーが引かれており、どの程度の主体的な学習をしているか、行動分析が可能となっている。今回は、この分析自体を比較する研究蓄積がないため、まず講座全体の分析結果を事実として示す。

なお、追従度分析とアノテーション分析は、5 分以上、資料にアクセスした者を検出して分析を行っている。以下、すべて同じである。

2) 講座「主体的な学びを促進する『総合的な探究の時間』校内研修」



図 19 総合的な探究の時間追従度分析



図 20 総合的な探究の時間追従度分析

3) 講座「『教員が話す英語』と『子ども（児童）が話す英語』研修」

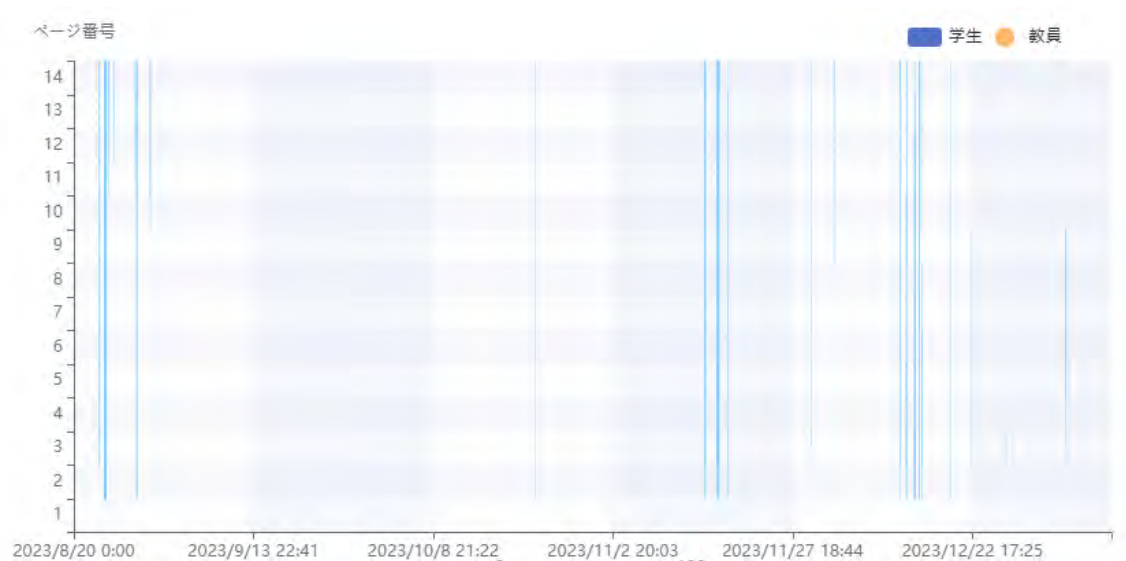


図 21 英語校内研修支援追従度分析



図 22 英語校内研修支援アノテーション分析

4) 通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修



図 23 特別支援教育追従度分析



図 24 特別支援教育アノテーション分析

5) 信頼とウェルビーイングを高める業務改善研修

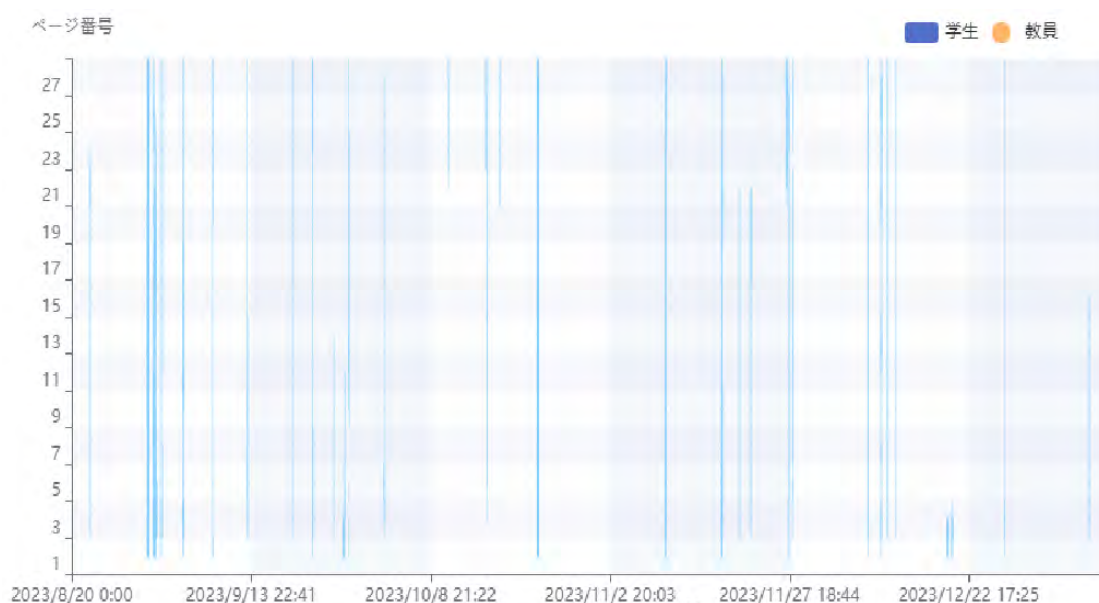


図 25 信頼とウェルビーイング追従度分析



図 26 信頼とウェルビーイングアノテーション分析

6) 保護者のクレームが相談にかわる生徒指導体制の確立

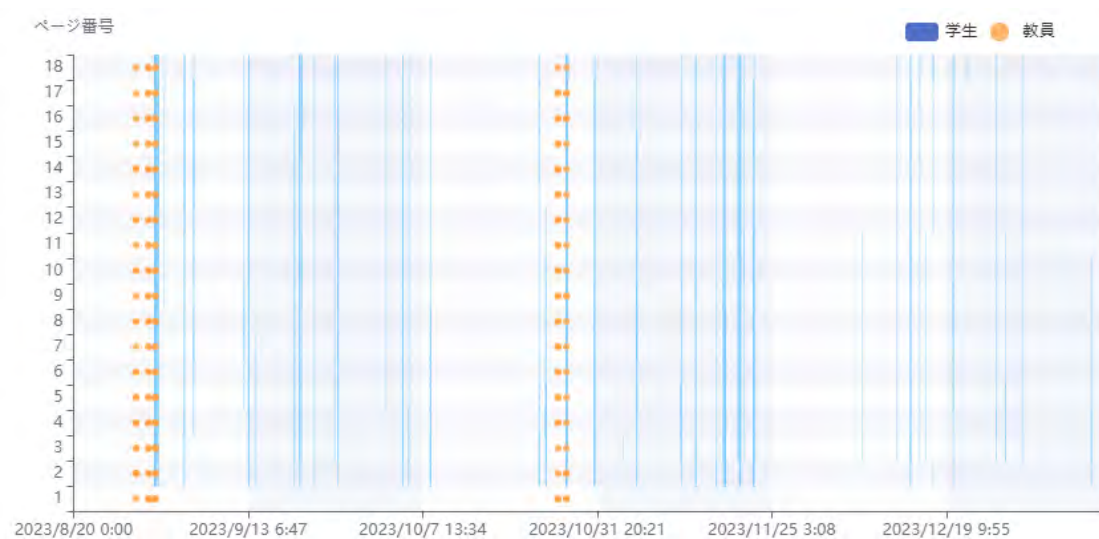


図 27 保護者クレーム追従度分析



図 28 保護者クレームアノテーション分析

7) イチから始める動画作成研修



図 29 動画作成追従度分析



図 30 動画作成アノテーション分析

8) 深い学びのある道徳科授業づくり研修



図 31 深い学びのある道徳科追従度分析



図 32 深い学びのある道徳科アノテーション分析

②現代的課題研修プログラム

現代的課題研修プログラムでは、アノテーション分析が可能であった7講座のデータを分析する。

1) ICT を活用した英語の授業・活動アイデア

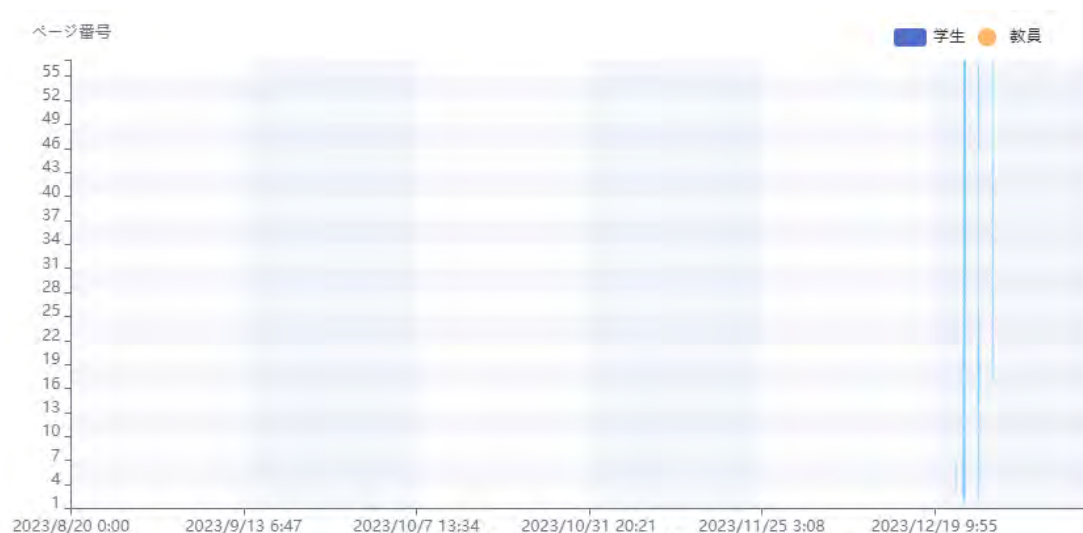


図 33 追従度分析



図 34 アノテーション分析

2) ICT を活用した家庭科の授業づくり

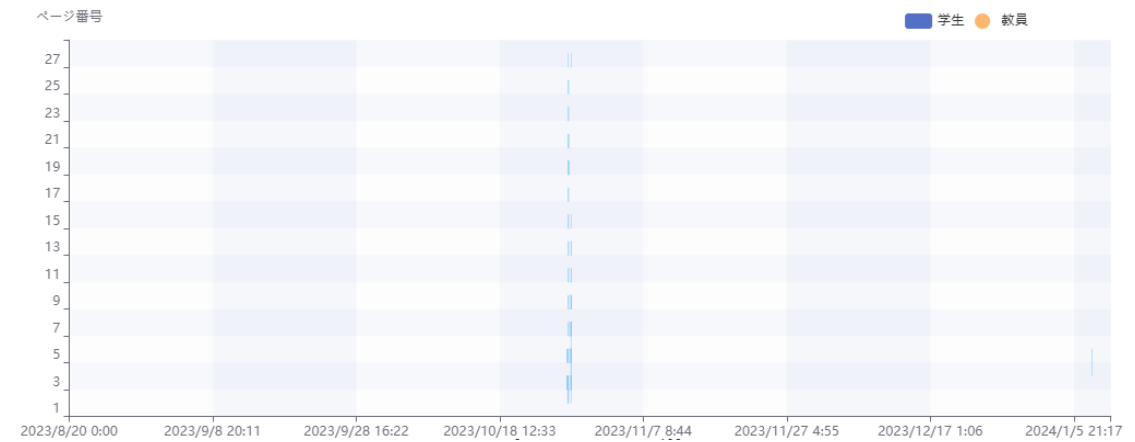


図 35 追従度分析



図 36 アノテーション分析

3) 教育版マイクラフト活用入門



図 37 追従度分析



図 38 アノテーション分析

4) 特別活動の ICT 利用に向けて

この講座の資料分析では、児童生徒用に用いることが可能な ICT を活用した係活動オリエンテーション資料を用いて分析をした。その結果、追従度分析では当日の参加者の追従が明確に観測され、その後冬休みの期間を用いて学習がされていることがわかった。教員が実際に学校で利活用可能な資料を作成することで、反復利用が高まると推察される。



図 39 追従度分析



図 40 アノテーション分析

5) 学級ファシリテーション-ICT の利活用へ

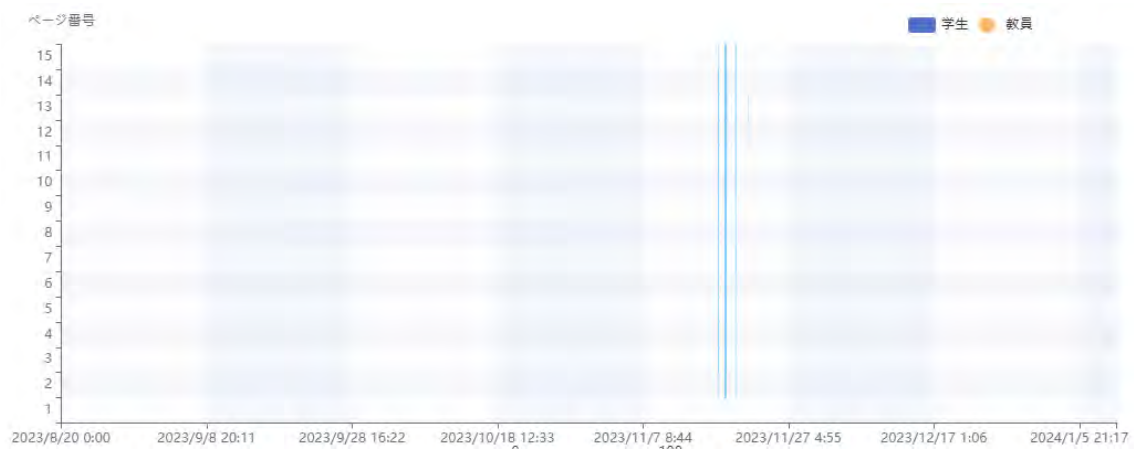


図 41 追従度分析



図 42 アノテーション分析

6) ICT を活用した体育科・保健体育科の授業づくり

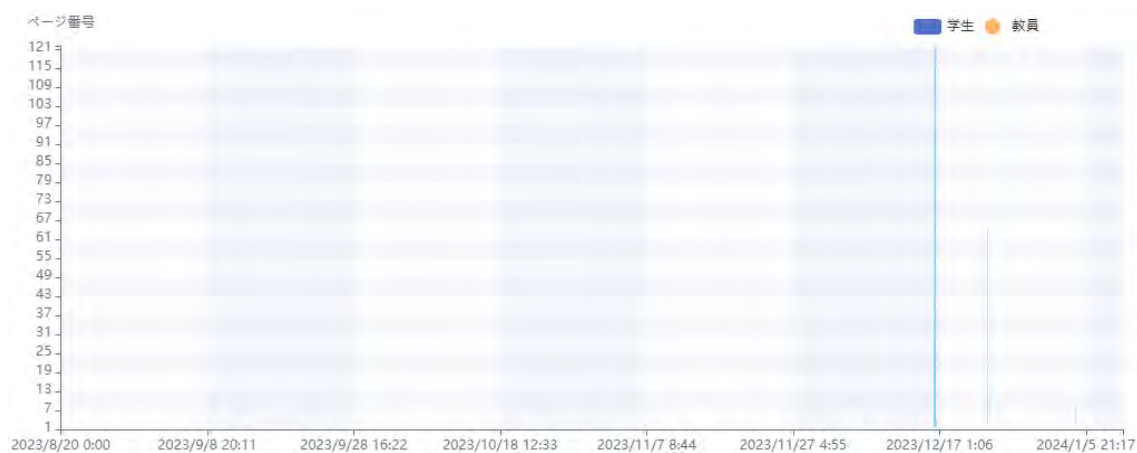


図 43 追従度分析



図 44 アノテーション分析

7) 絵本を活用した主権者教育の教材・授業づくりの視点と方法

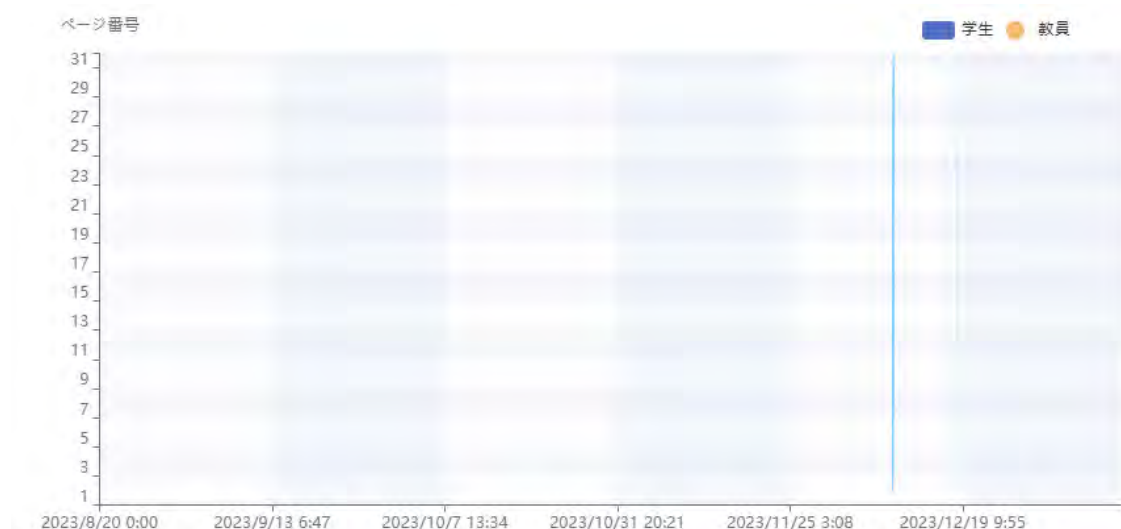


図 45 追従度分析

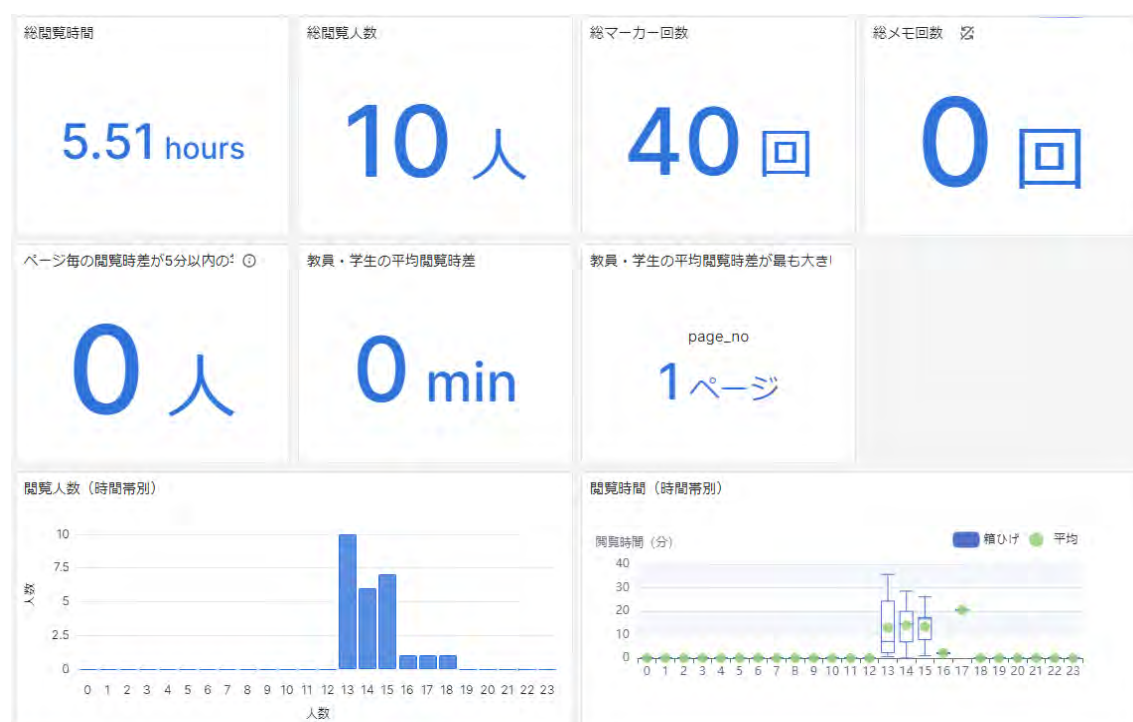


図 46 アノテーション分析

(3) 受講行動のアノテーション分析による研修評価と改善の可能性

本研修評価には、教員による評価（意識調査）と事後ヒアリング調査に加え、新しく独創的な視点として、愛媛県総合教育センターとともに、NTT EDX UniText の教材配信ソリューションを用いた受講行動分析を試行した。

この結果、遠隔教育や教材配信ソリューションを用いた複数回学習やマーカー利用などの行動を分析することで、研修にいかに関与しているかを判断することが可能であることがわかった。しかしながら、講師側も新たなシステムの導入により、この教材配信ソリューションの活用の仕方が異なっており、単純に、行動ログのアノテーション分析をもって、研修内容の評価を単純にすることはできない。ただし、いかなる研修目的や方法が、充実した利活用につながるかを明らかにすることはできる。

今回は、NTT EDX UniText を用いた研修の成果から、遠隔教育や教材配信ソリューションを充実させる方途について検討したい。

第一に、校内研修支援としての教材配信ソリューションの可能性である。これまでの分析から、「校内研修支援プログラム」では、当日のみならず、事後学習で利活用されている頻度が、「現代的課題プログラム」よりも多かった。教員の意識調査や事後インタビューにおいても、校内研修を担当する教員の負担や不安は大きいものであり、実際に体験した研修を、講師の動画を用いて実施したり、複数回学習したうえで校内研修に臨んだりすることで、その不安が低減されていることが明らかになった。そのため、対面研修を通じて遠隔で学びを深め、校内研修の指導者としての力量形成には、この方式が大きな可能性を持っていることが明らかとなった。しかしながら、単発研修の事後学習としては課題が見られており、教員の多忙な現状を含め、さらなる効果的な利用の在り方を検討することが必要である。

第二に、アノテーション分析から学習行動として研修の効果を検証することが可能である。例えば、アノテーション分析の総利用時間を受講人数で割った数値を算出すると、一人当たりがどの程度、配信ソリューションを活用して学習していたかがわかる。他にも、マーカーの使用数を受講人数で割った数値も利用可能である。このような方法により、研修への主体性を明らかにすることが可能である。

第三に、遠隔型研修を受けやすい時間や曜日などの算出が可能である。スキルや技能の向上を中心とする体験型の研修では、教材配信ソリューションの活用方法に工夫を凝らす必要がある。しかし、教員の多忙な現状においては、研修に参加する時間だけでも疲弊する声を聴く。そのため、遠隔型で参加しやすい日程や時間を想定し、配信したりすることで効率が高まることが予想される。

これまで、受講者の意識調査を中心に研修評価が実施されてきたが、今後、学習者の勤務態度、研修のログ解析などを統制変数として、受講後のアンケートを分析することなどで、研修の評価がより改善される可能性がある。ただし、現状では、その可能性の一端を示したに過ぎない。

そこで、校内研修支援プログラム「保護者のクレームが相談にかわる生徒指導体制の確立」の講義資料の学習ログを活用したアノテーション分析から、さらなる可能性を検討したい。本講座の研修担当者は、この事業以外でも NTT EDX UniText を用いて大学授業を行っており、その利活用経験が他の研修講師よりも多い。そのため、「追従度分析」や「アノテーション分析」から研修内容の評価の可能性が示しやすいため、この講座をより詳しく分析してみたい。

まず、ユニット1の追従度分析をしたものが下図である。教員の見ている頁番号に着目すると、講座の開設された日のデータでは、受講者（学生と表示されている）の追従度が高い。このことは、研修講師の示す頁と同じ頁を研修受講者がみていることを意味している。また、研修終了後も、受講者が振り返り学習で複数回、資料を参考に行っていることが図47には、示されている。



図 47 ユニット1資料追従度分析

また、下図のユニット1資料アノテーション分析では、総閲覧時間が、1.18日となっている。これを受講者72人で割ると、5分以上資料にアクセスした者では、平均23.6分、この資料を利用していることがわかる。また研修講師と受講者の閲覧時差が最も大きかった頁は、2頁目である。このことは、講師の話がスタートしてから、実際の資料の頁を送るまでに時間を要したことから、その時差が発生したといえる。このような時差の発生した頁には、講師の話から乖離した思考の時間が存在している可能性があり、研修の改善ポイントであるかもしれない。

ただし、講師の頁と受講者の頁の平均時差は、0.47分と1分以内にとどまっていることから、講師の話している頁への追従度が高い。また総マーカー数に着目すると、頁数に比べて1052回と多い。これらのことは、受講者が比較的主体的な学習を行いながら受講していたことを示しているだろう。



図 48 ユニット 1 資料アノテーション分析

この図で、さらに興味深いことは、左下の閲覧時間と人数である。8時から9時の研修で使用した時間の閲覧が最も多いが、次いで、13時台が多くなっている。このことは、教員が研修後すぐ振り返りに使ったり、昼休み等の時間を活用したりして研修資料にアクセスしていることが推察される。

次にユニット 2 資料について分析した結果が、下図である。まず追従度分析でもユニット 2 資料は、授業での追従度もよく、研修後も、定期的に振り返りで使用されていることがわかる。ふりかえりでもほぼ全体的な頁が参照されている。

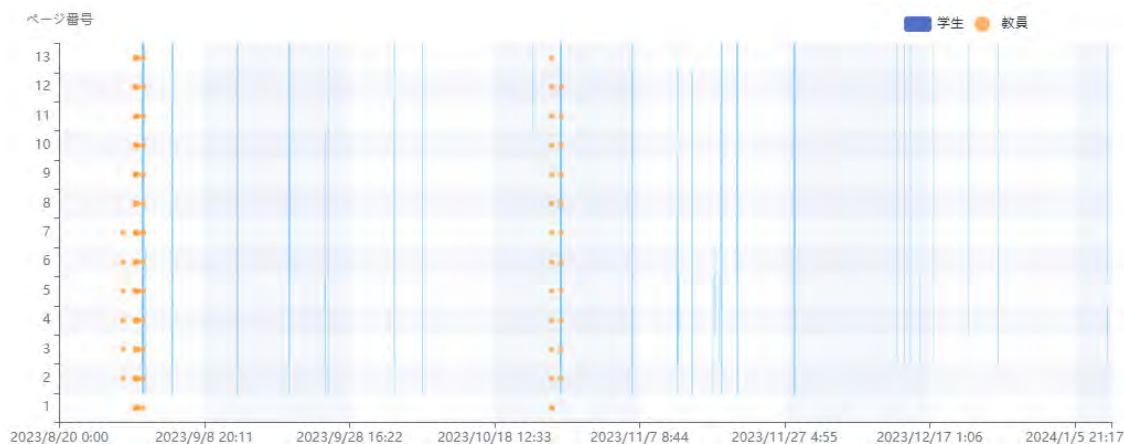


図 49 ユニット 2 資料追従度分析



図 50 ユニット2 資料アノテーション分析

このアノテーション分析において、ユニット2 資料は、1 に比べると総閲覧時間が少なく、マーカー使用料も少ないことがわかる。一方、時間に着目すると、研修時間以外では、13ー15 時の間の利用が多い。

次にユニット3 資料の分析をしたものが下図になる。この図でも、追従度は比較的高く、研修後も、一定の利用がなされている。しかしながら、ユニット1 資料に比べると、その量が減っていることがわかる。

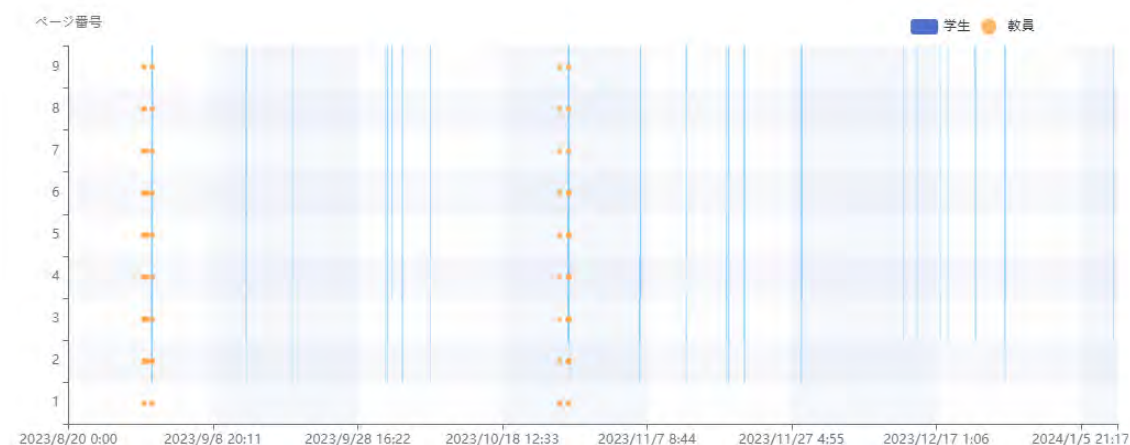


図 51 ユニット3 資料追従度分析



図 52 ユニット3 資料アノテーション分析

アノテーション分析でみると、閲覧誤差が0.6分とユニット1に比べて増加している。しかしながら、ユニット2資料に比べると、その誤差は少なく、総マーカー数も多い。

最後に、ユニット4 事実確認資料の分析結果が下図である。追従度分析でみると、新しい資料への移動に少し時間がかかっていることがわかる。一方、このシートは、ワーク用のシートであるものの、研修後も、複数回使用されていることが示されている。

特に太い縦線が出ている日にちにちに焦点をあてると、受講者が校内研修をする前後で利用されていることが推察される。

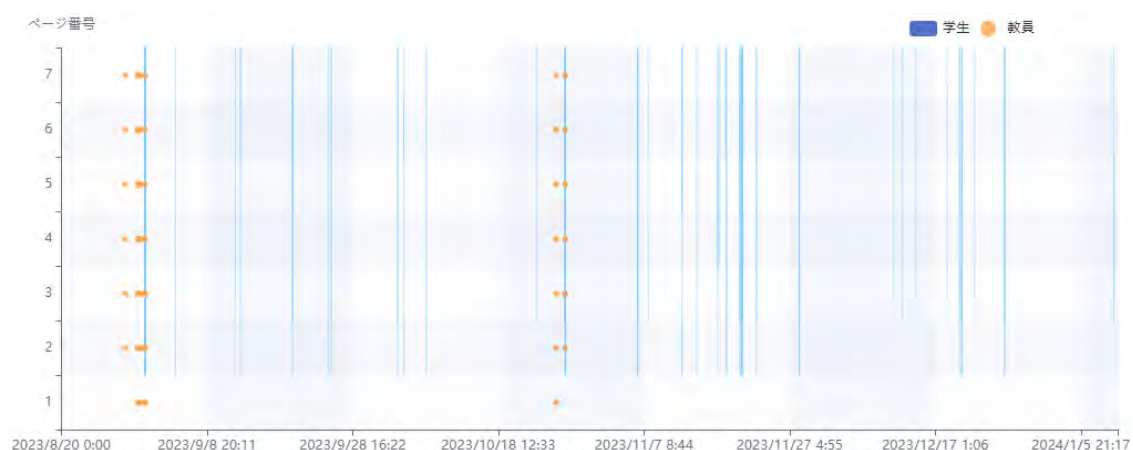


図 53 ユニット4 事実確認資料追従度分析

またアノテーション分析でみると、15-17時の利用が多く、放課後の校内研修の時間帯に活用されたことが推察される。



図 54 ユニット 4 事実確認資料アノテーション分析

このような分析から、ユニット資料 1 が最も活用されており、研修の集中度の高い時間帯の学習が、もっとも振り返りや研修後の学習につながっていると考えられる。特に追従度分析でみると、ユニット資料 1 とユニット資料 4 事実確認資料の研修時間外での利用が最も多く、これらが活用されている講座内容として評価することができる。このことは同時に、ユニット 2 資料やユニット 3 資料には、改善すべき内容が含まれているかもしれない。一方、本事業の追従度分析やアノテーション分析においては、ワークショップなどの体験型の研修は振り返り学習の対象になりにくい、という点も考慮すると、一定の研修時間外学習が行われていることが示されており、研修には一定の成果があったと考えられる。

(4) よく閲覧している人とそうではない人の比較

次に学習ログを分析する上で、「よく閲覧している人」と「そうでない人」の比較分析を行ってみた。まず、下図は、数字が閲覧したページ数を示し、矢印がページの遷移を示している。線の太さはページ間でのページ遷移数を示しており、濃いほど当該ページ間の遷移数が多いことを意味する。

上の図であれば、12→15、15→12、5→6、11→12、11→8、6→5、12→11、10→11 という順番でページ遷移が多いことを示している。

下の図では、5→3、8→6 のみで繰り返し閲覧があるが、それ以外では複数のページ遷移がないことを示している。

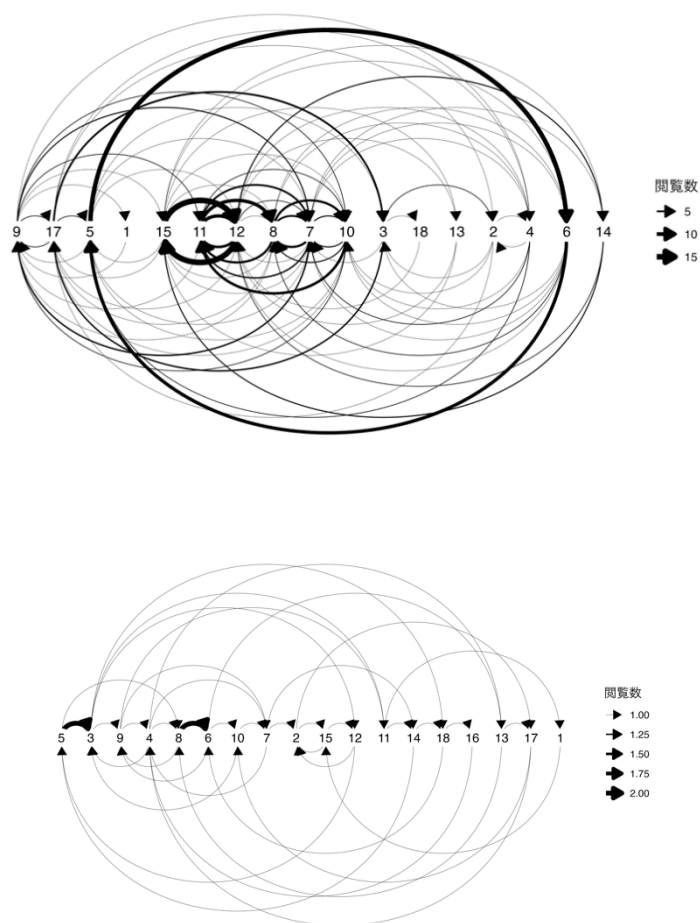


図 55 ある受講者のページ遷移の状況

※上記の二つのページ遷移図は、ページ閲覧が多い「生徒指導」講座における特徴的な受講者を抽出したもの。

上記のような繰り返し学習が研修での学習に結びついているかを検討したのが以下の図である。ページ閲覧が多い二つの講座のみをピックアップし、横軸の1～8は表の質問項目の平均値を示した。また、色の違いは繰り返し学習が多い人と少ない人を表し、集団の中で繰り返し学習が多い上位50%と下位50%で二群に分けた。

多くの受講者が3もしくは4を選択しており、はっきりとした違いを見ることは難しいが、研修資料に関する質問の7番は両講座に共通して、よく繰り返し学習をした受講者の方が資料を校内研修で活用できそうと捉えている。

ただし、研修受講者全体で、自己評価アンケートへの肯定的な回答の割合が高いことから、明確に大きな違いを指摘することは難しいが、今後の研修評価の一つの分析の可能性として、ここに示しておきたい。

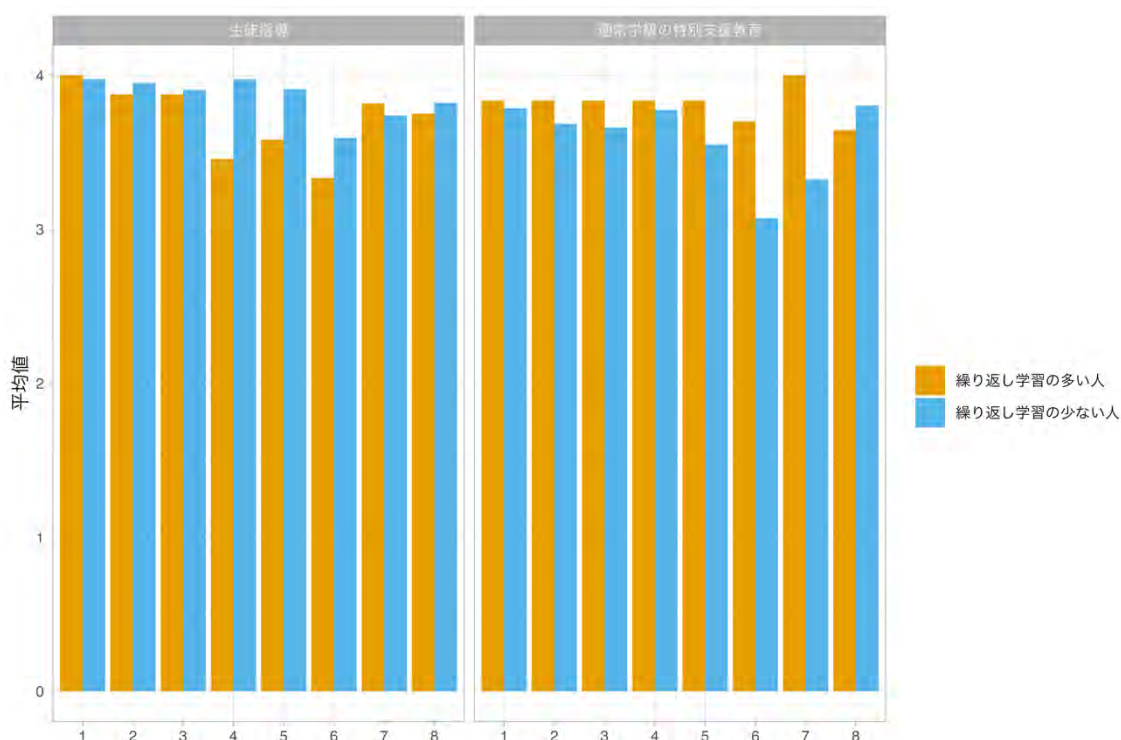


図 56 繰り返し学習の多い人と少ない人の自己評価平均値の比較

表 21 自己評価アンケートの質問項目と選択肢（表 11 と同じもの）

項目	質問項目 \ 得点	4	3	2	1
1	この研修はあなたにとって有意義でしたか。	4.大変有意義だった	3.有意義だった	2.あまり意義がなかった	1.全く意義がなかった
2	これまでの教育に対する本質的な見方・考え方（教育観、学習観、児童生徒観、授業観、研修観など）の捉え直しができましたか。	4.よくできた	3.できた	2.あまりできなかった	1.全くできなかった
3	これまでの自身の教育実践への省察や捉え直しができましたか。	4.よくできた	3.できた	2.あまりできなかった	1.全くできなかった
4	これからの自身の学びへの意欲が高まりましたか。	4.大変高まった	3.高まった	2.あまり高まらなかった	1.全く高まらなかった
5	所属校の発展・改善における自身の役割をとらえなおすことができましたか。	4.よくできた	3.できた	2.あまりできなかった	1.全くできなかった
6	所属校で校内研修を実施する意欲は高まりましたか。	4.大変高まった	3.高まった	2.あまり高まらなかった	1.全く高まらなかった
7	今回の資料や講義内容は校内研修に活用できそうですか。	4.とてもできそう	3.できそう	2.あまりできそうにない	1.全くできそうにない
8	研修で用いられた資料等は、適切でしたか。	4.とても適切	3.適切	2.あまり適切ではない	1.全く適切ではない

8 質的調査の分析

量的調査に加え、質的な調査（インタビューと検討会）によって本事業の成果を検討していく。

表 22 インタビュー、検討会での発言記録等による質的調査

NO	調査内容	対象者	調査方法
F	協力校校内研修実施後のインタビュー調査	校内研修担当者と研修受講者	1 対 1 のインタビュー（別紙資料 3）
G	プログラム検討会の発言記録	参加者	意見交換を行い、そのまとめを使用

（1）協力校校内研修実施後のインタビュー調査分析【調査 F】

①調査 F の概要

調査 F は、校内研修支援プログラムの成果を質的に検討するための調査である。校内研修支援プログラムは、各学校の校内での研修を実施することをサポートすることを目的とした研修である。校内での研修を担当する教員が、事前に愛媛大学での校内研修支援プログラムを受講し、それをもとに校内での研修を実施する。そうした校内研修支援プログラムは研修を担当した教員（以下講師教員と表記する）にどのような貢献ができたのか、また校内での研修にどのような効果をもたらしたのかを検討するため、講師教員と、研修を受講した教員（以下受講教員と表記する）にインタビューを行った。

インタビューの対象者は、講師教員 11 名、受講教員 29 名である。校内研修終了後、対象者とインタビュアー（非常勤講師）の 1 体 1 で、10 分から最大 1 時間程度、インタビューガイド（別紙資料 12）を用いた半構造的インタビューを行った。以下、インタビューでの言及を、内容や文脈を変換させることなく要約・抜粋しながら、校内研修支援プログラムの成果を検討していく。

②講師教員にもたらした貢献

1) 研修準備への負担軽減

講師教員にもたらした貢献としては、やはりまず、研修の準備についての負担軽減というものが挙げられるであろう。

- 「1 から研修を企画することは無理である。大学の先生の資料あってこそ研修ができて負担軽減になり、有り難かった。」
- 「資料の準備や講義内容の確認の負担がなくてよかった。1 から準備するとなると、どうしたらよいかわからない。」

- 「動画があることがとても助かった。編集も適切に行ってもらっていて、時間的に扱いやすかった。負担が少なく伝えたいことが直接伝わったので良かった。」
- 「学校側の裁量で時期も検討できるので、そういう意味の負担は減ると思う。外部講師を呼ぶ場合、日程調整を検討したり、謝礼を考えたりしないといけないなどの問題があるので…。今回のように、代表が研修を受けて、それを伝える方法もいいと思った。」

複数の教員から校内研修を1から準備することの困難性が言及されている。通常業務の多忙に加え、校内研修を企画し、担当者の事前学習、研修計画、資料作成など行うことは講師教員に大きな負担となるであろう。愛媛大学の校内研修支援プログラムでは、校内で実施したい研修テーマにそって受講し理解を深め、プログラムでの資料やワークシート、大学教員の講義動画もそのまま校内研修に活用できる。そのことが講師教員の研修準備への負担軽減につながっていることが伺える。また研修実施において外部講師を招聘する場合の負担についても、講義動画を活用することによって解消されることが伺える。

2) 学習の促進

講師教員にもたらした貢献の二つ目は、学習の促進が挙げられるであろう。以下の言及があった。

- 「校内研修を実施することがとても重圧であった。愛媛大学での校内研修プログラムに参加し、その後、EDX UniTextに掲載されている講義動画を繰り返し視聴することで理解が深まり校内研修につながることができた。」
- 「大学の先生の動画も何度も見せて頂いて、自分自身も勉強になった。」
- 「成長になっている。校外の教職員とも多く知り合え、管理職の先生の考えも聞かせていただき、とても有意義だった。」
- 「校内研修プログラムに参加し、自身が行う校内研修に対していいヒントをもらった。」
- 「準備物が多岐にわたる講義で、受講していて面白かった。自身が校内で行う際に受講教員に興味を待ってもらえるよう手法を工夫した。」

資料やワークシート、大学教員の講義動画は校内研修でも使用できるが、もちろん講師教員の見返しや復習にも活用できる。講義動画の繰り返し視聴により理解をさらに深め、校内研修の実施につながっている。また、校内研修支援プログラムに参加することによって、校外の教職員とも知り合え自身の成長につながっている。また、大学での校内研修支援プログラムの内容や方法をそのまま行うのではなく、ヒントとして参考にしつつ、自身が行う校内研修ではどのように行えばよりよいかという検討を生んでいる。さらに、「研修担当者は大きな負担を感じていて、校長としても不安を感じていた。しかし、素晴らし

いプログラムを準備していただき本人のスキルアップにつながった」という校内研修に参加していた管理職からの言及もあり、これらは、校内研修支援プログラムが講師教員の学習と成長を促していることを示すものであろう。

③校内研修にもたらした効果

1) 研修内容の時宜性

校内研修にもたらした効果として、各校の状況や課題に即したタイムリーな内容の研修が校内で実施できたことが挙げられる。

- 「事案が本校の実態に合っていて大変よかった。学校の実情と合っていた内容だった。」
- 「同僚が行ったので、学校の実態に合わせた話をしてくださったのでよかった。」
- 「同僚が講師をすることによって、より学校の実態を踏まえての研修になった。今回の研修はよかった。」
- 「普段の研修と違って、本校の実態に即したタイムリーな問題として、受講教員みんなが聴いていた雰囲気だったのでよかった。私にとっても個別の事案でこうしたらい、ああしたらいということだけでなく、全体の流れを共有できる、納得のいく適切なタイムリーな研修だったと思っている。」

校内研修支援プログラムでは、研修テーマを選択して受講できるが、そのことが校内でのニーズに即した研修の実施につながっていることがわかる。より各校の状況や課題という個別性に即した内容にするには、やはり各校の講師教員によるカスタマイズは重要である。その学校の実情に合わせる教材を提供できたことは大きな成果であると考えられる。

2) 学習意欲・満足度の向上

研修内容がタイムリーであることだけでなく、同僚が校内研修を行うことが、受講教員の意欲や満足度の向上にもつながっていることが伺われる。

- 「普段一緒に働いている先生が講師なので、研修に気持ちが入りやすかった。」
 - 「自分事として考えることができた。同僚の先生からの言葉だったので、より理解が深まった。しっかりやらねばという気持ちも高まってきた。」
 - 「非常に理解が深まった。今までの研修と比べても同僚が行うので聴きやすいこともあり、本校の実情も分かっている先生なので、カスタマイズされていて大変理解が深まっている。」
 - 「研修担当者が動画を視聴しながら補足や支援をしてくれ、理解が深まった。」
- また、大学の教員の講義動画を視聴できることも受講教員の意欲や満足度の向上にもつ

ながっていることが伺える。

- 「満足度は高い。その理由は、愛媛大学の先生が講義することで、興味もって聴いて
いただいた。教職員の反応はすごくよかった。」
- 「大学の先生は一つのテーマに情熱をささげて研究されているので、新鮮な気持ちで
受け入れることができ、理解が深まった。」
- 「大学の先生の生の声を聞くことができ、ありがたかった。」
- 「専門的な知識を持たれている大学の先生の話と幅広く教育活動をしている同僚の
思いをバランスよくミックスした研修になり、理解が深まった。」

専門性をもつ大学教員の講義動画を校内研修に活用できることに対しての満足度は高いことがわかる。

3) 研修方法の妥当性

講義動画も活用しながら、校内で対面での対話を含む研修を行うことについて、肯定的な言及が多くあった。

- 「校内の同僚と一緒に研修できたので効果的だった。」
- 「大学の先生の話聞きながら複数で交流しながら研修するのはとても良い。脳が活
性化するスタイルだと思う。」
- 「すごくよかった。動画の流しっぱなしではなく、意図的にペアの活動を入れること
で効果が高まった。」
- 「グルーピングが工夫されていて、グループ協議で意見が出しやすかった。」
- 「講師を招聘して行う研修はライブ感が高まる。しかし今回の研修のように動画を何
度も確認したり、止めたりすることでより理解度が高まった。」
- 「コロナ禍でオンラインによる講話の経験は増えたが、本研修のような体験は少な
い。とてもよかった。」
- 「動画やタブレットの取扱で研修担当者に加え、長けた人が補助に入ることでスム
ーズに研修が進み、十分に理解できた。」

「大学の先生の話聞きながら複数で交流しながら研修するのはとても良い。脳が活性化する」というように研修方法が妥当であり効果が増しているという言及があった。一方的なオンライン配信ではなく、講義動画も取り入れながらグループでの対話などを行うことでより効果が増すことが示されていると考える。また、校内で行うため、ICTの活用が未だ不慣れた教員についても教員間でのサポートが行え、校内全体の研修効果の向上につながるであろう。

4) 同僚性の向上

校内研修が校内の同僚性の向上にも効果をもたらしていることが伺える言及が多くあった。

- 「研修を通して自校の教職員の考えを知るきっかけとなった。」
- 「立場が違えば、伝えることも違うと思った。学校の課題をまとめるときには難しかった。計画性を持たないと時間短縮にもつながらないので、それを意識して行うことが大切だと思う。校内をよりよくしていくことにつながっていると思う。」
- 「若い先生を中心に対応の方法を確認できたことが大きい。ベテランの先生でも気をつけなければならないことを確認できてよかったと思う。改めて研修で理解でき共有できたのでよかったと思う。」
- 「若い教員だけでなく、年配の教員もよく分かっていない場合もあるので、若さに限らず、全員に共通理解が図れたという点でよかったと思う。学校としての対応の仕方が統一感を持ってこれからやっていけるという感じを受けた。」
- 「学年で声かけ合ったりしながら、この研修の結果を生かしたい。」
- 「学校全体を見る立場として、これからの教育現場に寄与していこうと再確認した。」

すでに校内研修にもたらした効果として研修内容の時宜性や、研修方法の妥当性による研修効果の向上を挙げてきたが、校内での対話を含む研修は、相互理解や共通認識を生み、「校内で声をかけ合いたい」や、「現場に寄与していきたい」というともに働く者としての同僚性も向上させていることが伺える。

④まとめと今後に向けて

以上見てきたように、今回取り組んできた校内研修支援プログラムは、講師教員に、研修準備への負担軽減、学習の促進という貢献をもたらし、校内研修に、研修内容の時宜性、学習意欲・満足度の向上、研修方法の妥当性、同僚性の向上をもたらしていることがわかる。

講師教員の負担や不安、個々の研修で学校や教員の実情やニーズにあわせた調整の困難、オンラインの一方通行の配信研修となりがちなことなどを克服しようと、校内研修支援プログラムを企画し取り組んできたが、そのねらいを十分達成していることが伺える。「ワークシートなど印刷ができればよかった」、「校内研修時のネット環境の不備でうまく動画視聴ができない場面があった」など課題もあったが、大きな成果をあげているといえるだろう。講師教員や受講教員から今後に向けて以下のような言及があった。

- 「今後も継続してもらいたい。次年度も実施されるようなら、ぜひ参加したい。」
- 「今回のような研修の機会が少ないのでいい。新しいことがたくさんあるので、補い

ながら研修をしていくことが必要だと思う。このようなプログラムは有り難い。」

- 「忙しすぎて、時間を確保しての研修はできていないのが実態である。今回のような研修は年に数回やってもいいと思う」
- 「今回の内容であれば所属職員を派遣しやすい。ぜひ継続させてほしい。」
- 「今回のようなプログラムがあれば、効果的である。複数の教員も受講したい希望は出ていたので、今後、さらに受講するであろうと思う。」
- 「継続すると思う。様々な立場の者が研修を受けて、学校に持ち帰り研修をしていけばいいと思った。教員も次の研修への見通しが持てると思う。」

今後も、今回の成果をもとに、校内研修支援を充実させ教員研修の高度化に貢献していきたい。

(2) プログラム検討会での発言の分析【調査 G】

①調査 G の概要

調査 G は、プログラム検討会での発言記録の分析である。プログラム検討会の参加者は、本プログラムに 2 回以上参加した教員、積極的に参加された管理職（事業担当者の依頼）計 10 名である。

プログラム検討会は、校内研修支援プログラムと、現代的課題対応実践力高度化研修プログラムの両プログラムの成果と課題について検討する会である。令和 5 年 12 月 27 日に 2 時間程度愛媛大学で実施した。事業担当者の示したテーマ（研修内容と方法、他の教員との研修内容の共有、現場のニーズに応じた研修、研修日程、研修のメリット）にそって、ポストイットに記入後、グループでの共有、全体での共有を行なった。以下各テーマについての発言を内容や文脈を変換させることなく要約・抜粋しながら、プログラムの成果や課題を検討していく。

②プログラム検討会での発言の分析

1) 研修内容や方法について

研修内容について以下のような発言があった。

- 最新の研修内容が受講できた。
- 大学の先生の専門的な識見や知見を教えていただける貴重な場であった。
- 大学の先生から学ぶことが刺激になった。
- 経験知を頼りに実践しているので、本研修で理論の裏付けが得られた。
- 若い先生を中心に基本的な内容を確認できた。ベテランの先生においても気を付けなければならないことを再確認できた。
- 普段の研修では得られない新たな知見・違った切り口からの自己研鑽ができた。

- 今後の教師としての在り方をじっくりと探究することができた。
- 演習や協議等が多く、教育観・研修観を広げることができた。
- 実際に学んだ研修を実践している先生と情報交換をすることができ、事後研修が深まった。
- 異校種の先生と話し合う機会が得られた。
- 休日の研修であっても大学関係者の方々がサポートや準備をしてくださることがありがたい。

最新のテーマ、大学教員の専門的知識、演習や協議を取り入れた研修に参加することが、新たな知見や研修観の拡大や異校種の教員情報交換など自己研鑽になるよい機会となったことが伺える。また、休日研修への大学からのサポートも評価されている。

2) 他の教員との研修内容の共有について

他の教員との研修内容の共有については以下の発言があった。

- 校内研修を行うと一人の研修で学んだことが各校の学校全体で研修したことになる。
- 生ライブのように研修した様子を学校全体に広めることができる。
- 学んだことを自校の教職員に伝える際に、「後で net 上に載るのでそれを見てね」と言いやすい。伝えやすい。
- 校内研修をするとき、自己研修が深まる。
- 学校全体で指導の足並みをそろえていくことができたので業務改善にもつながると思われる。
- 同僚の考えが分かったので、実際の指導場面で学校、学年体制で指導できる。

研修担当者が愛媛大学での校内研修支援プログラムを受講し、校内研修を行うことで、負担が少なく学校全体に共有でき、研修担当者の学習も促進するというように、校内研修支援プログラムでねらいとしていることが達成されていることが伺われる。一方で、現代的課題対応実践力高度化研修プログラムは校内研修を行うために受講するものでなく個人で受講するものであるため、そこでの学びを「限られた時間の中で校内の先生方にどのように共有していくかが課題である」、「伝達・研修の時間が取れない（学校内の問題ではあるが）」という課題も見えてとれる。過度な負担なく、効果的に組織での共有を促す方法を今後も検討していく必要がある。

3) 現場のニーズに応じた研修について

- 自校に必要なことをわかりやすく伝えることができた。
- 研修の内容はすぐに実践できるものである。
- 学校の都合の良いタイミングで研修を実施することができる。実際に学校で起こって

いる事案と大変よく似ていたため、すぐに参考にすることができた。

といったように、学校現場のニーズにそった研修を提供できていることが伺える。一方で、「学校が研修したいと思うテーマがあるかどうか」、「参加者を募っても研修に行く先生が少ない」といった発言もあった。より学校現場のニーズや各教員の興味関心に即した研修テーマを準備していきたい。

4) 研修の日程について

研修の日程については、学校現場の多忙さのためか多くの意見があった。

- 年間計画があると、年度初めに計画を立てやすい。
- 平日開催に参加者が限定されてしまうため日程の再考が必要である。
- 愛媛大学での研修が1学期にあると、夏休み等を利用して広めやすい。夏休みの研修職員会で校内研修をしたい。
- 2～3時間の研修内容をすべて広めることは難しい。全体を15分程度毎にユニット化し、ミニ研修としてシリーズ化してはどうか。

といったように、一学期を基本とした年間計画の提示や土日開催、校内で活用しやすい時間配分などの要望があった。また、「参集型だけでなくオンラインでも行ってはどうか」、「教育課程の研修のように期間を決めて配信してもらえると、研修しやすいのではないか」といったようにオンラインでの実施の要望もあった。

5) 研修のメリットについて

最後に研修のメリットについての発言には以下のようなものがあった。

- 本研修で学んだことを校内の研修に活用すれば、校内研修の準備や時間的負担を軽減できる。
- 校内研修で講師をお招きするのは財政面で限界があるが、動画配信で講話を聴くことができた。
- 専門的な研修を教員が講師となって行うことができた。
- 自分が講師となつて伝達研修することで受講内容の理解が深まった。
- 研修受講者は講習を受けることにより研修内容をインプット後、アウトプットする機会に恵まれるので、研修内容を定着させるためによかった。
- 研修内容のオンデマンド化で研修後に見返すことができ、ありがたかった。
- デジタル資料の配布や無線LANなどのサポートが充実している。
- 研修会のプレゼン資料はプリント配布が多いが、デジタルでの資料を校内研修に活用できた。

校内研修での負担軽減や、校内研修担当者や受講者の学びや共有が促されることのメリットが改めて示されている。また、ICT 活用の促進などでも本プログラムが貢献できていることが伺われる。

③まとめと今後に向けて

以上見てきた通り、プログラム検討会の発言を分析することによって、研修に参加することで、新たな知見や研修観の拡大や異校種の教員情報交換など自己研鑽になるよい機会となったこと、講師教員が愛媛大学での校内研修支援プログラムを受講し、校内研修を行うことで、負担が少なく学校全体に共有でき、講師教員の学習も促進すること、学校現場のニーズにそった研修を提供できていること、ICT 活用の促進などで本プログラムが貢献できていることが明らかとなった。

また、一学期を基本とした年間計画の提示や土日開催、校内で活用しやすい時間配分、オンラインでの実施といった改善点や、より学校現場のニーズや各教員の興味関心に即した研修テーマの設定、過度な負担なく効果的に組織での共有を促す方法といった今後の課題についても浮かび上がらせることができた。今後も改善と検討を続け、よりよいプログラムを提供していきたい。

全体考察・まとめ

本事業の目的に従い、三点について考察する。

第1 校内研修支援プログラム（対面研修及びデジタル配信）の開発

今回、本プログラムでは、現在の学校現場に必要なだと考える知識や技能の修得をめざして8講座に厳選した。そして、8月、10・11月の2期にわたり、延べ14回の大学研修を実施し全講義でEDX UniTextによる教材配信を行った。また、講義後に受講者が学び直しをしたり、容易に校内研修を行ったりすることが容易になるよう、分割講義動画の配信も行った。この結果、対面講座に339名、オンデマンド講座に191名合計530名と予想を大幅に上回る参加を得た。その後、その内の44名が勤務校や教育委員会、校長会、教育団体の教科等委員会の44か所で研修講師として校内研修を実施した。この結果、1,251名がEDX UniTextを活用した校内研修に参加した。

成果を検証するために、大学研修受講後の自己評価アンケート、校内研修受講後の自己評価アンケート、校内研修協力校でのインタビュー等による調査結果を分析し、次の成果と課題を得た。まず、「校内研修支援プログラム」で提供した各講座の受講者の多くは、この研修を受けることが有意義だと感じ、これを通して自己を振り返り、捉え直しができ、自分自身の学び直しへの意欲が高まっていた。また、校内研修の講師を担当した教員は、EDX UniTextで配信した資料が適切で活用できると感じたことで、校内研修講師の実施意欲につながった。さらに、大学研修の質を校内研修においてもある程度維持でき、学校で受講した教員の多くが、研修を有意義と感じ、これにより自己を振り返り、意欲的になる等、教員の学びの姿に良い影響をもたらしたものとみられた。また、所属校における自己の役割を自覚し、他へ貢献する意欲が高まった教員も多くいた。なお、校内研修受講者に行った「仕事の関する調査（エンゲージメント尺度3項目）」からは、校内研修講師を務めた教員と受講生の教員の間に大きな差異はみられなかった。

これらのことから、「校内研修支援プログラム」の各講座の資料、講義内容ともに質が保障され、高度化された校内研修を行うためにEDX UniTextの活用が極めて有効であった結論づけることができる。一方、教材・教具、またはワークシートが必要とされる演習については、講師の力量や現物が準備できない等の課題があり、今後さらに質を高めるためのプログラムの精選が必要である。今後の課題は、学校現場のニーズに応え、課題解決につながる研修講座づくり、EDX UniText等配信ソリューションの強みを生かす教材づくりを行うことである。

第2 現代的課題対応実践力高度化研修プログラム（対面研修及びデジタル配信）の開発

本プログラムは、教科横断型言語能力の育成をねらいとする「概念型探究による授業づくり」と、デジタル教育人材開発をねらいとした講座で構成した。そして、全12講座延

べ 20 回実施し、全講義で EDX UniText による教材配信を行った。また、講義後に学び直しができるように、講義動画の配信も行うこととした。この結果、定員 340 名に対して、予想を超える 375 名の参加を得た。

成果を検証するために、受講後の自己評価アンケートの調査結果を分析し、次の成果と課題を得た。まず、本プログラムのねらいは、現代的課題の高度化であることから「新しい知見」を重視した。受講後の調査では、受講者は「新しい知見」を得たと感じ、それを有意義な学びであったと感じていることから、本プログラムの各講座は現代的課題を解決するために一定の成果があったと判断できる。また、受講後の「学びに対する意欲」にもつながったと考えられ、本プログラムのねらいをおおむね達成できたと考えている。一方、このプログラムの受講により、受講者によっては所属校での役割の捉え直しには至っていないとみられたが、本プログラムにそれを求めるかという本質的な課題もある。また、受講後の自己評価アンケートからは、講座固有の傾向があり、課題も様々であると思われる。

今後の課題は、まず「現代的課題対応」と「実践力高度化」の意味を検討し、内容の検討が必要である。また、ねらいを明らかにした上で、各講座を作成、または再構成することである。そして、各教科・領域等全般にわたる講座を作り上げるよう、本プログラムの完成に向けて取り組む必要がある。

第 3 研修評価分析による汎化モデルの検討

これまで授業や研修を評価する場合、受講者が短時間で評価票の選択肢に回答し、そのデータを分析し全体的傾向を見出す量的調査が行われて成果をあげてきた。本事業でも、これを事業評価の中核に据え、一定の結論を見出すことができた。

今回使用した自己評価アンケートは、愛媛大学と愛媛県総合教育センター、松山市教育研修センターの三者が教員免許更新講習、現職教育の各種研修等の振り返りでそれぞれが使用していたものを持ち寄り検討し、最終的に事業担当者の話合いで作成し、妥当性を担保した。

ただ、量的調査では全体的傾向は把握できるものの、深堀したい内容について十分に知ることができないことがある。また、項目の内容をきちんと評価せずに全体の印象で選択肢が選らばれたり、一つの項目の評価が他の項目の評価に影響したりすることが起こり、信頼性が低下することもありうる。

そのため、今回も実施したが、インタビュー等の発言記録や記述を基に分析する質的調査が有効になる。今回のインタビューでは、効率的で安定的な聞き取りを実施するため、事業担当者が聞き取り調査を前に、インタビューガイドを作成し、対面での調査を行った。これを事業担当者が分析するという流れで調査研究を実施した。

今回、評価で新たに導入したものが EDX UniText のような配信ソリューションの学習ログを活用した行動分析が、今後の研修評価の可能性を持っていると考えている。先行研究を行っている広島市立大学の教員によると、この研究はまだまだ課題があるものの、学生が EDX UniText 上で引いたアンダーラインやページ送りの記録を分析することで、教員の

意図する講義になっているかどうか判明をする等の事業評価が既に行われている。

本事業では、校内研修支援プログラムの受講者が、受講後、家庭や職場でどれくらい振り返り学習を行っているか、これまで見えてこなかった学び直しの実態が明らかになった。今後、このシステムを使用すれば、曜日や時間帯、学習回数、費やした時間などを検討することができた。今後は、アンダーライン等の記録を分析することにより、教材における自己のねらいと学習者の学習行動を比較し、学習者の学びを称揚したり、修正したりすることもでき、可能性は大きい。

以上の分析を踏まえて、研修プログラムの汎化可能性の検討については、校内研修支援プログラムを、愛媛県総合教育センターの研修に提供することで、一定の成果を得ることができた。

今後も、愛媛大学、愛媛県教育委員会、松山市教育委員会が一丸となり、また、愛媛県総合教育センター、松山市教育研修センターと協働して、愛媛県の教員の資質向上に、ひいては、児童生徒の生きる力を育成するために、今後も研究を継続し、両プログラム、並びに研修評価分析汎化モデルの完成に向けて取り組んでいく所存である。

おわりに

本事業のまとめとして、研修で想定していた成果の総括を行い、謝辞を述べたい。

まず本事業では、三つの成果目標を計画していた。第一が、校内研修支援プログラム(8講座)と現代的課題対応実践力高度化研修プログラム(3テーマ計 20 講座)を対面研修及び教材配信ソリューション研修プログラムとして、開発・実施することである。第二は、校内研修支援プログラムと現代的課題対応実践力高度化研修受講者延数、総計 500 人以上を目標とし、かつ校内研修支援プログラムの受講者は、校内研修を実施することが期待され、校内研修受講者数(500 人)を含めて、計 1,000 人を目標としていた。第三は、研修プログラムの成果や課題を分析し、プログラムの汎化モデルを検討することである。

第一の研修プログラム開発については、校内研修プログラムが 8 科目(14 講座)、現代的課題研修プログラムが 12 科目(22 講座)を実施し、プログラム 20 科目 36 講座の開設を実施した。第二は、校内研修支援プログラムの研修参加者が 530 名、現代的課題研修プログラムが 375 名と、総計 500 人以上という目標数値を達成した。加えて、校内研修支援プログラムの研修参加者が、学校に戻り実施した校内研修の参加者の総計については、実施学校数 44 校、研修参加者人数 1251 人と、目標としていた 500 人の数値をはるかに超える参加者をいただいた。

このように研修プログラム開発と実施に関しては、計画を超える成果を達成することができたと判断される。特に第三の成果や課題に関する研修プログラム評価から、さらに細やかにみていくと、次の 3 点が成果と課題となっている。第一に、校内研修支援プログラムの内容及び教材配信ソリューション(NTT EDX Unitext)を活用した利活用の方法が高く評価されていることである。研修受講者が自ら指導者となり校内研修を推進することで、アノテーション分析にあるように複数回受講による研修の学びを深化拡充し、学校の実態にあわせて調整した校内研修を行うことで、受講者の関心や学びを高めることにつながっている可能性が示唆されている。なお、この成果を受けて、本校内研修支援プログラムは、愛媛県総合教育センターでの研修に採用されることとなった。第二に、教材配信ソリューションにおける利用ログ(タグ)をアノテーション分析することにより、研修評価を受講行動によって分析することが可能になることである。特に、校内研修支援プログラムの有効性が明らかになった。第三に、現代的課題研修プログラムでは、複数日の利用が少なかったことから、体験的な研修や ICT 等の喫緊のスキルアップを図る研修の場合、教材配信ソリューションの活用の活用には課題があることである。一方、教材配信ソリューションの経験のある講師とそうでない講師の間には、利用の仕方や成果が異なることも観測されたため、研修システムの利便性と活用の方法を講師側が熟知する場合とそうでない場合で、利用の仕方や成果に影響を与えている可能性もある。また、対面での利用の追従度等をより詳しく分析することで、その成果もさらに検討することが可能となることも想定されるが、この点が、今回の分析の限界であり、課題となった。

謝辞

最後になりますが、本事業を実施するにあたり、愛媛県教育委員会・愛媛県総合教育センター及び松山市教育委員会・松山市教員研修センターの皆様には、多大なご指導ご支援をいただきますとともに最後まで協働して本事業を共に作り上げてくださったことに心より感謝申し上げます。

また、協力校の選定、市町の研修会としての実施や参加者への呼びかけ等、親身なご対応ご尽力いただきました東温市教育委員会、伊予市教育委員会、松前町教育委員会、砥部町教育委員会、久万高原町教育委員会の皆様には心よりお礼申し上げます。

多忙化する学校現場の実情にも関わらず、ご参加いただいた学校の校長先生及び教職員の皆様には心より感謝いたします。特に、校内研修をお引き受けいただきました協力校の校長先生及び研修講師の先生には深く感謝いたします。

加えて、本学を中心とする研修講師の先生には、研修の高度化プログラムに尽力いただき、学校現場を支える心添えをいただきながら、本事業が実施できましたことに、深くお礼申し上げます。

今後とも、愛媛大学教職総合センターは教員研修の高度化に取り組んでいくことで、多忙化し、複雑化する教員の教職生活を今後も支援し続ける愛媛大学として、責務を果たしていく所存です。

愛媛大学教職総合センター長 白松 賢

【別紙資料】

【資料 1】「校内研修支援プログラム（8 月開講分）」周知用チラシ

令和 5 年 7 月 13 日

愛媛県総合教育センター所長 様
松山市教員研修センター所長 様
愛媛県私立高等学校長 様
愛媛県私立中等教育学校長 様

国立大学法人愛媛大学
教職総合センター長
教育学部・教職大学院教授 白松 賢

国立大学法人愛媛大学「教材配信ソリューションを活用した校内研修支援・教員
研修の高度化プログラム開発（以下、「研修支援・研修高度化開発事業」という）」
事業への協力依頼について

梅雨の候、気職におかれましてはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、本学では文部科学省「令和 4 年度 教員研修高度化支援・教員研修の高度化に資するモデル開発事業」の委託を受け、本事業を立ち上げました。そして、これを愛媛県教育委員会と協働して、教員研修の合理化・効率化に資する研修の高度化を推進するために、これに関する協定を取り交わしたところです。これにより、本事業を通して、教職員の資質向上に向けた取組やよりよい校内研修の在り方等について等、研修観の転換・定着を図ることを目的としています。

つきましては、管下の学校並びに教職員の皆様に対して、本事業への研修支援・高度化研修プログラムの実施について、特段のご配慮を賜り、別紙について、周知・積極的な参加促進を行っていただきたく存じます。何卒よろしくお願い申し上げます。

記

- 1 本事業「研修支援・研修高度化開発事業」の内容
事業名「教材配信ソリューションを活用した校内研修支援・教員研修の高度化プログラム開発」
 - ① 校内研修担当者を対象とした研修支援プログラム開発（対面研修及びデジタル配信）
 - ② 現代的課題対応実践力高度化研修プログラム開発（対面研修及びデジタル配信）
 - ③ 研修評価分析（教員評価分析、データ解析型研修利用分析等）による汎化モデルの検討
- 2 本事業の成果目標
 - ① 校内研修支援プログラム（8 講座）と現代的課題対応実践力高度化研修プログラム（3 テーマ計 20 講座）を開発する。
 - ② 校内研修支援プログラム（愛媛県内対象）と現代的課題対応実践力高度化研修（松山市対象）について、より多くの教職員に受講していただく（別添参照）。
 - ③ 研修プログラムの成果や課題について分析を行い、研修プログラムの汎化モデルを構築する。※ 貴職におかれましては、成果目標②の達成について、ご協力をお願いいたします。

【愛媛大学】校内研修支援プログラム（8月開講分）のお知らせ

～教員研修の高度化に資するモデル開発事業（文部科学省委託事業）～

愛媛大学は、文部科学省より令和5年度「教員研修の高度化に資するモデル開発事業」の委託を受けて「校内研修支援プログラム」と位置づけた以下の研修を開設します。

これらの講座は、受講生の学習状況、及び、研修内容等を分析し、今後の校内研修の支援や教員研修の高度化に繋げることを目的としております。

また、研修内容においては、過去の教員免許状更新講習や教育委員会との連携セミナー等から、教員の皆様からニーズの高かった研修を基盤とした内容を選定しております。

教員の皆様におかれましては、この機会に是非受講いただき、ご自身の教員スキルの向上に活用いただくとともに本事業にご協力いただきますようお願いいたします。

※講座は全て受講料無料です。

※当日はスマートフォン、ノートPC、タブレット端末などを持参ください。

※会場は愛媛大学教育学部を予定しています。駐車場はありませんので、自家用車での参加はご遠慮ください。

詳細については申込後に通知いたします。

No	講座名	講師名	開講日	校種	職種・教科等
①	教職と省察－教師生活をふりかえり、これからを考える－	高橋 平徳	8月21日（月） 9:00～12:00（予定）	小・中・高・ 中等・特支	教職員
②	主体的な学びを促進する「総合的な探究の時間」校内研修	向 平和	8月23日（水） 9:00～12:00（予定）	小・中・高・ 中等	全教科
③	「教員が話す英語」と「子ども（児童）が話す英語」を磨く＆鍛えるための研修	池野 修	8月24日（木） 9:00～12:00（予定）	小（中）	教職員
④	通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修	苅田 知則	8月29日（火） 9:00～12:00（予定）	小・中・高・ 中等・特支	教職員
⑤	信頼とウェルビーイングを高める業務改善研修	露口 健司	8月30日（水） 13:00～16:00（予定）	小・中・高・ 中等・特支	教職員（学校管理職、教務主任、研修主任等）
⑥	保護者のクレームが相談にかわる生徒指導体制の確立	白松 賢	8月31日（水） 9:00～12:00（予定）	小・中・高・ 中等・特支	「研修主任」「生徒指導主任」「教職員」

対面講座に参加できなくても後日配信されるオンデマンド教材で受講することもできますので奮ってお申し込みください！！
※対面講座に参加した方もオンデマンド教材で受講できるので振り返りに活用してください。



【申し込みフォームより申し込み願います】

申込期限：8月4日（金）16:00

（申し込みフォーム：<https://forms.office.com/r/a6gK6J745n>）



※10月以降の開講分（追加講習・オンデマンド配信）については、愛媛県総合教育センターの専用フォームにて申し込みます。詳細は愛媛県総合教育センター「研修のしおり」等をご確認ください。

（問い合わせフォーム：<https://forms.office.com/r/aZEJhQT3py>）

校内研修支援プログラムのポイント

【受講者の期待とニーズへの対応】

- ① 校内研修で、学校力を向上させたい方へ
- ② 指導力や専門性を高度化したい方へ
- ③ 対面のみならずオンラインでの学びを深めたい方へ

【ポイント①】

校内研修や自主研修等の指導者としての資質能力の向上を目指します。

【ポイント②】

学校の多忙感化に対応した教師のウェルビーイング向上型研修を目指します。

【ポイント③】 DXに対応した研修

受講者は、NTT EDX UniText（配信ソリューション）を活用して、受講後も、研修内容の動画、配布資料で学びを深めることができます。また、校内研修で、動画や資料を活用することができます。



電子教科書
教材配信

EDX UniText



【愛媛大学】校内研修支援プログラム（8月開講分）参加申し込みフォーム

申込期限：8月4日以降は定員を超え次第、終了いたします

愛媛大学は、愛媛県教育委員会（愛媛県総合教育センター）と連携し、8月に以下の研修を開講します。

これらの研修は後日、評価・分析し、校内研修支援や教員研修の高度化に繋げることを目的としております。

また、これまでの教員免許状更新講習や教育委員会との連携セミナー等から、教員のニーズの高い研修を基盤とした内容を選定しているため、この機会に是非受講いただき、ご自身の教員スキルの向上に活用いただくとともに本事業にご協力いただければと思います。

※講座は全て受講料無料です。

※当日はスマートフォン、ノートPC、タブレット端末などを持参ください。

※校内研修支援プログラムの講座の内、10月以降に開講する講座においては、愛媛県総合教育センターの研修管理システムより受け付けます（研修管理システムの2回目の申し込みは7月21日からとなっております）。

1. 参加する講座を選択してください（複数選択可）

※以下の講座は全て集合講座（定員30名）です。会場は愛媛大学教育学部を予定しています。駐車場はありませんので、自家用車での参加はご遠慮ください。

※詳細については申込後に通知いたします。

※現在は、研修②③のみ対応しております。*

①教職と省察－教師生活をふりかえり、これからを考える－（高橋 平徳）

【概要】

専門的な力量を向上させるためには、省察という視点が不可欠です。本研修では、教師生活の転機や教育観の変化を整理し、多様な学校種や年代の先生方とのワークを通して、教師生活を省察し、今後の教師生活に向けた行動目標や計画を設定します。

☐ 受付を終了しました

②主体的な学びを促進する「総合的な探究の時間」校内研修（向 平和）

【概要】

「習得・活用」に「探究」が加えられている。理科などでは課題研究等の実績があるが、他の教科へ拡大が必要である。本講座では、理科での先行事例を取り上げながら汎用的な課題設定の方法などを取り扱います。

☐ ②8月23日（水）9：00～12：00（予定）

③「教員が話す英語」と「子ども（児童）が話す英語」を磨く＆鍛えるための研修（池野 修）

【概要】

小学校「外国語（活動）」授業での効果的なティーチャーズ・トークやスモール・トーク（教員によるもの、児童同士によるもの）について、演習や実践動画の分析などを行いながら多面的に考えます。

☐ ③8月24日（木）9：00～12：00（予定）

④通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修（菊田 知則）

【概要】

通常の学級に在籍する子どもたちの多様な教育的ニーズに応えるために、特別支援教育・インクルーシブ教育の観点を取り入れた授業づくり等について考えを深めます。

☐ 受付を終了しました

【資料3】「校内研修支援プログラム（10・11月開講分）」周知用チラシ

【愛媛大学】校内研修支援プログラム（10月開講分）のお知らせ

～教員研修の高度化に資するモデル開発事業（文部科学省委託事業）～

愛媛大学は、文部科学省より令和5年度「教員研修の高度化に資するモデル開発事業」の委託を受けて「校内研修支援プログラム」と位置づけた以下の研修を開設します。

これらの講座は、受講生の学習状況、及び、研修内容等を分析し、今後の校内研修の支援や教員研修の高度化に繋げることを目的としております。

また、研修内容においては、過去の教員免許状更新講習や教育委員会との連携セミナー等から、教員の皆様からニーズの高かった研修を基盤とした内容を選定しております。

教員の皆様におかれましては、この機会に是非受講いただき、ご自身の教員スキルの向上に活用いただくとともに本事業にご協力いただきますようお願いいたします。

※講座は全て受講料無料です。

※当日はスマートフォン、ノートPC、タブレット端末などを持参ください。

No	講座名	講師名	開講日	校種	職種・教科等
①	主体的な学びを促進する「総合的な探究の時間」校内研修	向 平和	10月15日（日） 9:00～12:00（予定）	小・中・高・中等	全教科
②	イチから始める動画作成研修	大西 義浩 玉井 輝之	10月20日（金） 9:00～12:00（予定）	小・中・高・中等・特支	教職員
③	深い学びのある道徳科授業づくり研修	上地 完治	10月21日（土） 13:00～16:00（予定）	小・中	教職員
④	通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修	苅田 知則	10月26日（木） 9:00～12:00（予定）	小・中・高・中等・特支	教職員
⑤	保護者のクレームが相談にかわる生徒指導体制の確立	白松 賢	10月27日（金） 13:00～16:00（予定）	小・中・高・中等・特支	「研修主任」「生徒指導主任」「教職員」
⑥	教職と省察—教師生活をふりかえり、これからを考える—	高橋 平徳	11月10日（金） 9:00～12:00（予定）	小・中・高・中等・特支	教職員
⑦	「教員が話す英語」と「子ども（児童）が話す英語」を磨く＆鍛えるための研修	池野 修	11月17日（金） 9:00～12:00（予定）	小（中）	教職員
⑧	信頼とウェルビーイングを高める業務改善研修	露口 健司	11月18日（土） 9:00～12:00（予定）	小・中・高・中等・特支	教職員（学校管理職、教務主任、研修主任等）

対面講座に参加できなくても後日配信されるオンデマンド教材で受講することもできますので奮ってお申し込みください！！

※対面講座に参加した方もオンデマンド教材で受講できるので振り返りに活用してください。



【申し込み】

愛媛県総合教育センターの専用フォームより申込みが可能です。
詳細は愛媛県総合教育センター「研修のしおり」等をご確認ください。

https://center.esnet.ed.jp/kenshu_top

（裏面）資料1と同じため省略

【資料 4】 特別警報時の講座中止等をお知らせする「緊急告知確認フォーム」

【緊急告知確認フォーム】

本フォームは、緊急なお知らせがある場合にのみ使用

中止や変更があるなどをご確認ください。

参加予定の講座の前日には必ずご確認ください、ご自身が参加する講座について、特に
中止、変更などの記載がありましたときのみ、ご回答をお願いします。

連絡事項を以下のような形で随時追記いたします。

(8/17) 全講座は予定通り実施予定です。

※なお、この件に関して、返信の必要はありません。

(8/18) 8月21日の講座について、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

(8/23) 8月24日の講座について、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

1. 氏名を入力してください。【例：愛媛 太郎】*

回答を入力してください

2. 勤務校を入力してください。*

回答を入力してください

3. 電話番号を入力してください。※携帯電話など、つながりやすいものをご記入ください。

回答を入力してください

4. 参加予定の講座の日程を選択してください。*

日付を入力してください\yyyy/MM/dd)



5. 上記4の日程で開講される講座について、連絡事項を確認しました。*

☐ 確認しました。

+ 新規追加

【資料 5】「校内研修の実施の依頼、実施日等の連絡」のお願い

令和 5 年 8 月 21 日

関係小中高等学校・特別支援学校各校長 様

愛媛大学教職総合センター長

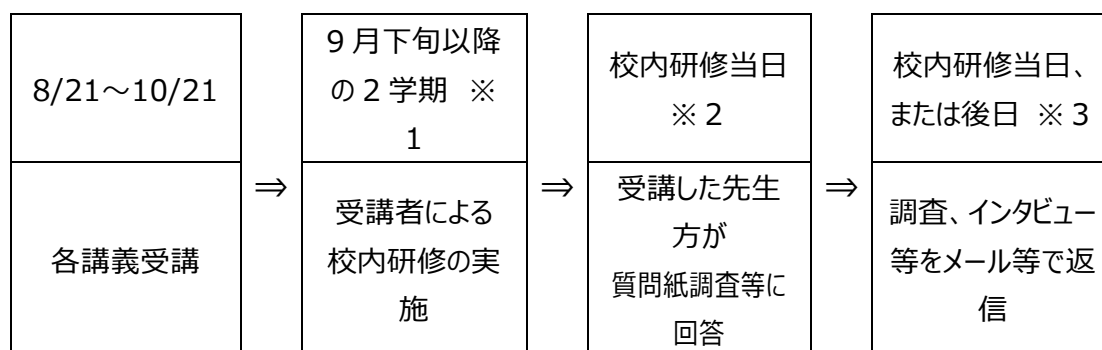
令和 5 年度「校内研修支援プログラム」における校内研修の実施の依頼、
及び本事業「校内研修支援プログラム」の実施日等のご連絡のお願い

このことについて、愛媛大学では、本事業【愛媛大学】「教材配信ソリューションを活用した校内研修支援・教員研修の高度化プログラム開発」を愛媛県教育委員会と共同で研究実践を進めておりますことはご存じの通りです。先日は、貴校教員を本研修に派遣していただき、心より感謝申し上げます。

つきましては、校内研修の希望について調査いたしたく存じます。期日等が決定し次第、担当の先生から下記 QR コードによりご連絡いただきますようお願いいたします。大変お忙しい中、誠に恐縮ですが、何卒よろしくお願いいたします。

記

1 講義受講後の校内研修、及び調査の流れ



※ 1 校内研修の方法については、研修当日にお渡しした開催要領を御覧ください。

※ 2 別紙 QR コードにより調査にご協力いただきます。

※ 3 調査内容、方法については未定です。依頼する場合には、改めてご連絡いたします。

2 校内研修期日のご報告

別紙のQRコードにより、速やかにご報告ください。

令和5年8月21日

各学校における校内研修講師の皆様

愛媛大学教職総合センター長

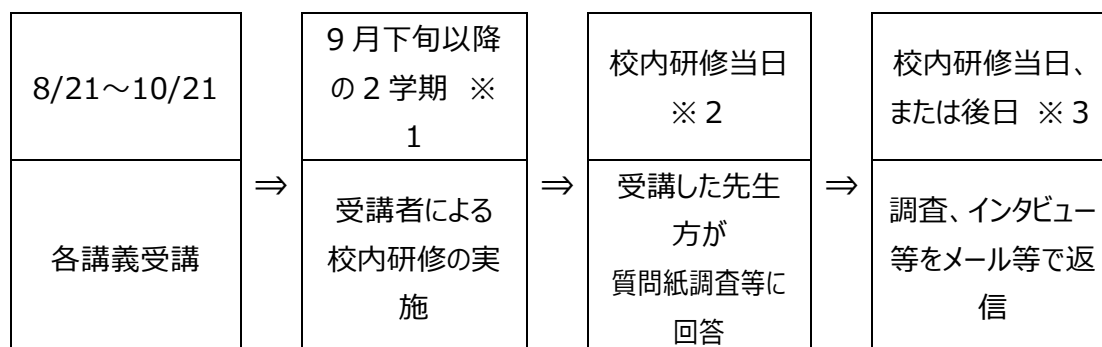
令和5年度「校内研修支援プログラム」における校内研修の実施の依頼、
及び本事業「校内研修支援プログラム」の実施日等のご連絡のお願い

この度は、公私ともにご多用中にもかかわらず、本プログラムにより校内研修の講師をお勤めいただき、誠にありがとうございます。お手数をおかけいたしますが、よろしくお願いいたします。

つきましては、校内研修の期日が決定し次第、下記 QR コードによりご連絡いただきますようお願いいたします。

記

1 講義受講後の校内研修、及び調査の流れ



※1 校内研修開催要領については、別紙を御覧ください。

※2 別紙 QR コードにより調査にご協力いただきます。

※3 調査内容、方法については未定です。依頼する場合には、改めてご連絡いたします。

※4 分割動画は完成し、確認段階に入っております。もう間もなく、皆様のログイン画面から閲覧が可能です。

2 校内研修期日のご報告

下のQRコードにより、速やかにご報告ください。

【愛媛大学】「教材配信ソリューションを
活用した校内研修支援プログラム」実施
日等のご報告用QRコード



【資料6】「校内研修支援プログラム各講義受講後の調査」のお願い

令和5年8月18日

受講者様

愛媛大学教職総合センター長

令和5年度「校内研修支援プログラム各講義受講後
の調査、並びに校内研修の実施についてのお願い

この度は、公私ともにご多用中にもかかわらず、本プログラムにご参加いただき、心より感謝申し上げます。

さて、このことについて、愛媛大学では、本事業【愛媛大学】「教材配信ソリューションを活用した校内研修支援・教員研修の高度化プログラム開発」を愛媛県教育委員会と共同で研究実践を進めております。このうち、講義内容の検証のためにQRコードへの回答による効果測定を実施することとしております。下記1の要領で、本研修終了後、速やかに実施していただきたく存じます。

また、本事業は、本研修内容が学校現場に生かされるものとなるよう、受講者による校内研修の実施とその効果測定について、御協力をお願いしているところです。

つきましては、校内研修の実施について御検討いただき、可能な場合は、下記2、3の要領で、後日お送りする調査への御協力をお願いいたします。

記

1 講義内容についての調査

これは、講義内容が受講者にとって日頃の教育活動の改善にどの程度役に立つことができるかの調査です。

- (1) 下のQRコードを読み取り、受講内容に関する選択肢・自由記述に速やか御回答ください。
- (2) ※印の内容をよく御覧いただき、誤りがないようにお答えください。
- (3) 今回の申込みの際に、連絡先、特にメールアドレスの誤りが多くみられました。ESnetメール、Gメール、Yahoo!メール、その他プロバイダーでのメールをお示しください。添付ファイルを受信できない携帯電話のメールアドレスはお控えください。

【本事業研修内容の評価票のQRコード】

【本事業研修内容の評価票のURL】

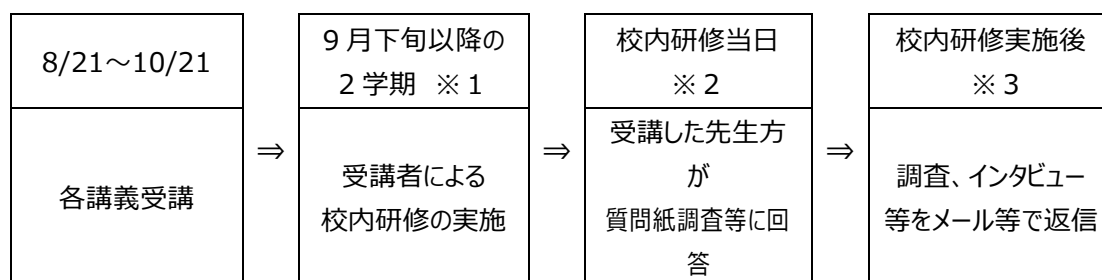
<https://forms.office.com/r/0eYU2pDDfM>

【愛媛大学】校内研修支援プログラム
(8月実施分)評価票



2 調査の概要（予定）

講義受講者が校内研修を行った場合のお願いです。その際に、校内研修によって日頃の教育活動の改善にどの程度役に立つかの調査をお願いします。この調査では、QRコードによる受講者の選択肢・自由記述による回答、校内研修実施者（今回各講義を受けた教職員）・学校で受講した先生方へのインタビュー等を予定しております。本講義受講者には校内研修をする際に支援可能となる資料等をUDXにて配信いたします。ただし、すべての受講者の方に自校で校内研修を実施することを求めているものではありません。



※1 校内研修開催要領については、別紙を御覧ください。

※2.3 調査内容、方法については未定です。詳細は、研修実施校にメール等でお送りいたします。

3 校内研修の実施と調査について

○ 校内研修の実施について、校長先生と御相談のうえ、実施が可能な場合には、速やかに御連絡ください。

○ 調査内容、方法の詳細については、校内研修実施校に、後日御連絡いたします。

【愛媛大学】「現代的課題対応実践力高度化プログラム」参加お申込みフォーム

申込期限：定員を超えたとき、開講1週間前を目途に締切といたします。

愛媛大学は、愛媛県教育委員会との協定のもと、松山市教育研修センターとの連携により開設します。

これらの研修は後日、評価・分析し、教員研修の高度化に繋げることを目的としております。

また、これまでの教員免許状更新講習や教育委員会との連携セミナー等から、教員のニーズの高い研修を基盤とした内容を選定しているため、この機会に是非受講いただき、ご自身の教員スキルの向上に活用いただくとともに本事業にご協力いただければと思います。

※講座は全て受講料無料です。

※当日はノートPC、タブレット端末のいずれかを持参ください。

※当日お渡しするEDXUniTextのログインID/パスワードはご自身で年度末まで管理してください。

※以下の講座は全て対面での講座です。

※受付は開講の45～15分前とします。

※WiFi、EDX Uni Textへの接続をいたしますので、遅くとも開講15分前までに会場にお越しください。

※駐車場はありませんので、自家用車での参加はご遠慮ください。

セクション 1

セクション 2

お申込みフォーム

※複数受講が可能です。

1. <研修C> 現代的課題対応実践「教育版マイクラフト活用入門」 富田英司氏

※ 下の1～5の5つの講座はすべて関連があります。単発での申込みは可能ですが、できり限り講座(1)～(5)のすべてにご参加ください。ただし、いずれかの講座にご参加いただきますと、後日<研修C>「教育版マイクラフト活用入門」全5回の資料の閲覧が可能です。

【会場】教育学部 2 号館1階模擬授業教室

(1) 対面受講① 10月19日（木） 18:00～19:30 -教育版マイクラフトの特徴と基本操作-

(2) 対面受講② 10月26日（木） 18:00～19:30 -マイクラフトを用いた教育実践例-

(3) 対面受講③ 11月9日（木） 18:00～19:30 -クラスルームモードの使い方-

(4) 対面受講④ 11月16日（木） 18:00～19:30 -マイクコードの使い方-

(5) 対面受講⑤ 11月30日（木） 18:00～19:30 -協同で問題解決に取り組む-

【資料 8】「校内研修支援プログラム(8 月、10・11 月)」(受講後)評価票主な評価項目

①	この研修はあなたにとって有意義でしたか。
A	大変有意義だった
B	有意義だった
C	あまり意義がなかった
D	全く意義がなかった
②	これまでの教育に対する本質的な見方・考え方(教育観、学習観、児童生徒観、授業観、研修観など)の捉え直しができましたか。
A	よくできた
B	できた
C	あまりできなかった
D	全くできなかった
③	これまでの自身の教育実践への省察や捉え直しができましたか。
A	よくできた
B	できた
C	あまりできなかった
D	全くできなかった
④	これからの自身の学びへの意欲が高まりましたか。
A	大変高まった
B	高まった
C	あまり高まらなかった
D	全く高まらなかった
⑤	所属校の発展・改善における自身の役割をとらえなおすことができましたか。
A	よくできた
B	できた
C	あまりできなかった
D	全くできなかった
⑥	所属校で校内研修を実施する意欲は高まりましたか。
A	大変高まった
B	高まった
C	あまり高まらなかった
D	実施したくない
⑦	今回の資料や講義内容は校内研修に活用できそうですか。
A	とてもできそう
B	できそう
C	あまりできそうにない
D	全くできそうにない
⑧	研修で用いられた資料等は、適切でしたか。
A	とても適切
B	適切
C	あまり適切ではない
D	全く適切ではない
⑨	最後に、全体を通じてお聞かせください。
⑩	本研修の問題点、課題や改善点があれば、御記入ください。

【資料 9】「現代的課題研修プログラム」(受講後)評価票主な質問項目

①	この研修はあなたにとって有意義でしたか。
A	大変有意義だった
B	有意義だった
C	あまり意義がなかった
D	全く意義がなかった
②	これまでの教育に対する本質的な見方・考え方(教育観、学習観、児童生徒観、授業観、研修観など)の捉え直しができましたか。
A	よくできた
B	できた
C	あまりできなかった
D	全くできなかった
③	これまでの自身の教育実践への省察や捉え直しができましたか。
A	よくできた
B	できた
C	あまりできなかった
D	全くできなかった
④	これからの自身の学びへの意欲が高まりましたか。
A	大変高まった
B	高まった
C	あまり高まらなかった
D	全く高まらなかった
⑤	所属校の発展・改善における自身の役割をとらえなおすことができましたか。
A	よくできた
B	できた
C	あまりできなかった
D	全くできなかった
⑥	新しい知見が得られましたか。
A	大変得られた
B	得られた
C	あまり得られなかった
D	全く得られなかった
⑦	今回のご自身の教育活動に生かせるものでしたか。
A	とても生かせる
B	生かせる
C	あまり生かせられない
D	全く生かせられない
⑧	主体的に参加できましたか。
A	とてもできた
B	できた
C	あまりできなかった
D	全くできなかった
⑨	最後に、全体を通じてお聞かせください。
⑩	本研修の問題点、課題や改善点があれば、御記入ください。

【資料 10】「校内研修支援プログラム」校内研修（受講後）評価票主な質問項目

【研修講師用】

⑨ 研修講師を務めて有意義でしたか。

A とても有意義だった B 有意義だった C あまり有意義ではなかった D 全く有意義でなかった E 受講者

⑩ このような機会があればまた研修講師を務めてみたいですか。

A とてもあてはまる B あてはまる C あまりあてはまらない D 全くあてはまらない E 受講者

⑪ 本研修の EDX ソリューションを活用した研修は研修内容の理解に効果的だと思いますか。

A とてもそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない E 受講者

⑫ EDXソリューションを活用した本研修は、他の研修に比べて、他の先生方への伝達や周知が簡単にできましたか。

A とてもそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない E 受講者

【全員の先生方に】ワーク・エンゲイジメントに関する問いについて、お答えください。

⑬ 仕事をしていると、活力がみなぎるように感じる。

A 大いにあてはまる B あてはまる C あまりあてはまらない D 全くあてはまらない

⑭ 仕事に熱心である。

A 大いにあてはまる B あてはまる C あまりあてはまらない D 全くあてはまらない

⑮ 私は仕事にのめり込んでいる。

A 大いにあてはまる B あてはまる C あまりあてはまらない D 全くあてはまらない

⑯ よかった点があればお書きください。

⑰ 本校内研修支援プログラムの課題・問題点をお書きください。

⑱ 改善策をお書きください。

【資料 11】「校内研修支援プログラム」調査対象校におけるインタビューガイド

令和 5 年 12 月 14 日

「【愛媛大学】校内研修支援プログラム」についてのインタビューガイド

愛媛大学教職総合センター本事業担当者

Ⅰ 研修実施者へのインタビュー要領・項目

本プログラムは文科省の委託授業実施しており、今後の研修等の在り方をよりよく改善するために役立てたく、いくつかご質問をさせていただきます。

校内研修実施後に QR コードにてアンケート調査に、この後お答えいただきます（または、既にお答えいただいておりますが）、先生のお声をさらに詳しく聞かせてください。（※大きい●が特に重要だと考えています。）

1 反応（満足度）について（やってみた率直な感想）

- 今回校内研修担当者として実施してみた率直な感想をお聞かせください（出来栄や達成感等）。
- 今回校内研修担当者として研修を行うために、愛媛大学での校内研修プログラムを受講されていると思います。受講されていてよかったと思われませんか。

2 学習や行動について（大学での校内研修プログラムの受講がご本人の成長になっているかどうか）

- 愛媛大学での研修で得られた知識や考え方がご自身の意識や行動に影響を与えていますか（受けたプログラムの内容が自分自身の身になっているかどうか）。
- 愛媛大学での研修で得られた知識やグループワーク（ファシリテーション）の方法は、今回研修を担当する上で生きていますか、参考になっていることがありますか（校内研修担当者として校内研修プログラムが身になっているかどうか）。

3 結果について（組織への波及、組織にもたらした価値）

- 今回研修を担当され研修を行われましたが、研修の内容が他の教員に伝わることで校内をよくしていくことにつながっていくと思いますか（保護者のクレームが相談にかわる生徒指導体制の確立や、信頼やウェルビーイングを高める業務改善、特別支援教育の観点を入れた授業づくりなど行なった校内研修にそって）。

4 負担軽減について

- 今回ご自身が校内研修を担当するにあたって、ご自身が事前に大学で校内研修プログラムを受けてきて、教材配信ソリューションに用意されている動画や資料、ワークシートを活用されたと思いますが、1 から自分で企画を考え自己学習して実施するのに比べ、負担の違いはどのくらいありますか。どのくらい研修を行う準備においての負担は軽減されていると思われませんか。

5 校内研修プログラムの継続について

- それで最後に今後もこうした校内研修プログラムが継続されたり、教材配信ソリューションに動画や資料が継続して利用できたりしたらよいと考えますか。

6 校内研修プログラムの改善点やテーマへの希望

- 校内研修プログラムの改善点や疑問に思っていること、今後こうしたプログラムが継続された場合どのようなテーマがあればよいと思われますか。

以上でインタビュー調査は終わりです。長時間、ありがとうございました。

II 研修受講者へのインタビュー要領・項目

本プログラムは文科省の委託授業実施しており、今後の研修等の在り方をよりよく改善するために役立てたく、いくつかご質問をさせていただきます。

校内研修実施後に QR コードにてアンケート調査にお答えいただきますが（既にいただいておりますが）、先生のお声をさらに詳しく聞かせてください。（※ 大きい●が特に重要だと考えています。）

【愛媛大学】「校内研修支援プログラム」校内研修後アンケート調査票

- (1) 研修は有意義だったか
- (2) わかりやすかったか、工夫されていたか、適切だったか
- (3) 資料は適切だったか
- (4) 自分自身の教育（内容）に対する見方・考え方をとらえなおすことができたか
- (5) 受講前より内容に興味が深まり、自らの学ぶ意欲が高まったか
- (6) このことにより、教育向上、改善に対して力を発揮したいと思うか
- (7) 研修を受けてきた同僚による研修は理解が深まったか
- (8) EDXUniText を使用しての研修は理解が深まったか
- (9) 校内研修プログラムの改善点や疑問点、今後こうしたプログラムが継続された場合どのようなテーマがあればよいか

※ 上の表 (1)～(8)が、校内研修後に実施する、または、既に行っている、アンケート調査の項目です。基本的には、これに沿ってお話を伺ってください。また、そう考えた理由等を聞いていただければ幸いです。（こうすればそうなったろうというような改善策等も可。）話の流れで聞いていただいて結構です。

以上で終わりです。ありがとうございました。

【資料 12】 「校内研修支援プログラム」 調査対象校 A における聞き取り

	N0	1	5
1	講座名	通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修	通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修
2	役職	特別支援学級担任	校長
3	年代 ※大体で構いません	30	55
A1	①研修を実施してみた率直な感想はどうか	やってみてよかった。先生方がとても意欲的に取り組んでくださったので、とてもやりやすかった。●●先生の動画も何度も見せて頂いて、自分自身も勉強になった。かなり、やりやすいように変えさせて顶いた。	先生方が熱心に受けていただいていたと思う。私自身、先生方に合理的配慮の話はずっとしていたので、今回の研修の意義は分かっていたと思っていただけたと思う。がまんしなさい」ではないんだということを今回の研修で紹介して頂いたので、私のねらいは達成できたと思う。●●先生は熱心な先生で、特別支援担当は3年目ですが、とても熱心な先生です。
A2	②受講がご本人の成長になっているかどうか ご自身の意識や行動に影響を与えたか	。知らなかったこともわかったし、資料も全部頂いて、勉強になった。	迷路のワークができにくかったのですが、あのワークで子どもの気持ちがわかるんだと思った。動画の最後のシーンは、ものの見方が変わるいい内容だった。リアルでいいですね。
A3	③組織への波及、組織にもたらした価値はどうか 校内をよくしていくことにつながっていくか	疑似体験が大きくて、掃除の仕方などもできない子がいて、何でできないと思ってしまったけど、疑似体験して、行きたい方向に行きたくてもいけないんだということが分かって子どもに寄り添うことも以前よりできるようになっているのではないかなと思っている。	学校運営に役立つ。
A4	④ご自身が担当して行うことと比較して、負担は軽減されたか	1から研修を企画することは無理である。●●先生の資料あってこそその研修ができて負担軽減になり、有り難かった。	負担軽減につながっていると感じる。
A5	⑤本プログラムを継続するか否かの意見はあるか	継続していただいたら、有り難い。	今後も継続してほしい。
B1	⑥研修は有意義だったか	有意義だった。	忙しすぎて、時間確保が難しく、校長としては、ミライムを活用したり、個別のコメントを返したりすることをしているが、時間を確保しての研修はできていないのが実態である。今回は校長の思いもあつての研修で、久しぶりにやったという研修である。今回のような研修は年に数回やってもいいと思う。
C	⑦校内研修プログラムの改善点や疑問点、今後こうしたプログラムが継続された場合どのようなテーマがあればよいか	著作権の問題があつて、先生方に見て頂きたい動画があつたが、それが見えればいいなとは思つた。	バラエティあるプログラムがあつて、学校経営に即して、選択できるようなものがあれば有り難い。後は、先生方がこの研修を受けて指導の在り方が変わってくれればと願っている。

	N0	2	3	4
1	講座名	通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修	通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修	通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり研修
2	役職	2年学級担任	交通安全担当	2年学級担任
3	年代 ※大体で構いません	43	28	25
B2	①わかりやすかったか、工夫されていたか、適切だったか	視覚的にはとても分かりやすかった。	パワーポイントも適切だったので、分かりやすかったです。	生徒の気持ちもよくわかって、わかりやすかった。
B3	②資料は適切だったか	いろんな生徒がいるので、対応していかなければいけないというのは分かっているが、実際、生徒はどんな形で見えているのかというのが、動画を通して、分かりやすく理解できた。疑似体験も盛り上がってはいたが、実際、自分がそういう立場だったら、つらいんだろうなということを感じた。	実際にやってみて、生徒の気持ちも理解できてよかった。隣の先生と一緒にやれて学べました。実体験がよかった。	よかった。
B4	③自分自身の教育（内容）に対する見方・考え方をとらえなおすことができたか	今日の研修で、見えてなかったこともたくさんあったかという思いがあった。	気にかけながらやっていきたいと思った。	見直すことはたくさんあるなと思った。
B5	④受講前より内容に興味が深まり、自らの学ぶ意欲が高まったか	受ける前は、どんなことをするんだろうという気持ちだったけど、いろんな研修は必要だな、自分の成長にもつながるなということを思いました。	新しい内容を知ったので、生かしたいいなと思った。印象に残ったのは、生徒の見え方などである。	これから通常学級に特別支援を必要とする生徒も増えてくるので、そういう知識はいるのかなと思った。
B6	⑤このことにより、教育向上、改善に対して力を発揮したいと思うか	一人一人が抱えている困難に向き合っていかなければならないということを感じた。	今まで、気にかけていたこともあったけど、より気にかけたと思った。	発揮したいと思う。
B7	⑥研修を受けてきた同僚による研修は理解が深まったか	同じ職場の仲間であるので、協力しながらやっていけたらいいなと思った。	普段一緒に働いている先生なので、入りやすかった。	この後とも質問もできるので、よかった。
B8	⑦EDXUniTextを使用しての研修は理解が深まったか	分かりやすかった。	深まった。	動画もあって、分かりやすかった。
C	○校内研修プログラムの改善点や疑問点、今後こうしたプログラムが継続された場合どのようなテーマがあればよいか	数学と国語だったけど、他教科の事例もあつたらいいと思った。交流で入ってくる生徒との対応の仕方についての研修があつたらいいと思った。	通常学級の立場で勉強になったが、全体で指導しきれないときに、個々でどのように指導すればいいのかが難しいなと今回の研修で深く思ったので、そういう風にしてほしいかなということを感じた。	各教科などがあつたらいい。



Teacher Development Support Room, EHIME UNIVERSITY